香北町埋蔵文化財発掘調査報告書第２集

高知県香美郡香北町

# 美良布遺跡

１９９１．４

香北町教育委員会

# 美 良 布 遺 跡

1 9 9 1 . 4

香 北 町 教 育 委 員 会

美　良　布　遺　跡

# 序

香北町は，かつて韮生郷と呼ばれ古くから人々が住み，さわやかで純朴な気風の漂う山峡のまちであります。

美良布遺跡は，昭和44年国道195号線バイパス工事の際に発見された縄文時代から弥生時代にかけての遺跡です。当時県下では縄文晩期に属する遺跡が極めて少なくその内容が注目されるところとなりました。またこの遺跡の近くの美良布神社には，弥生時代の銅鐸２個が完全な形で保存されております。

今回の調査は，遺跡範囲の一部に香北町が健康センター（仮称）を建設することになり，その工事によって貴重な遺跡が破壊される前に記録保存をすることを目的に実施されたものであります。

このたびの調査による各種の発見は，今日の香北町を築いた先人達の営みを伝える貴重な資料として，極めて意義深いものであります。今後広く活用されるものと信じます。

おわりに調査にあたって終始懇切なご指導と協力を賜りました高知県教育委員会の出原恵三氏・郷土史家（故）松本実氏並びに関係者の皆様方に心から感謝を申し上げる次第であります。

平成３年４月

香北町教育委員会

教育長　武　内　昭　道

# 例　　言

1．本書は，香北町教育委員会が平成元年～３年に実施した美良布遺跡の発掘調査報告書である。

2．所在地　高知県香美郡香北町美良布ヘイ

3．調査面積　6200㎡

4．調査体制

調　査　員　出原恵三（高知県教育委員会）試掘調査及び本調査（第Ⅰ～第Ⅴ区調査区）

〃　　前田光雄（　　〃　　）本調査（第Ⅰ～第Ⅲ調査区）

〃　　山下英雄（　　〃　　）　〃　（第Ⅴ調査区）

〃　　曽我貴行（高知県立埋蔵文化財センター）本調査（第Ⅵ調査区）

〃　　坂本憲昭（　　〃　　）　　〃

調査補助員　小松幹典

庶務担当　明石泰州（香北町教育委員会）

5．調査期間

(1)　試掘調査　平成元年５月８日～５月11日

(2)　本調査　　平成２年１月16日～４月30日　（第Ⅰ～第Ⅴ調査区）

〃３年４月８・９日　　（第Ⅵ調査区）

6．本書の執筆及び編集は出原恵三が行った。また第Ⅵ調査区は遺構・遺物共に僅少であったので本書からは割愛した。第Ⅵ調査区の結果については曽我貴行が香北町教育委員会・高知県教育委員会に別途報告を行っている。

7．調査の実施にあたっては香北町総務課の笹正憲氏に諸々の便宜を計って頂いた。また現場作業に従事して頂いた百田建設・地元作業員の方々に対して厚く感謝の意を表したい。

8．遺物整理・実測図作成等においては，浜田雅代，宮地佐枝氏の協力を得ることができた。

9．花粉分析は，高知大学理学部山中三男教授にお願いし，玉稿を頂いた。

# 本　文　目　次


第Ⅰ章　調査に至る経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 2

第Ⅲ章　調査の方法 …… 5

第Ⅳ章　調査成果 …… 7

1　第Ⅰ調査区 …… 7

(1)　基本層序 …… 7

(2)　縄文時代の遺構と遺物 …… 11

(3)　中世の遺構と遺物 …… 12

①　掘立柱建物 …… 12

②　土　　坑 …… 16

③　ピット出土の遺物 …… 19

④　包含層出土の土器 …… 22

2　第Ⅱ調査区 …… 24

(1)　基本層序 …… 24

(2)　縄文時代の遺構と遺物 …… 27

(3)　中世の遺構と遺物 …… 31

①　掘立柱建物 …… 31

②　土　　坑 …… 32

③　溝 …… 36

④　ピット出土の遺物 …… 37

⑤　包含層出土の遺物 …… 39

3　第Ⅲ調査区 …… 45
(1)　中世の遺構と遺物 …… 45
①　土　　坑 …… 45
②　ピット出土の遺物 …… 51
③　包含層出土の遺物 …… 55
4　第Ⅳ調査区 …… 57
(1)　ＳＫ５ …… 58
(2)　ピット出土の遺物 …… 58
(3)　包含層出土の遺物 …… 60
5　第Ⅴ調査区 …… 60
(1)　基本層序 …… 60
(2)　縄文時代の遺構と遺物 …… 61
(3)　中世の遺構 …… 64
(4)　ＳＸ …… 64
(5)　包含層出土の土器 …… 68
第Ⅴ章　考　察 …… 72
第Ⅵ章　高知県香美郡香北町美良布遺跡の縄文晩期堆積物の花粉分析 …… 82

# 挿　図　目　次


Fig 1　周辺の遺跡 …… 3

Fig 2　調査風景 …… 5

Fig 3　調査区位置図 …… 6

Fig 4　第Ⅰ調査区基本層序位置図 …… 7

Fig 5　第Ⅰ区基本層序 …… 8

Fig 6　第Ⅰ区検出遺構全体図 …… 9～10

Fig 7　第Ⅰ区縄文時代のピット，平面及び断面図 …… 11

Fig 8　第Ⅰ区Ｐ64出土土器 …… 13

Fig 9　第Ⅰ区ＳＢ１平面図 …… 14

Fig 10　第Ⅰ区ＳＢ２平面図 …… 15

Fig 11　第Ⅰ区ＳＢ２柱穴出土の土器 …… 16

Fig 12　第Ⅰ区ＳＢ３平面図 …… 17

Fig 13　第Ⅰ区ＳＫ１，４～11平面及び断面図 …… 18

Fig 14　第Ⅰ区ＳＫ９出土の土器 …… 19

Fig 15　第Ⅰ区ＳＫ10，11，18，19 出土の土器 …… 19

Fig 16　第Ⅰ区ＳＫ17～24，29，30，42 平面及び断面図 …… 20

Fig 17　第Ⅰ区ＳＢ３及びピット出土の土器 …… 21

Fig 18　第Ⅰ区遺物包含層出土の土器 …… 22

Fig 19　第Ⅱ区基本層序位置図 …… 24

Fig 20　第Ⅱ調査区遺構全体図 …… 25～26

Fig 21　第Ⅱ区基本層序 …… 27

Fig 22　第Ⅱ区Ｐ10出土の縄文土器 …… 28

Fig 23　第Ⅱ区縄文時代の遺構 …… 29

Fig 24　第Ⅱ区縄文時代の遺構 …… 30
Fig 25　第Ⅱ区ＳＢ１平面図 …… 31
Fig 26　第Ⅱ区ＳＢ２平面図 …… 32
Fig 27　第Ⅱ区ＳＢ１・２，ＳＫ12・19，ＳＤ１出土の土器 …… 33
Fig 28　第Ⅱ区中世の土坑 …… 35
Fig 29　第Ⅱ区中世の土坑及びピット …… 36
Fig 30　第Ⅱ区出土の土師器皿Ⅰ類 …… 38
Fig 31　第Ⅱ区ピット出土の土師器皿Ⅱ類 …… 39
Fig 32　第Ⅱ区ピット出土の土師器皿Ⅲ類 …… 40
Fig 33　第Ⅱ区土師器皿Ⅳ類，他 …… 41
Fig 34　第Ⅱ区ピット出土の輸入陶磁器と瀬戸 …… 41
Fig 35　第Ⅱ区ピット出土の土師器，瓦質の鍋 …… 42
Fig 36　第Ⅱ区包含層出土の遺物：土師器 …… 43
Fig 37　第Ⅱ区包含層出土の遺物：青磁その他 …… 44
Fig 38　第Ⅲ区遺構全体図 …… 46
Fig 39　第Ⅲ区土坑出土の遺物 …… 48
Fig 40　第Ⅲ区土坑平面及び断面図 …… 49
Fig 41　第Ⅲ区土坑平面及び断面図 …… 50
Fig 42　第Ⅲ区ピット出土の土器 …… 52
Fig 43　第Ⅲ区包含層出土の土器 …… 53
Fig 44　第Ⅲ区包含層出土の土器 …… 54
Fig 45　第Ⅳ区遺構全体図 …… 57
Fig 46　第Ⅳ区ＳＫ５ …… 58

Fig 47　第Ⅳ区ＳＫ５出土の土器 …… 59
Fig 48　第Ⅳ区ＳＫ１～４．６．７平面及び断面図 …… 59
Fig 49　第Ⅳ区ピット及び包含層出土土器 …… 60
Fig 50　第Ⅴ区発掘区及び基本層序位置図 …… 61
Fig 51　第Ⅴ区基本層序 …… 62
Fig 52　第Ⅴ区Ｐ１出土の縄文土器 …… 63
Fig 53　第Ⅴ区ＳＫ１・８出土の縄文土器 …… 64
Fig 54　第Ⅴ区遺構全体図 …… 65～66
Fig 55　第Ⅴ区縄文時代のピットと土坑 …… 67
Fig 56　第Ⅴ区包含層出土の土器 …… 69
Fig 57　第Ⅴ区縄文時代及び中世の土坑 …… 69
Fig 58　第Ⅴ区ＳＸ１・２・３ …… 70
Fig 59　第Ⅴ区ＳＸ４・８・９ …… 71

# 写 真 図 版 目 次


PL 1　第Ⅰ区完掘状況（南から）…… 87

第Ⅱ区完掘状況（東南から）…… 87

PL 2　第Ⅲ区完掘状況（東から）…… 88

第Ⅳ区完掘状況（南東から）…… 88

PL 3　第Ⅴ区完掘状況（南から）…… 89

第Ⅴ区ＳＸ群検出状況（西から）…… 89

PL 4　第Ⅱ区ＳＢ１完掘状況…… 90

第Ⅱ区ＳＢ１－Ｐ10土師器坏出土状況（70）…… 90

PL 5　第Ⅰ区Ｐ64浅鉢出土状況（10）…… 91

第Ⅱ区Ｐ10中層河原石出土状況…… 91

PL 6　第Ⅱ区Ｐ46土師器皿出土状況（127）…… 92

第Ⅱ区Ｈ４－２区土師器鍋出土状況（158）…… 92

PL 7　第Ⅳ区ＳＫ５半截状況…… 93

第Ⅳ区ＳＫ５遺物出土状況…… 93

PL 8　第Ⅳ区ＳＫ５土師器坏出土状況…… 94

第Ⅳ区Ｐ24床面出土の遺物…… 94

PL 9　第Ⅳ区Ｐ25土師器小皿出土状況（262）…… 95

同　　上…… 95

PL 10　第Ⅲ区Ｐ２土師器坏出土状況（211）…… 96

第Ⅴ区ＳＫ８縄文深鉢出土状況（283）…… 96

PL 11　第Ⅴ区Ｐ１上層遺物出土状況…… 97

第Ⅴ区Ｐ１中層遺物出土状況…… 97

PL 12　第Ⅴ区Ｐ１遺物出土状況 …… 98
　　第Ⅴ区ＳＫ１ …… 98
PL 13　第Ⅴ区包含層出土土師器（287） …… 99
　　第Ⅴ区ＳＫ20 …… 99
PL 14　発掘調査風景 …… 100
　　同上　第Ⅱ区 …… 100
PL 15　縄文・弥生土器（10・244・278）及び土師器（20・90・127・288）・瓦器（45） …… 101
PL 16　土師器坏・皿 …… 101
PL 17　縄文晩期土器深鉢 …… 102
PL 18　　〃　　浅鉢 …… 102
PL 19　青　　磁 …… 103
PL 20　白磁，青磁 …… 103

# 第Ⅰ章　調査に至る経過

近年，急速に進行しつつある人口の都市集中化現象は，山間地域における過疎と高年齢化という二重の構造的変化をともなって列島規模の社会問題となり，さまざまな波紋を投げかけつつある。この問題は，総面積の85％が山林によって占められ，主要産業の大部分を農林業が占めている香北町においても例外ではない。かつて私たちの先人が，額に汗して山腹の高くまで開墾した田，畑の中には植林されたり雑草の繁茂するにまかせるようになったところも決して少なくない。このような事態の進行する中で町民の中には，それぞれの立場から積極的に町おこしや活性化に取り組んでいる方々もいる。過疎対策に取り組み魅力ある町づくりを進めることは町行政に課せられた大きな任務の一つである。今度実施されることとなった「健康センター」建設の事業は「山村高齢化の健康問題に町を挙げて挑戦し，明るく楽しい活力ある長寿の町づくり」を目指し，広く近隣の町村にも利用をはたらきかけ健康を通して交流をはかって行くものである。

「健康センター」建設予定地内である香北町美良布字ヘイ他には，物部川中・上流域で最大の規模を誇る美良布遺跡が所在している。美良布遺跡は昭和44年の発見以来県下では極めて例の少ない縄文時代晩期に遡る遺跡であることが判明し，その後の調査において弥生時代にも連続して営まれた遺跡であることが明らかになっている。しかし，正確な遺跡の範囲や遺構，遺物包含層の深度などについては不明な点が多かった。

そこで文化財保護部局である香北町教育委員会は，平成元年５月に国道195号線以南の地区について試掘調査を実施した。その結果，近世以降の耕地整理などにおいて地形が改変されている場所もあるものの「健康センター」予定地のほとんどすべての範囲から遺物包含層や遺構の存在が確認された。従って工事が計画通り実施されることになれば，遺跡が大きく破壊されることは避けられない状況に至った。美良布遺跡は，香北町の歴史のみならず物部川流域の発達史を明らかにする上で重要な遺跡であると同時に，町民共有の財産である。香北町教育委員会は，遺跡保護の立場から開発部局である同総務課と協議を行ったが，「健康センター」の公共的性格から立地，便利さなどを考えれば他に条件を満たす土地がないことから，「健康センター」予定地内の遺跡範囲6200㎡について全面発掘調査を実施し記録保存を行うことに決した。発掘調査の実施にあたって，香北町教育委員会は高知県教育委員会に専門調査員の派遣を依頼し，県教委の指導のもとに調査を実施することになった。発掘調査は，平成２年１月16日から４月28日まで実施し，用地買収の都合で実施できなかったところを平成３年４月９日，10日に実施した。

# 第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

美良布遺跡の所在する香北町美良布は，町内を南北に二分して流れる一級河川物部川によって形成せられた河岸段丘上に開けたところにある。物部川は徳島県との県境近くの標高1,893mをピークとする三領山系に源を発し，中流域に幾つもの河岸段丘を形成しながら物部村，香北町，土佐山田町を貫流する。土佐山田町神母木付近で山塊が跡切れ，急に川幅を広げて香長平野を潤し土佐湾に注ぎ込んでいる。物部川には第二次世界大戦後に３つの水力発電所が設置されたが，それまでは，高知市内や下流域と中・上流地域を結ぶ物資流通の要路として重要な役割を果たしてきた。中流域に形成せられる河岸段丘は，左岸により広く発達し右岸に狭いという地形的な特徴を造り出している。この現象は，後述するように立地する遺跡数とも深い関係を有しているが，この違いは右岸すなわち北岸が峻険な秩父帯が走っているのに対して，左岸は比較的緩やかな四万十帯に属するところに原因がある。従って南北から物部川に注ぎ込む支流も北側の支流は直線的で急流渓谷をなしているのに対して，南からの支流は蛇行を繰り返し，河岸段丘上に小扇状地を形成している。

美良布遺跡付近の標高は約120m，物部川の川面との比高差は20mを測る。従って生活や灌漑用の水源を物部川本流に求めることは困難であり，上述の支流に頼らざるをえない。美良布は物部川左岸に発達した最も大きな河岸段丘であるが，西から岩川改川，大掘谷，川上谷などが南から流れ出ており，これらの小河川が造り出した小扇上地には，太郎丸遺跡，堂の前遺跡，東笹岡遺跡，そして美良布遺跡が立地している。これらのうちで発掘調査が実施されているのは美良布遺跡のみであるが，遺物の散布状況から見て弥生時代～中世に属している。河岸段丘に立地する遺跡の多くは，これら小河川を生命の泉として深いかかわりをもちながら集落を営んできたのである。これらの中で川上谷が最も安定した扇状地を提供しており，周辺の中にあって中心的な役割を果たしてきたことは，遺跡内の式内社美良布神社が鎮座していることからも明らかである。また近世以降においても川上谷が如何に付近の水田開発の為に供して来たかということは「新田井筋図面」によく表れている(1)。

美良布遺跡は，1969年１月国道195号線バイパス工事の際に偶然発見されたものである(2)。県教委と香北町教育委員会によって数日間の調査が実施された結果，縄文晩期前半の土器や弥生中・後期土器が確認された。わけても前者については，それまで唯一土佐町の八反坪遺跡で認められていたのみであり，俄に注目されるようになった(2)。その後1986年川上神社西側で実施した発掘調査では，弥生前期に遡る遺跡であることが明らかとなった(3)。物部川流域における弥生前期の遺跡は，現在田村遺跡群と美良布遺跡のみである。また当遺跡周辺からは，各種の土器片と共に石鏃などが表採されており，地元の明石元治氏は工事現場から弥生時代の鉈を発見している(4)。これまで美良布遺跡については本格的な発掘調査が実施されたことはなかったが，以上のような経過から考えて，縄文晩期に最初の営みが始まり，以後農耕社会が成立する弥生時代全般を通して継起的に発展した集落であったと考えられる。物部川中流域で終始拠点的な集落としての機能を果たし周辺

| No. | 遺跡名 | 時代 | No. | 遺跡名 | 時代 | No. | 遺跡名 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 美良布遺跡 | 縄文～中世 | 8 | 日ノ御子経塚 | 中世 | 15 | 吉野城跡 | 戦国 |
| 2 | 太郎丸 〃 | 弥生～中世 | 9 | 有瀬城跡 | 戦国 | 16 | 仁井国遺跡 | 縄文～中世 |
| 3 | 萩野城跡 | 戦国 | 10 | 西オソバ遺跡 | 弥生～中世 | 17 | 西の町 〃 | 中世 |
| 4 | 堂の前遺跡 | 弥生～中世 | 11 | 朴ノ木城跡 | 戦国 | 18 | 五反田 〃 | 弥生～中世 |
| 5 | 五百蔵 〃 | 〃 | 12 | 宮ノ前遺跡 | 中世 | 19 | 永野城跡 | 戦国 |
| 6 | 東笹岡 〃 | 〃 | 13 | 朴ノ木 〃 | 弥生～中世 | 20 | 柳の本遺跡 | 古墳～中世 |
| 7 | 中屋敷 〃 | 〃 | 14 | 前田の土居〃 | 中・近世 | 21 | 谷相城跡 | 戦国 |

Fig1　周辺の遺跡

地域に対して影響力をもった集落であったことが考えられる。このことは川上神社に社宝として伝わっている2個の銅鐸（共に突線鈕式）によっても裏付けられる。この銅鐸は竹内重意（1794～1868）遺稿によると，川上神社の南にあったとされる金洞寺にあったものとも言われるが(5)，出土地点や川上神社に納められた時期などについては不明である。ただ国学者谷秦山が元禄15年に記した「拝参大川上美良布神社　口占」『秦山集』(6) に2個の銅鐸についての記載があることから元禄15年（1702年）にはすでに川上神社に寄進せられていたことになる。また『土陽渕岳志』によるとこれらの銅鐸は，近世以降村人たちによって天乞いの時に使用されていたと言うことである(7)。川上神社も金洞寺も美良布遺跡の中にあり，この銅鐸がどこか遠隔地から持ち込まれたものでないかぎり美良布遺跡かその周辺から出土したと考えるべきであろう。従って，美良布遺跡は弥生時代後期には2個の銅鐸を有するまでの集落に成長していたことを物語るものであり，南四国における弥生後期社会の展開の中で政治的にも重要な位置を占めていたことが考えられる。

周辺の弥生時代の遺跡としては，物部川左岸に野中遺跡，右岸においては五百蔵遺跡や朴ノ木遺跡などを挙げることができる。これらの遺跡は発掘調査を行っていないが朴ノ木遺跡からは過去に弥生後期土器が出土している。古墳時代に属する遺跡は全くわかっていない。古代についても不明な点が多いが，上述の川上神社や物部川上流の槇山川流域に式内社小松神社が鎮座すること，更に物部村神池に「朝野群載」(8) に記載のある神通寺跡があることなどから養老2年（718）に開かれた阿波から土佐に入る官道（南海道）を物部川沿いに比定する説もある(9)。鎌倉時代になると大忍庄韮生郷に属し，以後中・近世を通して韮生郷の記載が散見される。戦国期に至ると物部川に臨む要所に白川城・五蔵城・吉野城など町内に6個所の山城や平城が築かれ，これらの中には城主の判明しているものが多い。彼ら土豪たちの多くは先づ土佐の七雄の一人山田氏に仕えるが，同氏滅亡後は長宗我部氏に臣従している。

註

(1) 松本　実『香北町史』香北町教育委員会

(2) 岡本健児・広田典夫『美良布遺跡発掘調査報告書』香北町教育委員会

(3) 出原恵三「美良布遺跡の再検討」『土佐史談』 177号　土佐史談会　1988年

(4) 出原恵三「美良布遺跡出土の鉈について」『土佐史談』 166号　土佐史談会　1984年

(5) 松本　実『香北町史』香北町　1968年　所収

(6) 谷重　遠『秦山集』谷氏蔵版　高知県立図書館蔵

(7) 岡本健児『土佐神道考古学』高知県神社庁　1987年

(8) 前田和男『土佐古代史の研究』高知市民図書館　1975年　所収

(9) 前田和男「古代土佐の官道について」『高知の研究』 2　清文堂　1982年

# 第Ⅲ章　調査の方法

## 試掘調査

平成元年５月８日～５月11日　健康センター敷地予定地全体を対称として２ｍ×２ｍのグリットを30個設定し，遺構や遺物包含層の広がりを確認した。その結果予定地の西半分に遺物遺構が全く認められず，また中央部分の一部は後世の撹乱を激しく受けていることが判明したがそれ以外の区域については全面調査が必要であるとの結論に達した。

## 本　調　査

平成２年１月16日～４月30日及び平成３年４月８・９日調査の便宜上調査対象区を現状の水田区画を基準に第Ⅰ～第Ⅵ調査区に分けた。(Fig　3）そして調査区全体を対象として磁北を基準に任意にＸ軸（南北方向），Ｙ軸（東西方向）を設定し，20m毎に南北方向にアルファベットを付し，東西方向には数字を付して大グリットを設定した。大グリットの中は更に４ｍ毎に番号を付し遺物取り上げ及び遺構実測のための基準とした。発掘調査の実施にあたっては耕作土及び床土は重機で掘削し，それより下層は人力で下げたが，遺物の僅少な包含層については一部重機を用いた。基本層序及び遺構の実測は原則として20分の１で作製したが，遺物出土状況など重要と考えられるものについては10分の１・５分の１縮尺で元図を作製した。また季節柄降雪や霜柱から遺物の移動を防ぐために畳表を多量に用意しビニールシートの下に敷き込み遺構・遺物の保護につとめた。縄文時代の遺構については，埋土をすべて水洗いし微細なチップなどの摘出にあたると共に花粉分析もあわせて行った。

Fig 2　調　査　風　景

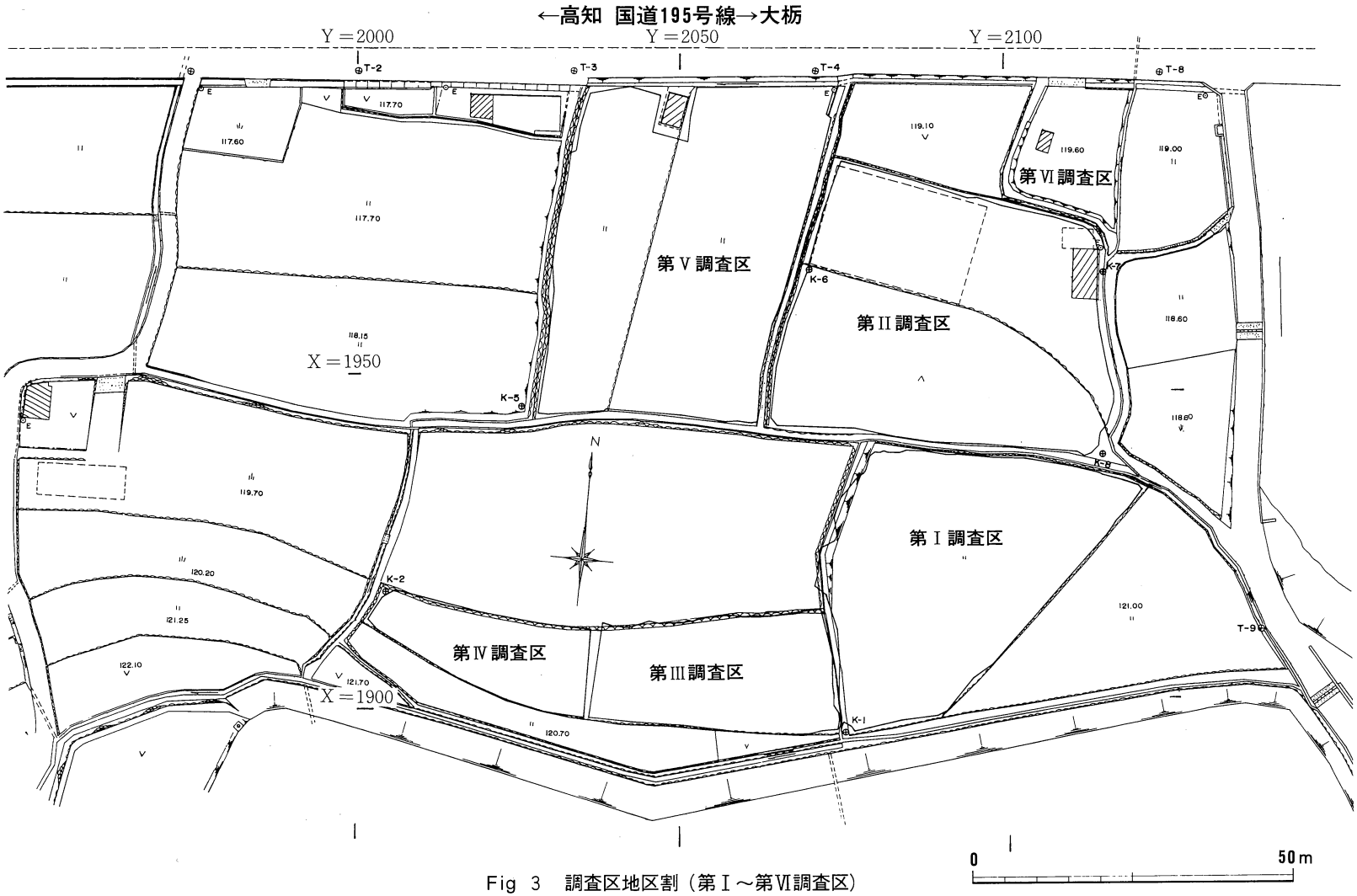



Fig 3　調査区地区割（第Ⅰ～第Ⅵ調査区）

# 第Ⅳ章　調査の成果

1　第Ⅰ調査区

(1)　基本層序（Fig　5）

第Ⅰ区の基本層序は，調査区の中央部に南北方向（A－Bライン）の，調査区北部に東西方向（C－Fライン）のセクションベルトを残して断面の観察を行った。層準は砂礫層のⅧ・Ⅸ層の下部層とⅦ～Ⅰ層の粘質土の上部層とに大きく分けることができる。上部層には部分的に火山灰層が入っている。以下各層準ごとに観察する。

Ⅸ層：淡茶色礫層で1～3㎝大の礫を含んでいる。A－Bラインの南端部から北に向かって潜り込んでいる。無遺物層である。

Ⅷ層：茶色砂礫層で0.5～1㎝大の小礫からなり，Ⅸ層と整合関係にありA－Bラインの全面に見られる。無遺物層である。

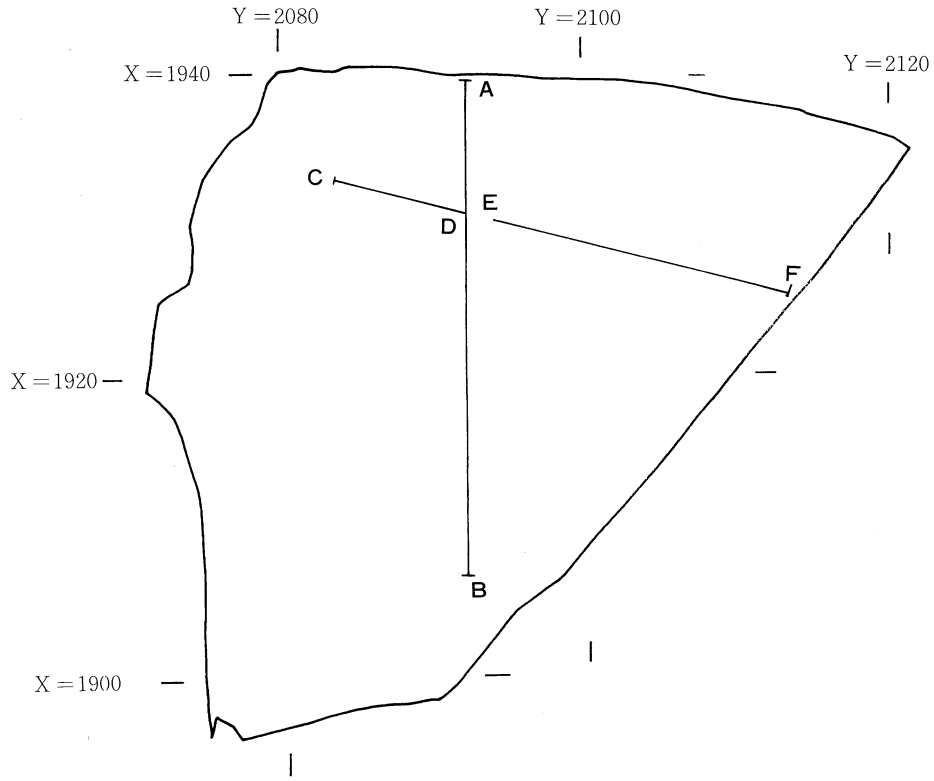
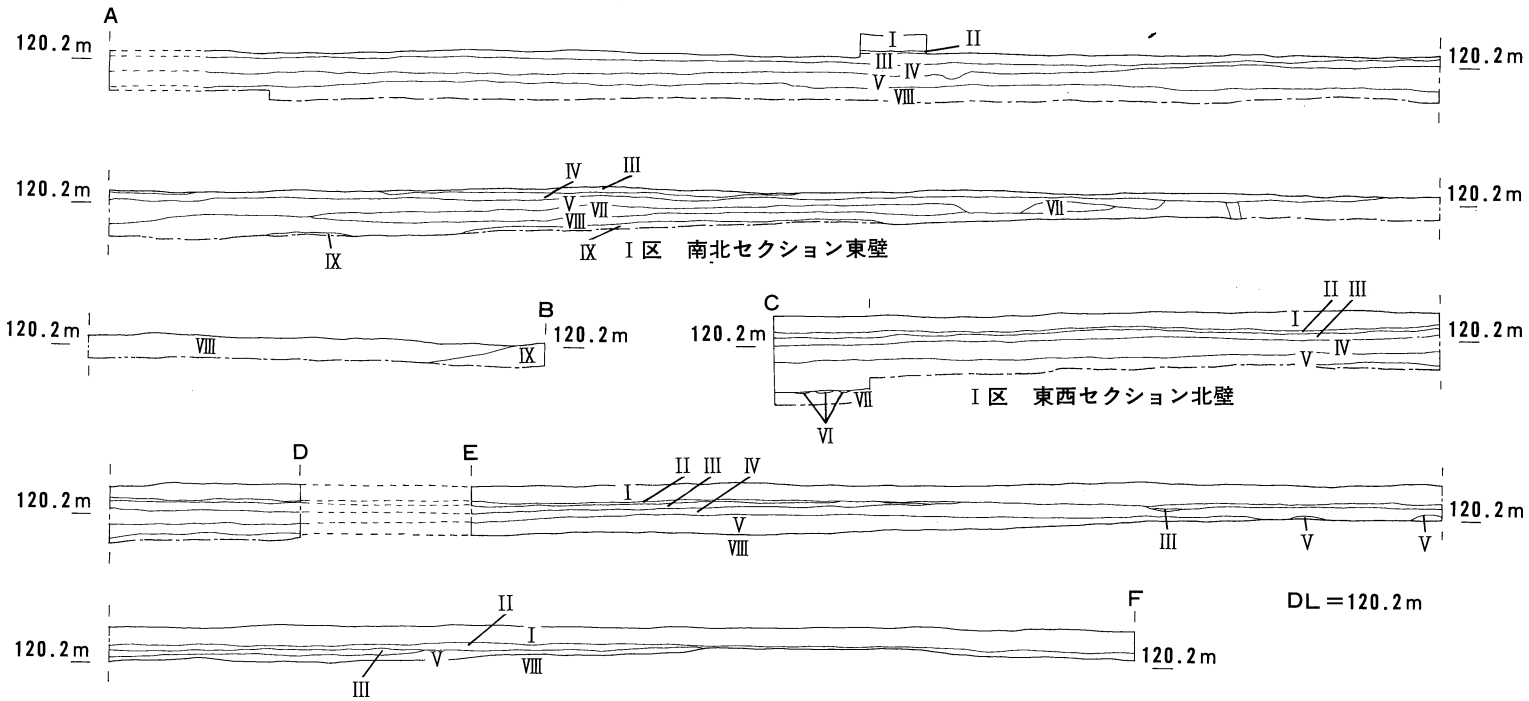



Fig　4　第Ⅰ調査区基本層序位置図（$\frac{1}{500}$）




Ⅰ．耕作土
Ⅱ．床　土
Ⅲ．旧耕作土
Ⅳ．灰茶色粘質土(中世包含層)
Ⅴ．火山灰を基調とする黒色土
Ⅵ．黄褐色音地層
Ⅶ．黒色土(音地混り)
Ⅷ．茶色砂礫層(0.5～20cm大の礫を含む)
Ⅸ．淡茶色砂礫層(1～3cm大の礫を含む)

0　4m

Fig 5　第Ⅰ区基本層序

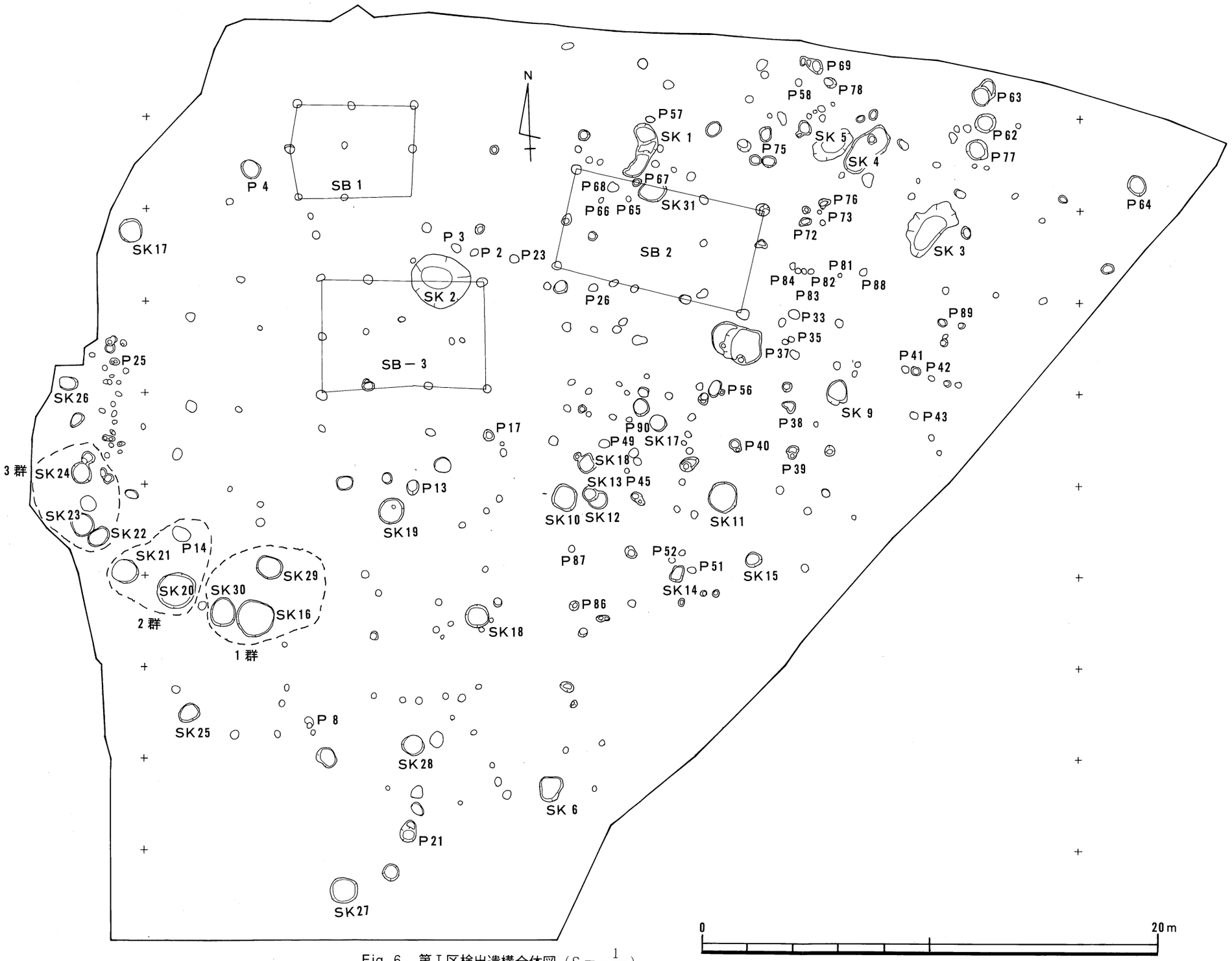



Fig 6　第Ⅰ区検出遺構全体図（S＝$\frac{1}{200}$）

Ⅶ層：シルト質の黒色土層で黄褐色の音地層（Ⅵ層）が混入している。A－Bラインの北部とC－Fラインには堆積が見られない。無遺物層である。

Ⅵ層：アカホヤ，通称音地と呼ばれるものである。地点によっては面的な広がりを有しているところもある。無遺物層である。

Ⅴ層：黒色粘質土でBP5500年降下の火山灰層がまざった層準で，県下の沖積地上に広く堆積が認められる層準である。弥生～古代の遺物包含層を形成している。

Ⅳ層：灰茶色粘質土で小礫土を含む。中世の遺物包含層を形成している。

Ⅲ層：旧耕作土

Ⅱ層：床土

Ⅰ層：現地表（耕作土）

以上の観察から旧地形をなす下部層は南と東に向かって上昇しており，北西側の低い部分にアカホヤ上部層が堆積している。

(2) 縄文時代の遺構と遺物

① P64 (Fig 7・8)

P64は，調査区の東端部分で検出した。基本層序のⅧ層を掘り込んでいる。94×80cmの円形に近

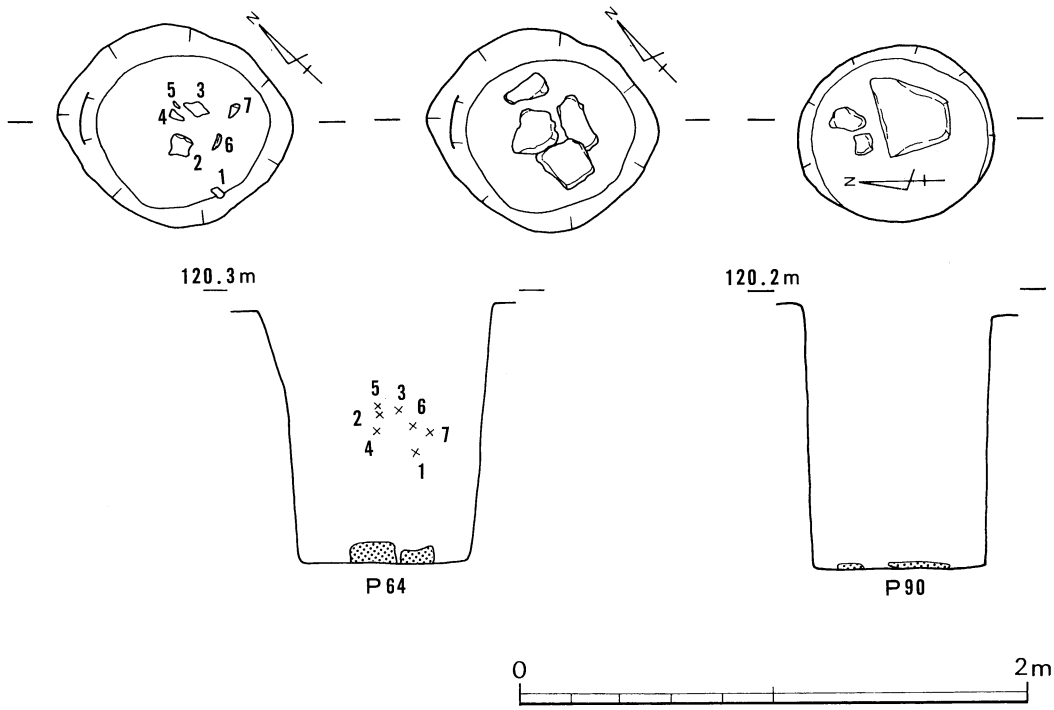



Fig 7 第Ⅰ区縄文時代のピット，平面及び断面図

いプランを有し深さは106cm，断面は北壁側の一部に傾斜が認められるもののおおむね垂直に近い円筒状をなしている。埋土は黒色の粘性土単純一層である。出土遺物は図示したように埋土中層より比較的まとまった縄文晩期土器が出土している。これらの土器はピットが廃棄される段階で投げ込まれたものと考えることができる。またピット床面は平坦面をなし，床面に接して，20cm大の礫を4個（共に砂岩）置いている。これらの礫には使用痕は全く認められないが，検出状況から考えて意識的に置かれたものであることには間違いない。おそらくこのピットの性格と関連があろう。この他埋土を洗浄した結果100点以上のサヌカイトのチップが認められた。

縄文土器は深鉢と浅鉢である。1～6・8は深鉢である。1は外面右下りの二枚貝条痕，内面水平方向（右→左）の削りが認められ，口唇部には貝殻腹縁で押圧されたと思われる刻目が部分的に認められる。2は内外面共に二枚貝条痕で，口唇部に棒状工具による刻目が施される。3は内外面ナデ調整，外面に細い原体による沈線文が描かれる。4は内外面水平方向の二枚貝条痕，口唇部は少し尖り気味。5は内外面に水平方向の二枚貝条痕を施し，内面はその上をナデ消している。口縁部は波状を呈し口唇部には貝殻腹縁と考えられる原体で刻目を配す。6は内外面弱い擦痕が認められ，口唇部はヘラ状原体による刻目を施す。胎土中に火崗岩を含んでおり，火崗岩地帯からの搬入品である。8は内外面非常に荒いナデ調整が施され，口縁部に内側に肥厚する瘤状の突起がつく，おそらくリボン状，あるいはヒレ状突起となるものであろう。これらの深鉢のうち3・6以外は外面に煤が付着している。次に浅鉢について見ると，7は半球形のカーブを有して外反する口縁部で，内外面丁寧なヘラ磨きを施す。胎土中に角閃石や火崗岩を含んでいることから明らかに瀬戸内地方からの搬入品である。9は朝顔状に外反する口縁部を有し，口縁端部内面を肥厚させ内側に強い段をつくり，外面には細いヘラ描沈線を施す。内外面ヘラ磨きを施す。10は直線的に外方に立ち上がった胴部から口縁は一担く字状に屈曲し外反する。口縁部内面に一条のヘラ描沈線を配する。内外面共に横方向のヘラ磨きを施す。内面は横位の削りの上を磨いている。11は胴部に大きな段部を有し，口縁部に向かって直線的に立ち上がる。内外面共にヘラ磨きを施す。

② P90

P90は調査区のほぼ中央部に位置する。76×70cmの楕円形のプランを有し，深さはP64とほぼ同じ104cmを測る。断面は完全な円筒形を呈す。埋土もP64と同様であるが遺物は全く認められなかった。しかし床面には10～30cm大の偏平な自然石が置かれている。

(3) 中世の遺構と遺物

① 掘立柱建物

SB1（Fig 9）

調査区北西部に位置する。2間×2間の東西棟で，梁間4.44m，桁行5.36mを測るが，南東隅の柱穴を検出することができなかった。柱穴の形状は円形ないし楕円形で，各柱穴の大きさは30～40cmを測る。柱穴埋土から遺物は全く出土していないが，北西隅の柱穴には25cm大の礫が2個入れられている。

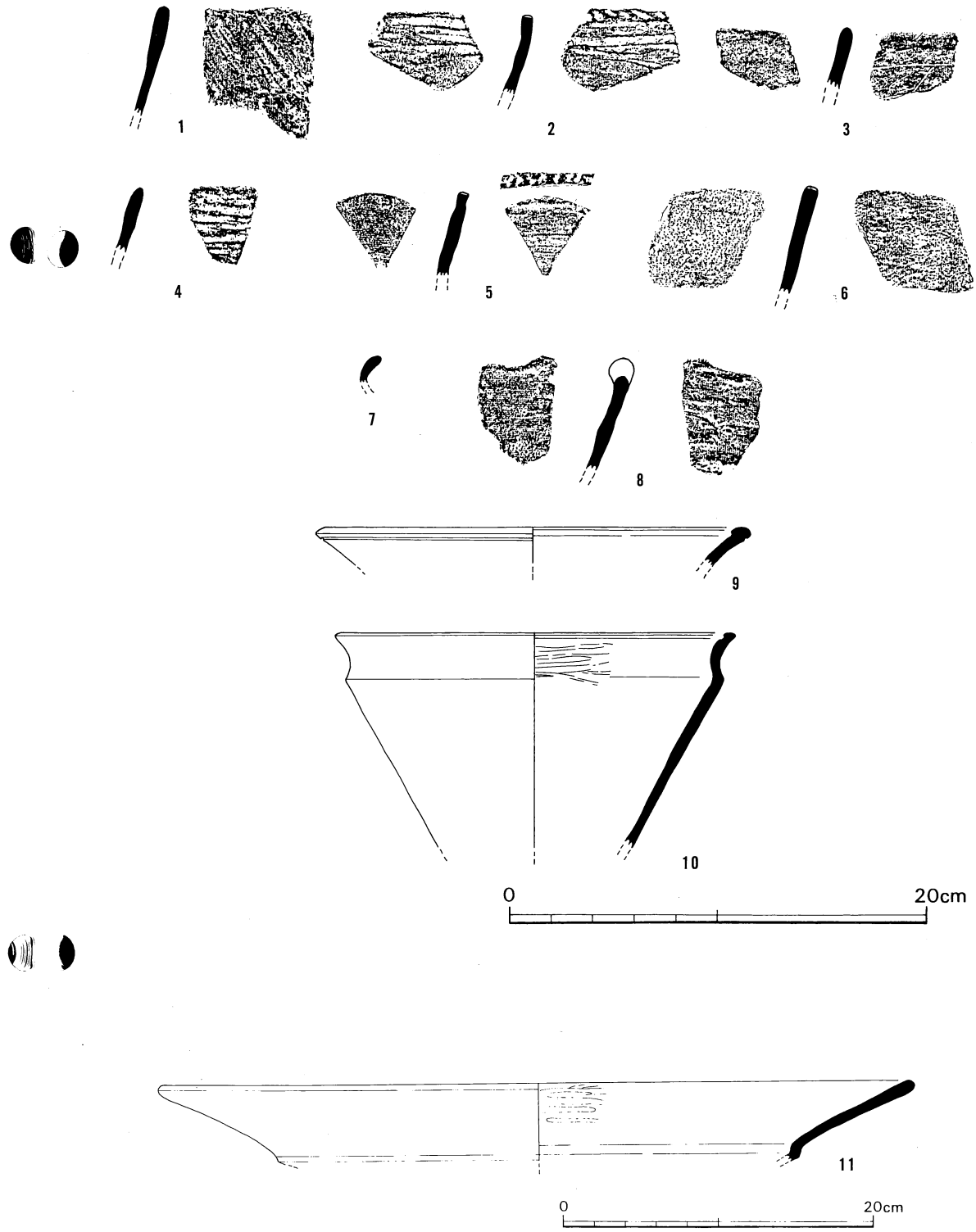



Fig 8　第Ⅰ区P64出土土器

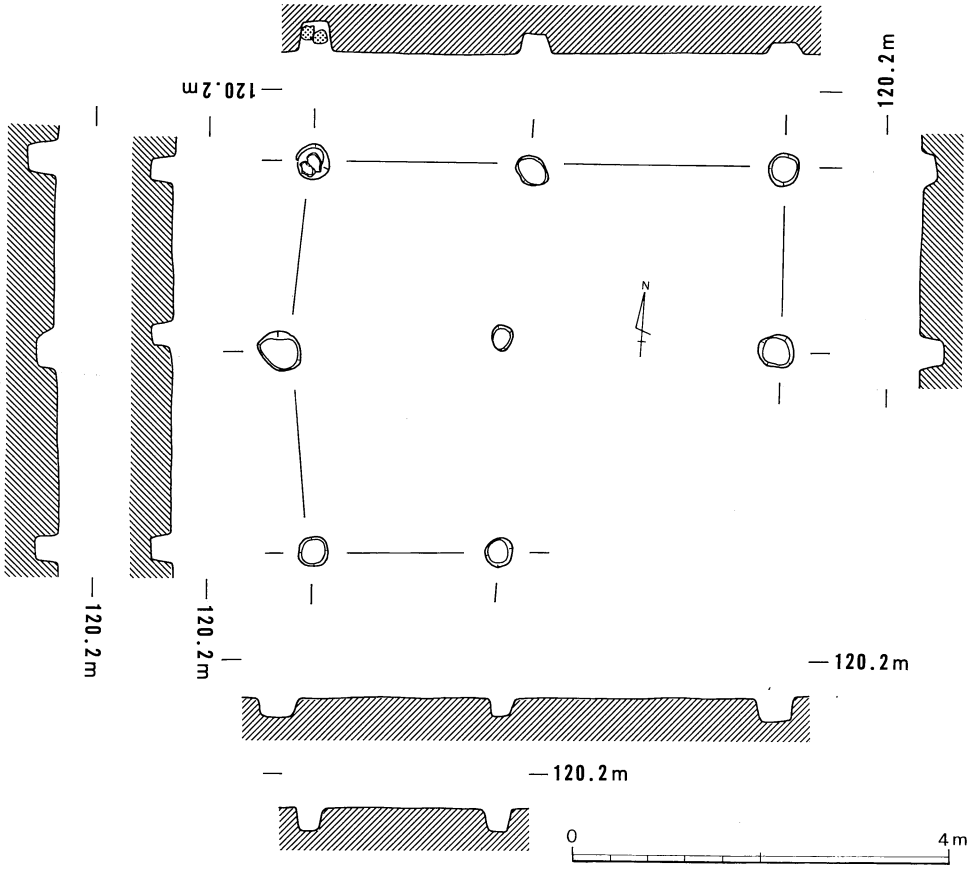



Fig 9　第Ⅰ区ＳＢ１平面図

ＳＢ２（Fig 10・11）

ＳＢ１の東にある。梁間２間（4.76m）×桁行３間（8.64m）の東西棟で，主軸方向はＮ－77°－Ｗである。柱穴は楕円形ないし不整形で，大きさは35～60cmを測る。Ｐ４（Fig 11－12，13・17）とＰ７（Fig 11－14～16）から土師器が出土している。12・13は小皿で共に精選された胎土を用い乳白色に発色する。17は胴部片であるが口縁部の外反する椀である。14・15は椀，16はわずかに内湾気味に立ち上がる坏で，外面にはロクロ目が顕著に認められる。この他Ｐ２には裏込め石と思われる20cm大の自然礫が置かれている。

ＳＢ３（Fig 12）

ＳＢ１の南にある。梁間３間（6.84m）×桁行３間（7.44m）の東西棟で主軸方向はＮ－90°－Ｅ・Ｗを有している。南面と東面で１個ずつ柱穴を確認し得なかった。柱穴の並びはあまり整然としておらず，平面形は平行四辺形状をなしている。南面のＥ－Ｆの並びは廂となる可能性もある。柱穴は円形あるいは楕円形で25～50cm大を測る。これらのうちＰ１（Fig 17－32・39）・Ｐ２（Fig

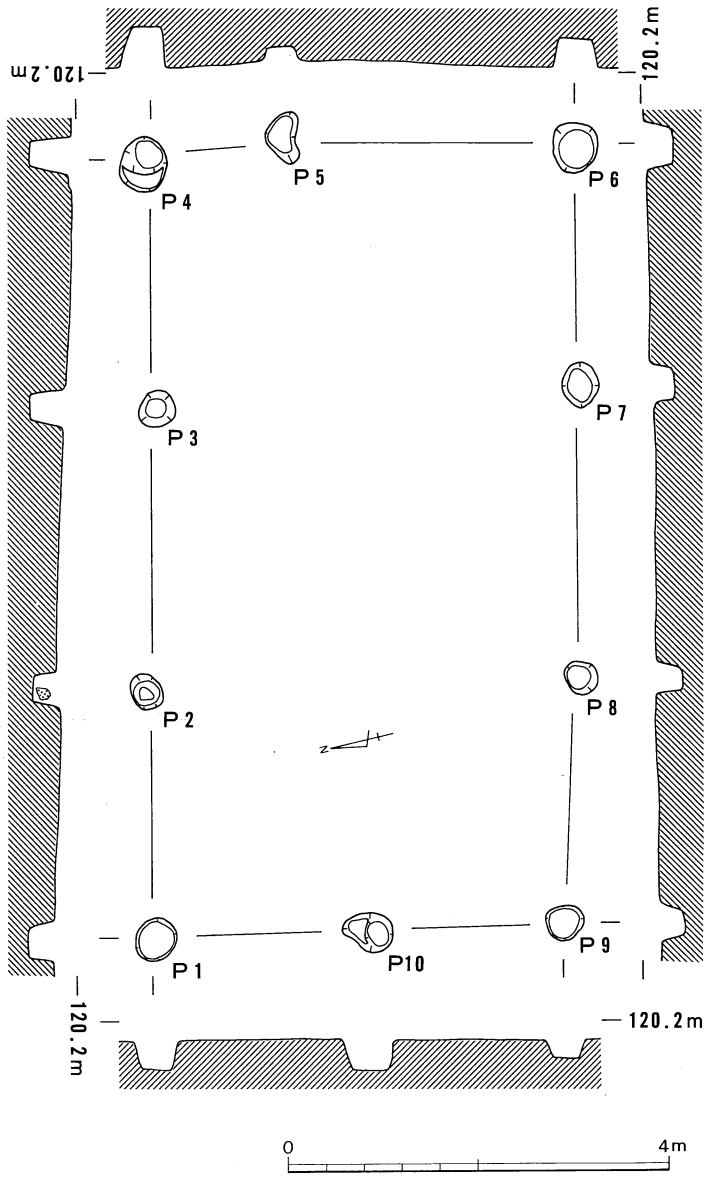



Fig 10　第Ⅰ区ＳＢ２平面図

17－41）から土師器が出土している。32は小皿でナデにより口縁部が大きく外反している。39は内湾気味に立ち上がる体部下半から口縁部が直線的に伸びる。外面にはロクロ目が見られる。41は内外面に炭素が付着した黒色土器椀で，外面には全体的にヘラ磨きが施される。

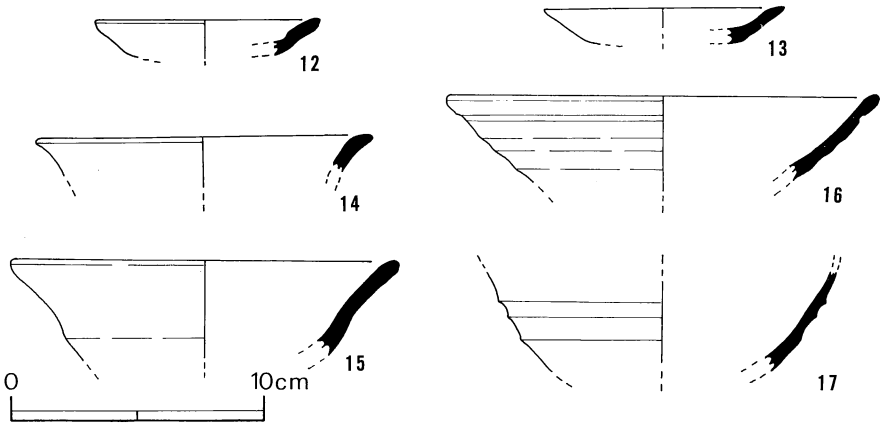



Fig 11　第Ⅰ区ＳＢ２柱穴出土の土器

② 土坑

土坑は大小42基検出したが，ここでは主なものだけを記述することにし他のものについては土坑一覧表にまとめた。（表－２）

ＳＫ１（Fig 13）

調査区北辺の中央部にあり，長軸2.38m，短軸0.68mを測る不整形の土坑である。床面中央部が高くなっており，深さは北側で22cm，南側で12cmを測る。北側の床面及び床面からやや浮いた状態で10～20cm大の礫が３個出土している。埋土中より瓦器・土師器の細片が８点出土しているが，図示し得るものはない。

ＳＫ９（Fig 13，14）

調査区の東寄りに位置し，長軸1.1m，短軸0.9m，深さ30cmを測る不整形の土坑である。埋土は黒褐色粘質土で，検出面に大小の礫がおかれている。遺物は土師器皿（18・21）同坏・椀（19，27，23）・瓦器椀（20・24）などが礫の下から出土している。18は小皿で口縁部が外反する。19は口縁部が外反し，22は直線的に外方へ伸びる。共に内外面にはロクロ目が認められる。23はベタ高台を有する椀底部で，内面にはヘラ磨きが施される。20と24は同一個体である可能性が強い。20は口縁部内外面にヨコ方向のナデ調整が施されているが，体部外面は指頭圧痕が顕著で押圧の時に生じた指紋が明瞭に認められる。24は断面三角形の高台である。

ＳＫ10（Fig 13・15－25）

調査区中央部にあり，長軸1.16m，短軸1.0m，深さ12cmを測る隅丸方形の土坑である。埋土は黒褐色粘質土で，埋土中より土師器椀（25）が１点出土している。25は断面台形状の高台を有し，外面は削りが施され弱い稜をなしている。

ＳＫ11（Fig 13・15－26）

ＳＫ10の東にあり長軸1.36m，短軸1.2m，深さ10～15cmを測る楕円形の土坑である。床面は中

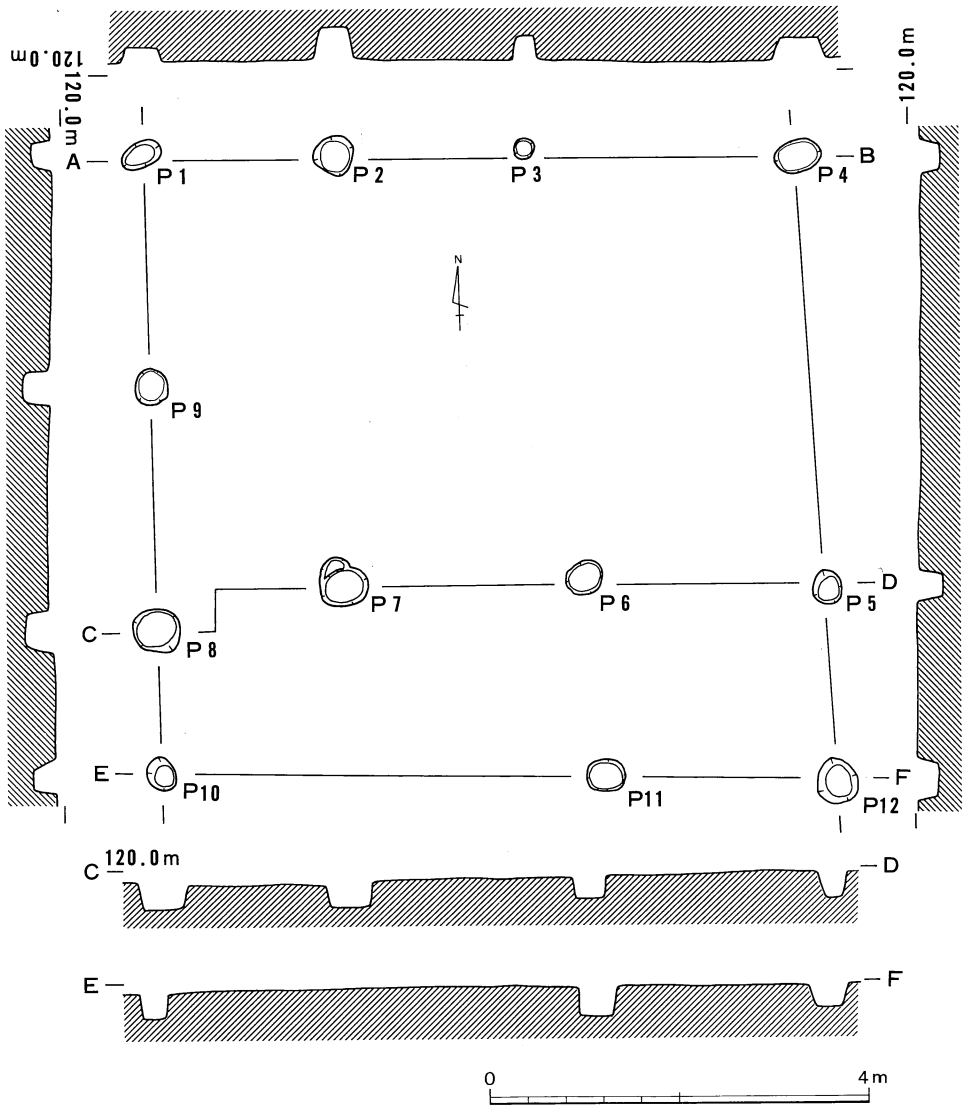



Fig 12　第Ⅰ区ＳＢ３平面図

央部がわずかに凹状をなしている。埋土は黒褐色粘質土で，土師器坏（26）が出土している。26は口縁部が肥厚し，わずかに外反している。また床面に10～15cm大の礫が数個出土している。

ＳＫ17（Fig 16）

中央部にあり長軸72cm，短軸64cm，深さ８cmを測る楕円形の土坑である。埋土は黒褐色粘質土で，土師器細片が３点出土しているが図示できるものはない。

ＳＫ18（Fig 16・15－27）

ＳＫ17の西南にあり一辺１ｍの隅丸方形プランを有し，深さは20～25cmを測る。床面は船底状を

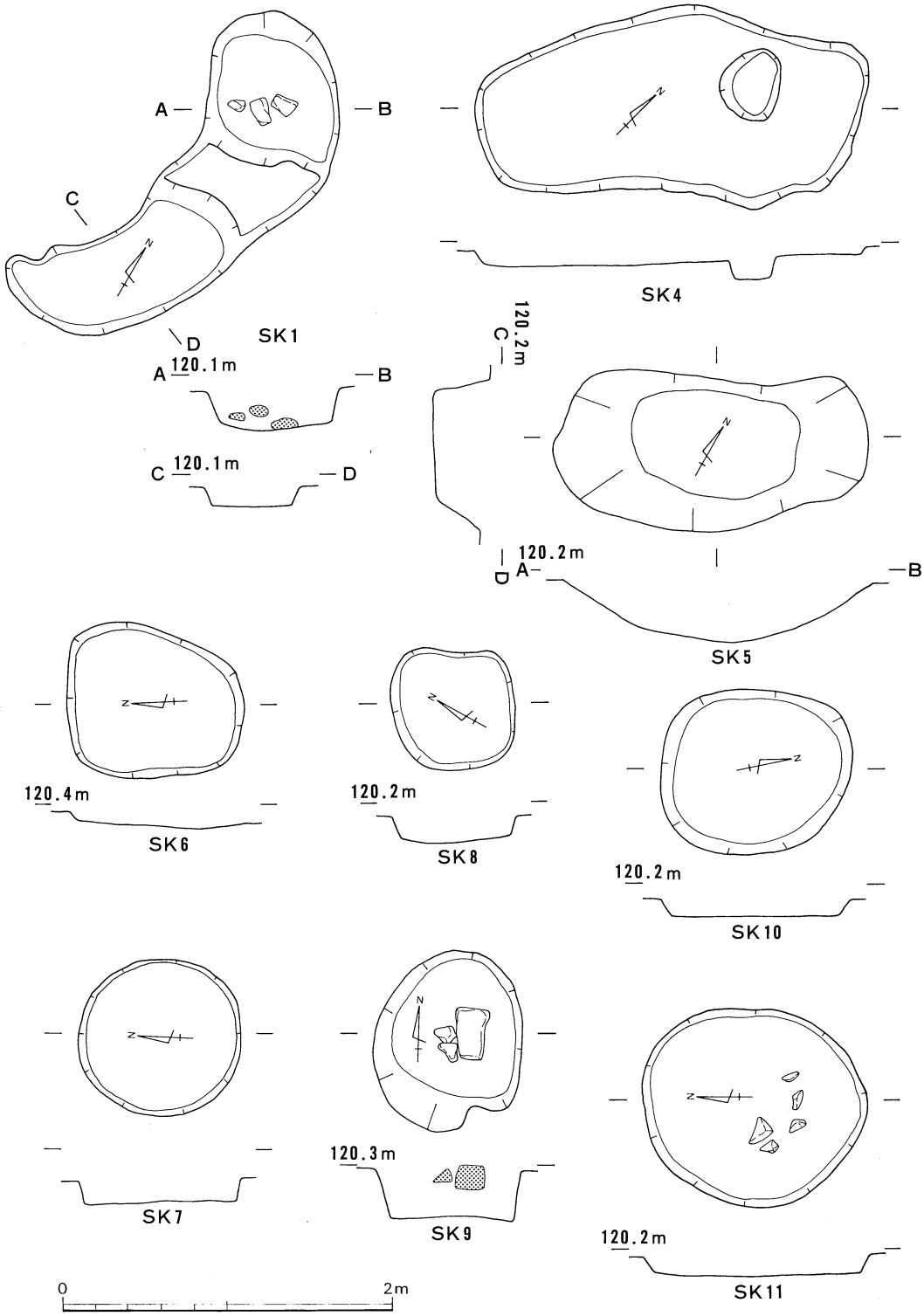



Fig 13　第Ⅰ区ＳＫ１，４～11平面及び断面図

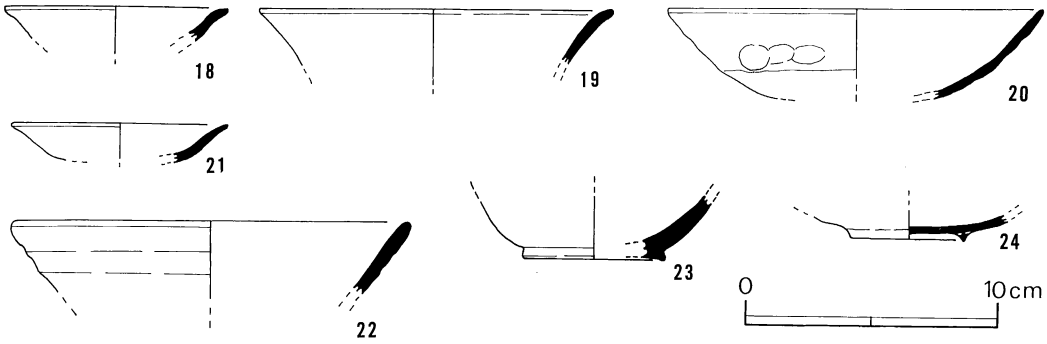



Fig 14　第Ⅰ区ＳＫ９出土の土器

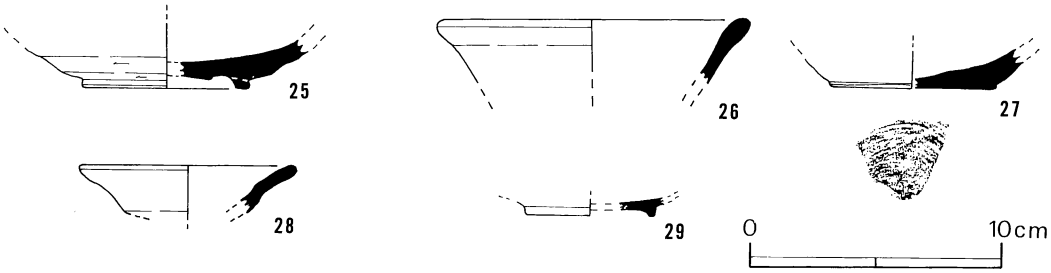



Fig 15　第Ⅰ区ＳＫ10 (25), 11 (26), 18 (27), 19 (28・29) 出土の土器

呈す。埋土は他の土坑と同じで，埋土中より土師器坏（27）が出土している。27はわずかにベタ高台を有する糸切り底である。床面には拳大から人頭大の礫が置かれている。

ＳＫ19（Fig 16・Fig 15－28・29）

ＳＢ３の南にあり長軸1.14m，短軸1.0m，深さ20cmを測る楕円形のプランを有している。床面は平坦面をなすが，径12cm，深さ４cmの小ピットが掘り込まれている。埋土は他のものと同じで土師器片22点，瓦器１点が出土している。28は土師器小坏でわずかに内湾気味に立ち上がった体部から口縁部が直接的に立ち上がる。29は瓦器椀底部で断面方形のしっかりした高台が付いている。

③　ピット出土の遺物（Fig 17）

ⓐ土師器小皿（30・31・33）　30（Ｐ14）は内外面横方向に強いナデにより口縁部が外反する。31（Ｐ69）は糸切り底で，直接的に立ち上がり口縁部がわずかに外反する。33（Ｐ83）は，内湾気味に立ち上がった体部から，口縁部が強く外反する。

ⓑ瓦器小皿（43）　Ｐ18出土で，内外面横方向のナデ調整を行い底部外面には指頭圧痕が顕著。

ⓒ土師器坏（35～38）　すべて口縁部が外反するタイプである。35（Ｐ13）は口縁端部が肥厚し

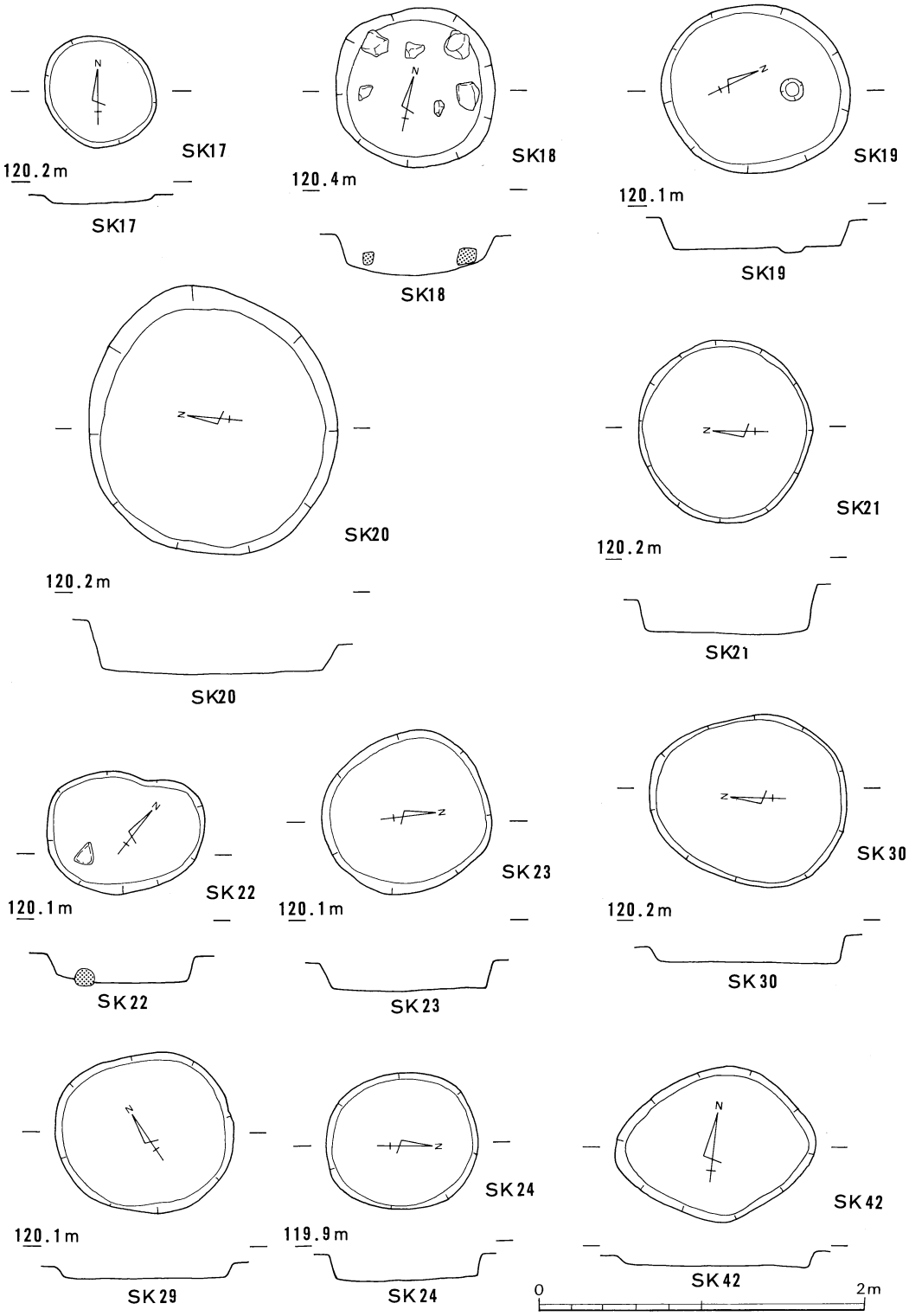



Fig 16　第Ⅰ区ＳＫ17～24，29，30，42平面及び断面図

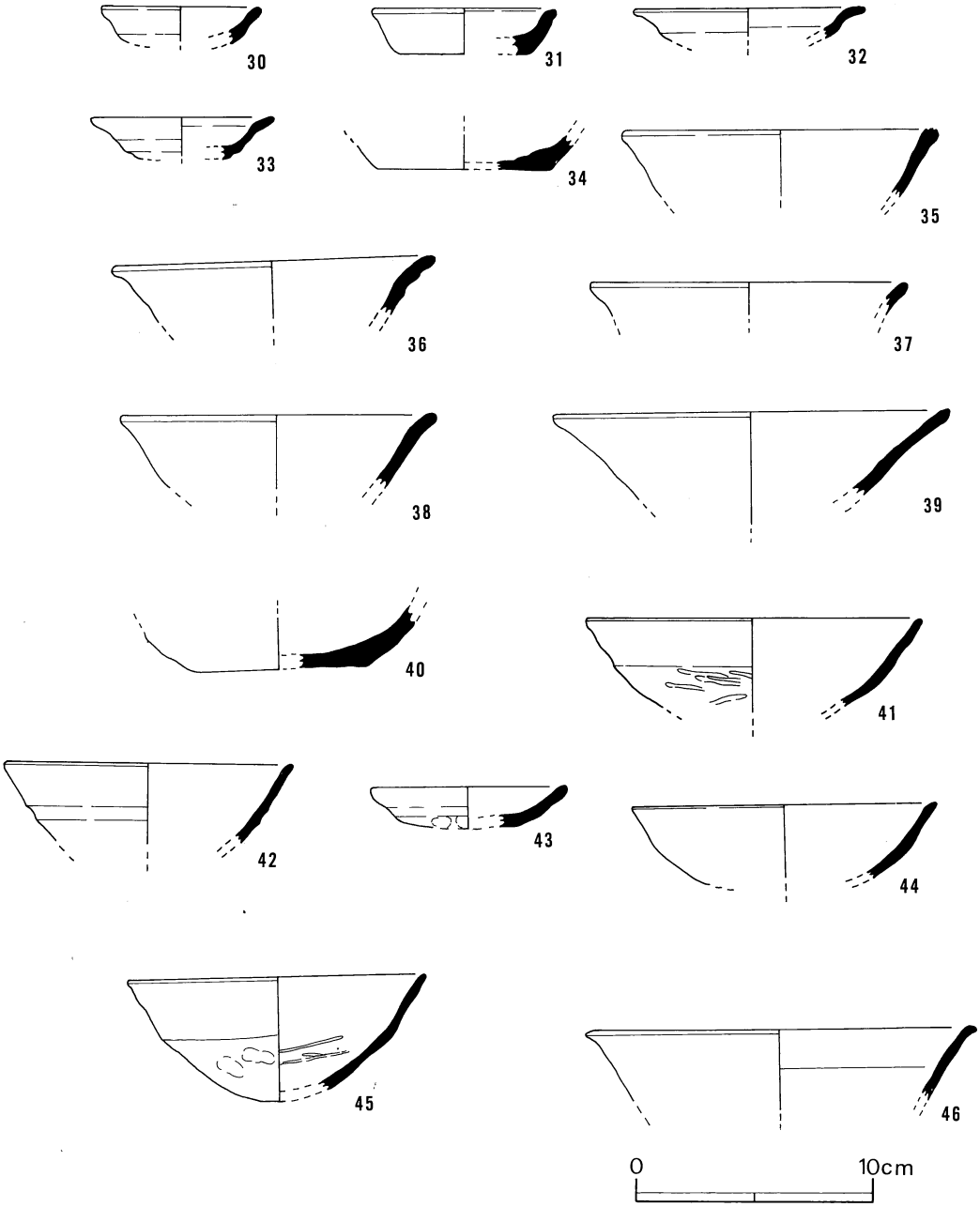



Fig 17　第Ⅰ区ＳＢ３（32・39・41）及びピット出土の土器（Ｐ３：40，Ｐ８：46，Ｐ13：35，Ｐ14：30，Ｐ18：43，Ｐ19：(34)，Ｐ41：42，Ｐ42：37，Ｐ62：44，Ｐ69：31，36，Ｐ83：33，Ｐ86：45，Ｐ87：38）

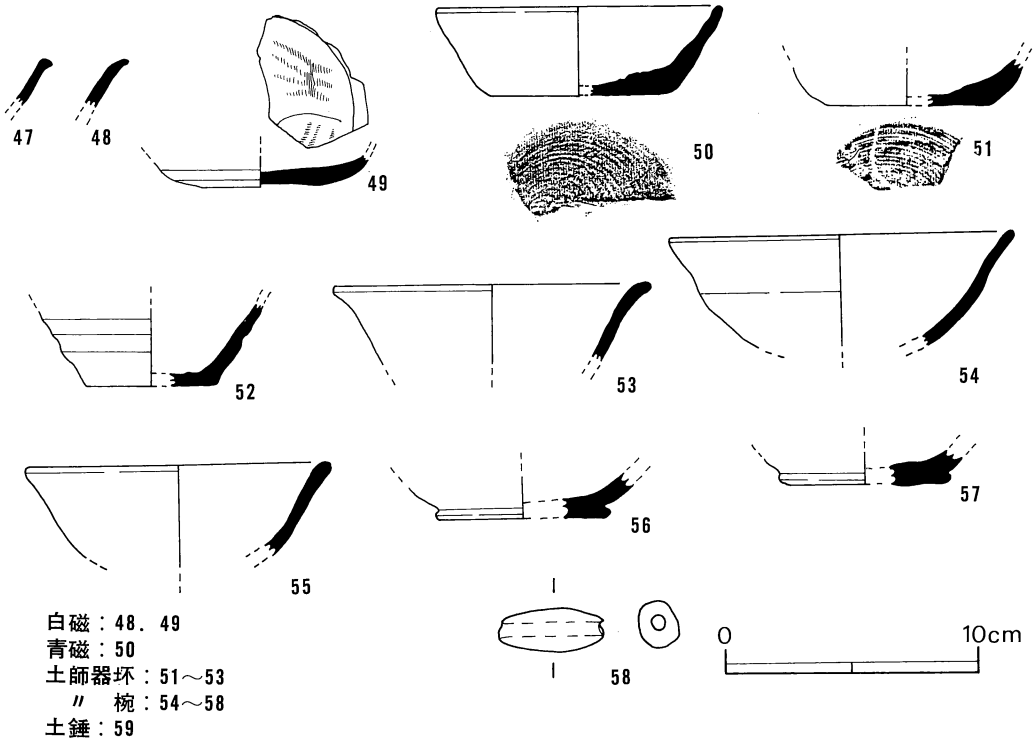



Fig 18　第Ⅰ区遺物包含層出土の土器

口唇部に2条の沈線が施された珍しいタイプである。38（P87）は，口縁端部で近く外反し，外面はナデ，内面はヘラ磨きを施す。36（P69）・37（P42）は外面にロクロ目が見られる。34（P19）・40（P 3）は底部で共に糸切り底である。

ⓓ黒色土器椀（42・44）　42（P41）は外面に，にぶい凹線が走る。44（P62）は内湾しながら立ち上がり口縁端部がわずかに外反する。

ⓔ瓦器椀（45）　P36出土である。体部中位で内側に屈曲して立ち上がり屈曲部から上は横方向のナデ調整が施される。

ⓕ白磁椀（46）　P 8出土である。直線的に外方に立ち上がり口縁部は短く外反，いわゆる端反りのタイプである。内面に1条の細い沈線が走る。

④　包含層出土の土器（Fig 18）

ⓐ土師器坏（50～53・55～57）　50・51は底部から直線的に立ち上がるタイプで，底径に対して器高が低い。共に糸切り底である。52は外面にロクロ目が顕著に見られる。糸切りである。53・55は口縁部が外反し55は端部がわずかに肥厚している。両者共内外面横ナデ調整であるが，55の外面にはわずかにロクロ目が認められる。57・58は共にベタ高台を有する底部で糸切り，53・55のような上部がつくものと考えられる。

ⓑ土師器椀（54）　体部が内湾気味に立ち上がり口縁部は直線的に伸びる。体部外面は指頭圧痕

が顕著で，口縁部内外面は横方向にナデ調整を施す。火崗岩地帯からの搬入品である。

ⓒ青磁皿（49）　内底に櫛目による文様，外底露胎。釉は透明度のある緑色で全面貫入が入る。

ⓓ白磁椀（47・48）　（47）は端反り，49は口禿げの口縁を有する。後者は乳白色の釉が厚くかかる。

ⓔ土師器土錘（58）　中央部に最大径を有し，孔は6㎜重さ9ｇを測る。

表－2　第Ⅰ区土坑一覧表

| 土坑No. | 長軸(cm) | 短軸(cm) | 深さ(cm) | 平面形 | 出土遺物（点） | 出土土器実測No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ＳＫ1 | 238 | 68 | 12～22 | 不整形 | 土師・瓦器細片8 | | |
| 2 | 260 | 220 | 65 | 楕円形 | | | |
| 3 | 260 | 130 | 55 | 不整形 | | | |
| 4 | 240 | 112 | 7 | 不整形 | | | |
| 5 | 190 | 96 | 37 | 隅丸長方形 | | | |
| 6 | 110 | 92 | 10 | 不整形 | 土師細片1 | | |
| 7 | 164 | 160 | 22 | 不整形 | | | |
| 8 | 74 | 70 | 16 | 隅丸方形 | | | |
| 9 | 110 | 90 | 30 | 不整形 | | 18～24 | |
| 10 | 116 | 100 | 12 | 隅丸方形 | | 25 | |
| 11 | 136 | 120 | 10～15 | 楕円形 | | 26 | 床面に礫あり |
| 12 | 80 | (70) | 5 | 〃 | | | ＳＫ13に切られる |
| 13 | 60 | 60 | 7 | 隅丸方形 | | | |
| 14 | 64 | 56 | 6 | 不整形 | | | |
| 15 | 70 | 66 | 12 | 楕円形 | | | |
| 16 | 160 | 155 | 10 | 〃 | | | |
| 17 | 72 | 64 | 8 | 〃 | 土師細片3 | 27 | 床面に人頭大の礫 |
| 18 | 98 | 98 | 15 | 隅丸方形 | | | |
| 19 | 114 | 100 | 20 | 楕円形 | 土師細片22瓦器1 | 28，29 | 床面に小ピットあり |
| 20 | 160 | 150 | 33 | 〃 | | | |
| 21 | 110 | 108 | 28 | 〃 | | | |
| 22 | 100 | 76 | 17 | 不整形 | | | |
| 23 | 100 | 96 | 15 | 楕円形 | | | |
| 24 | 92 | 82 | 19 | 〃 | | | |
| 25 | 98 | 74 | 6 | 〃 | | | |
| 26 | 80 | 60 | 17 | 〃 | | | |
| 27 | 114 | 112 | 13 | 〃 | | | 床面に礫あり |
| 28 | 90 | 86 | 10 | 〃 | | | |
| 29 | 110 | 98 | 6 | 〃 | | | |
| 30 | 122 | 104 | 8 | 〃 | | | |
| 31 | 100 | 90 | 5 | 不整形 | 土師片9 | | |

2　第Ⅱ調査区

(1)　基本層序（Fig 21）

第Ⅱ区は第Ⅰ区の北側に位置する。現地表面は第Ⅰ区に比べて１m程低くなっている。旧地形は南の山裾から緩やかな傾斜を保っていたと考えられるが，後世の水田化の際に盛り土と削平によって第１区との間に段差が生じたものである。第Ⅱ区の特徴は，川上谷の氾濫原が明瞭に認められることである。調査区の東側から流れ込み遺構検出面であるⅢ層を抉ってU字状に砂礫層が広がっている。この氾濫原の上にそれ以外の所と同様に中世の遺物が認められるところから，中世以前の氾濫としなければならない。

第Ⅱ区の基本層序は，耕作土（現地表）と床土の大部分を除去した段階からの層序である。床土直下が縄文及び中世の遺物検出面となっており，第Ⅰ区で形成されていた古代・中世の遺物包含層はほとんど認められない。

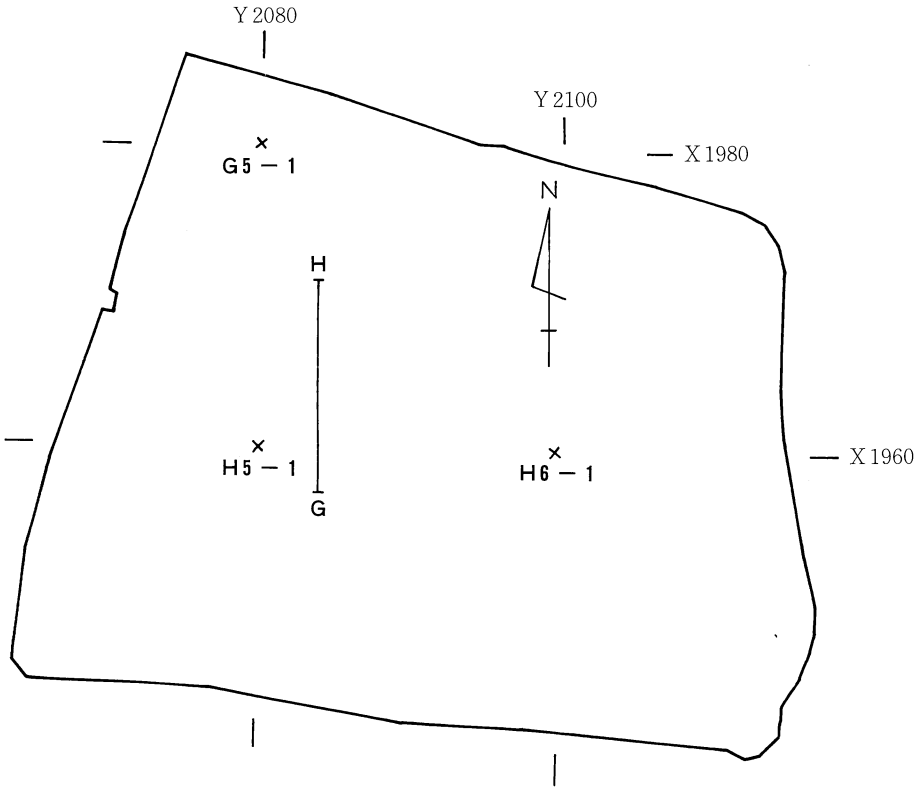



Fig 19　第Ⅱ区基本層序位置図（$\frac{1}{500}$）

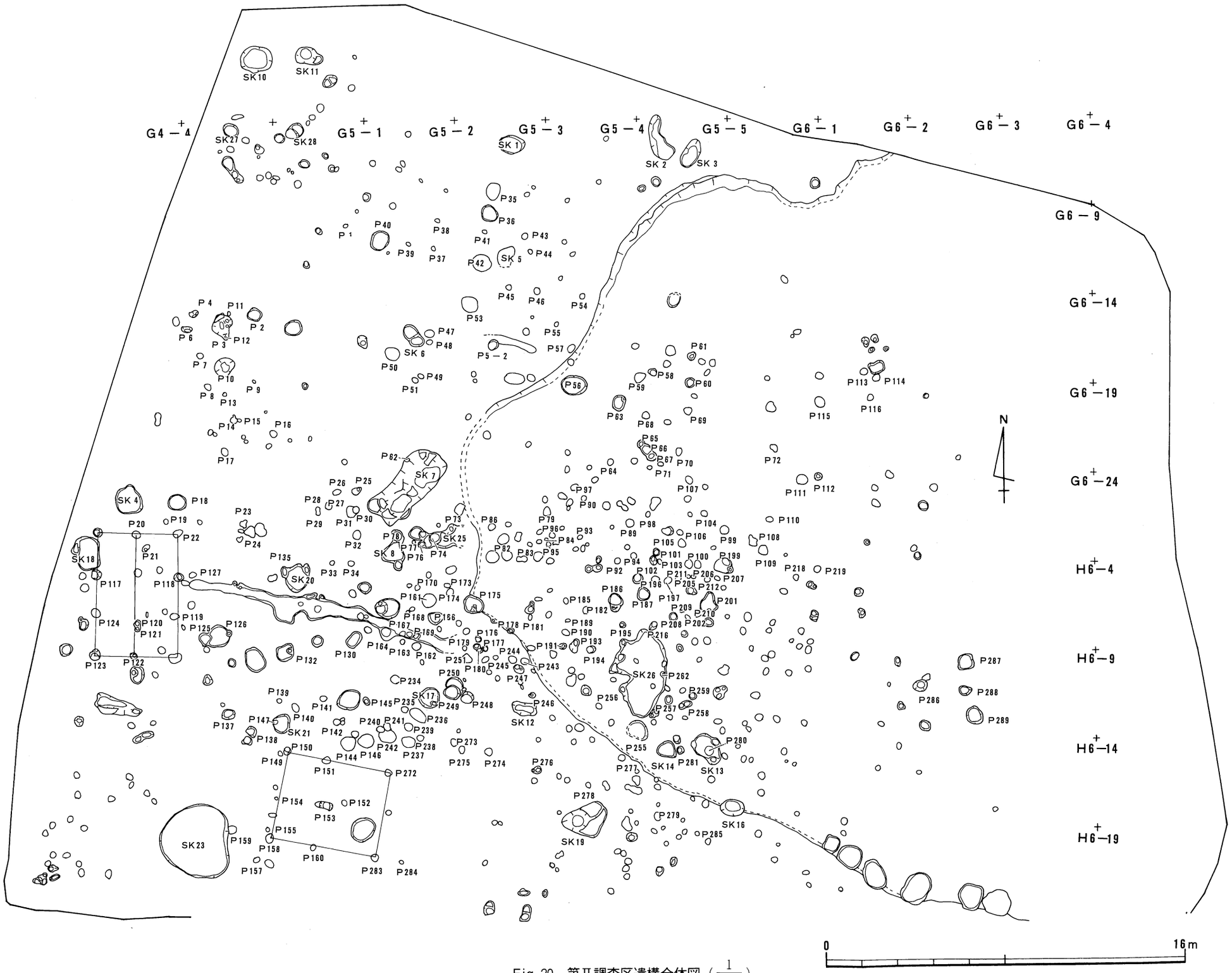



Fig 20　第Ⅱ調査区遺構全体図（$\frac{1}{200}$）

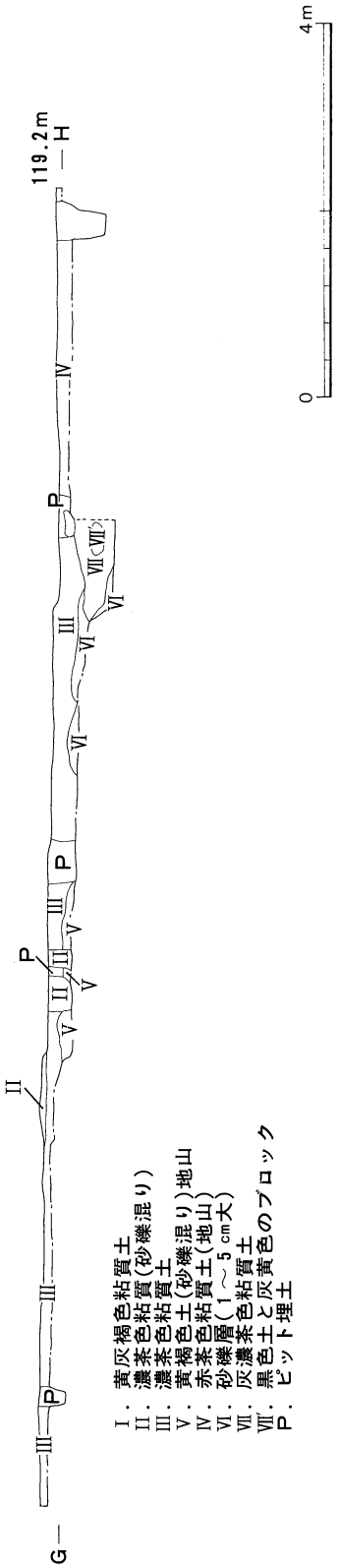



Fig 21　第Ⅱ区基本層序

Ⅰ層：黄灰褐色粘質土で床土である。

Ⅱ層：濃茶色粘質土に砂粒が混入。Ⅲ層を切っており遺構の可能性もある。

Ⅲ層：濃茶色粘質土で縄文・中世の遺構検出面である。北から南に向かって層厚を次第に減じている。Ⅳ層との関係は不明である。

Ⅳ層：赤茶色粘質土でⅢ層と同様に遺構検出面を形成し，北部にのみ認められる層準である。

Ⅴ層：砂礫が混入した黄褐色粘質土層，無遺物層である。

Ⅵ層：1～5cm大の砂礫層，無遺物層である。

Ⅶ層：灰濃茶色粘質土，無遺物層である。一部Ⅵ層に挟まれる現象が生じている。

Ⅶ'層：黒色土と灰黄色の粘土で，Ⅶ層中にブロック状に入っている。

(2)　縄文時代の遺構と遺物

①　P10（Fig 22・23）

調査区の東方に位置する。長軸86cm・短軸80cmの不整円形のプランを有し，深さ1mを測る。壁面は斜めに立ち上がり，埋土はⅠ層：灰黒色粘質土　Ⅱ層：黒色粘質土　Ⅲ層：黒褐色粘質土である。遺物は各層より縄文晩期の深鉢，浅鉢の破片が約50点出土している。また床面より30cmのところに人頭大の河原石（砂岩）が出土している。

59・60は粗製深鉢の口縁部で，内外面二枚貝条痕が顕著である。61以下は精製浅鉢である。61は口縁部に蝶ネクタイ状の突起が内傾して付いている。口縁部外面と頸部外面屈曲部に1条のヘラ描沈線を施す。内外面丁寧なヘラ磨きを施す。62は口縁部内面が段状を呈し，63は口縁端部がわずかに外反し内面に沈線を巡らしている。両者共に内外面ヘラ磨きを施す。64は，上胴部が内側に強く屈曲し口縁部は短く外反，口唇部は面をなす。内外面ヘラ磨きを施す。この器形は晩期後

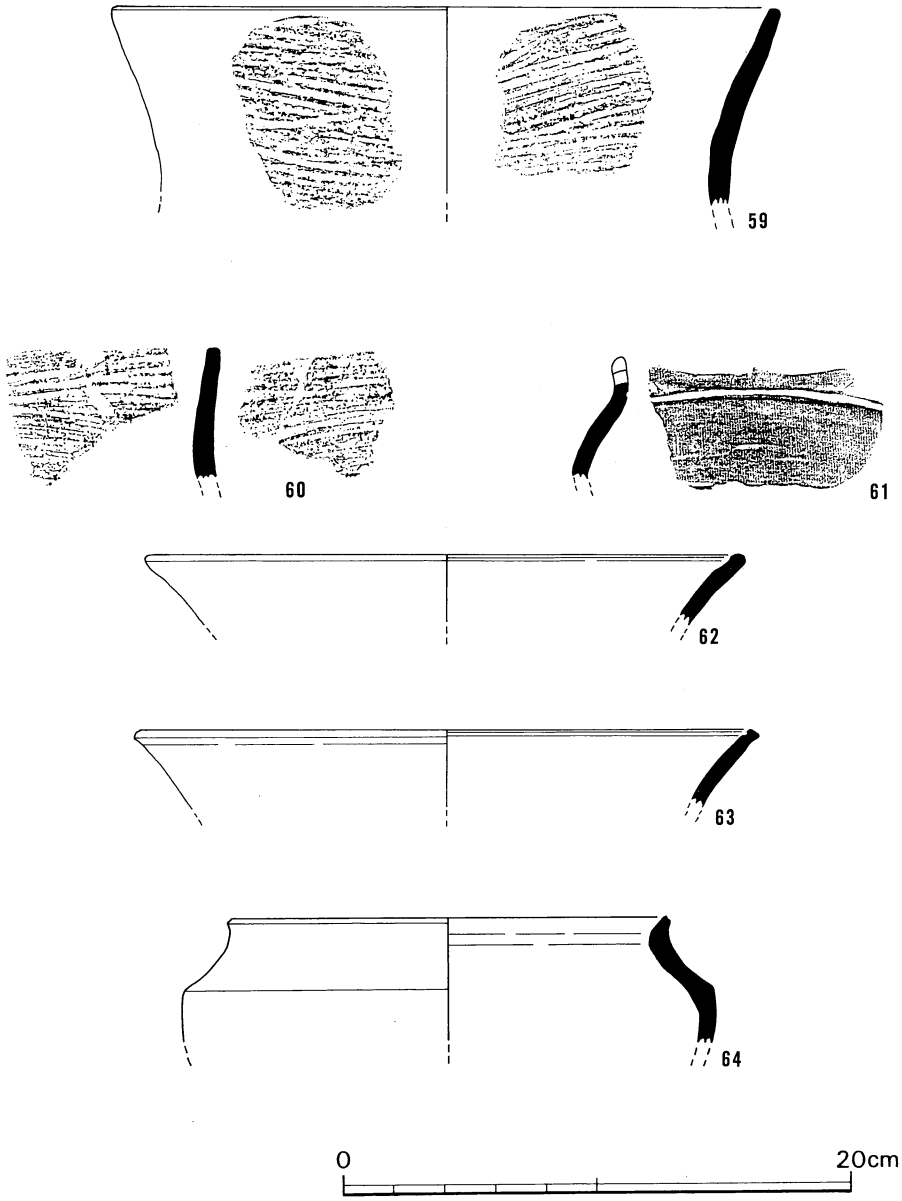



Fig 22　第Ⅱ区Ｐ10出土の縄文土器

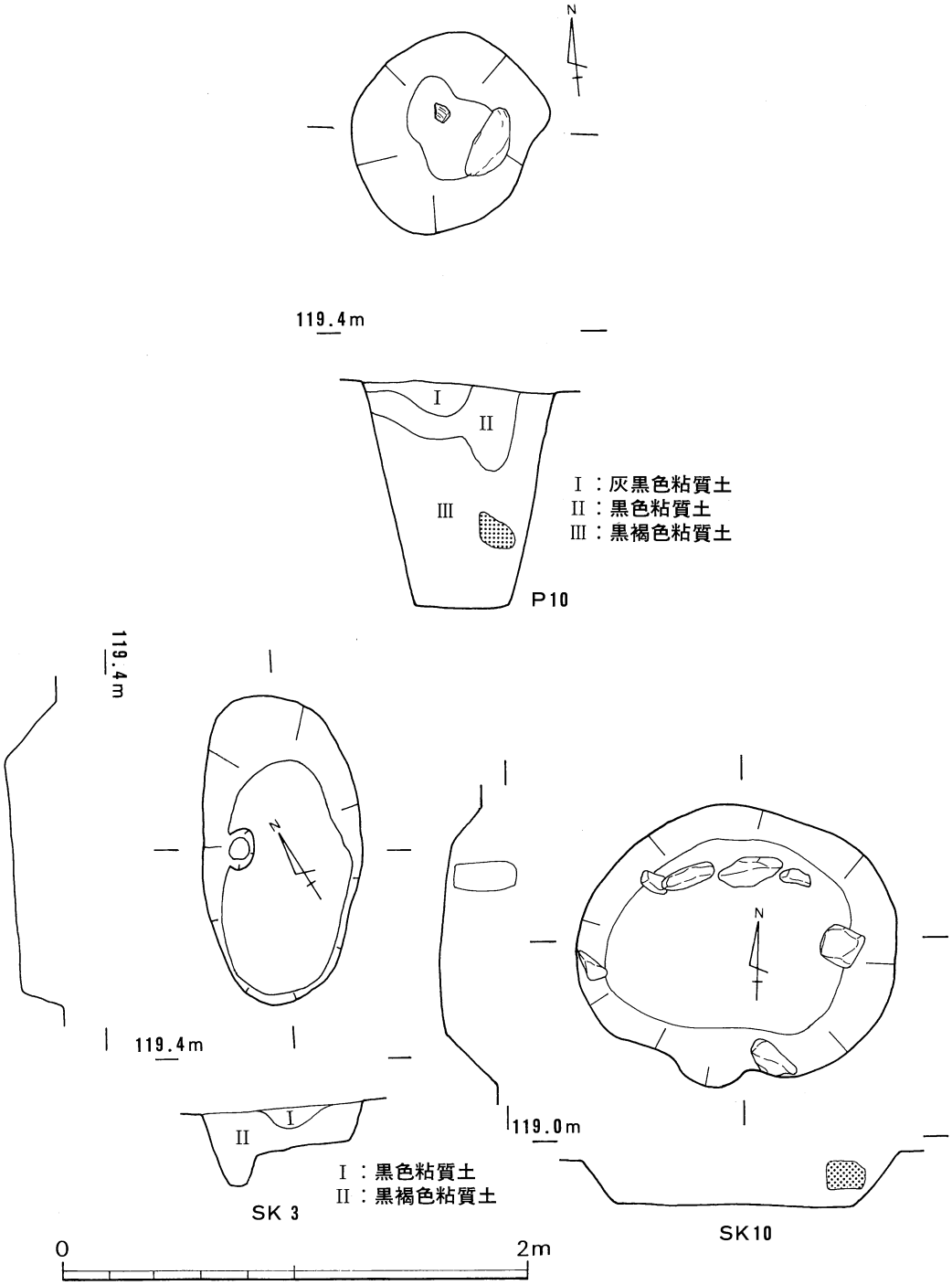



Fig 23　第Ⅱ区縄文時代の遺構　P10，ＳＫ３，ＳＫ10

半に向って次第に屈曲部から上が発達し，やがて壺となるものであろう。

② ＳＫ３（Fig 23）

調査区の北端部にある。長軸134cm，短軸70cmの楕円形のプランを有し，深さは20cmを測る。壁面は斜めに立ち上がり，西壁寄の床面にピット状の掘り込みがある。埋土はⅠ層：黒色粘質土，Ⅱ層：黒褐色粘質土である。遺物は埋土中より縄文土器細片が９点出土しているが図示し得るものはない。

③ ＳＫ７（Fig 24）

調査区の中央部に位置する。3.74×1.7mの不整形プランをなし深さは70～90cmを測る。一部を中世土坑ＳＫ９に切られており，壁面の立ち上がりも明確にすることができない箇所がある。埋土はⅠ層：火山灰を基調とする黒色粘質土，Ⅱ層：黒褐色粘質土，Ⅲ層：茶色粘質土で，各層より縄文晩期土器細片が多量出土しているが，図示できるものはない。

④ ＳＫ10（Fig 23）

調査区の北西隅にある。長軸1.38m，短軸1.12mの楕円形のプランを有し，深さ26cmを測る。床面は平坦で断面は逆台形を呈す。埋土は黒褐色粘質土単純一層である。埋土中より縄文土器の細片が２点出土しており，床面近くからは人頭大の礫が数点出土している。

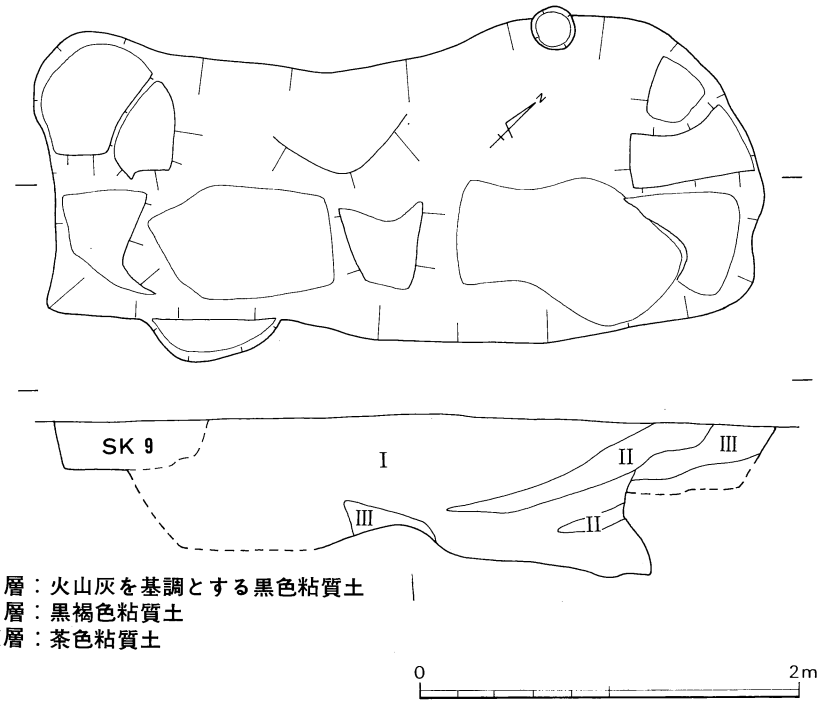



Fig 24　第Ⅱ区縄文時代の遺構　ＳＫ７

(3) 中世の遺構と遺物

① 掘立柱建物

ＳＢ１（Fig 25・27－70）

調査区の西端に位置する。桁行３間（６ｍ）×梁間２間（4.08ｍ）の南北棟で主軸方向はＮ－2.5°－Ｅである。埋土は総じて濃茶色粘質土である。柱穴規模は径40cm前後の円 形または不整円形をなし，深さは10～40cmを測る。柱穴間距離は各々90cm前後を測る。Ｐ８よりほぼ完形の土師器坏70が出土している。70はロクロ成形によるもので内面にはロクロ目が顕著で，糸切り底。内面には煤が付着している。

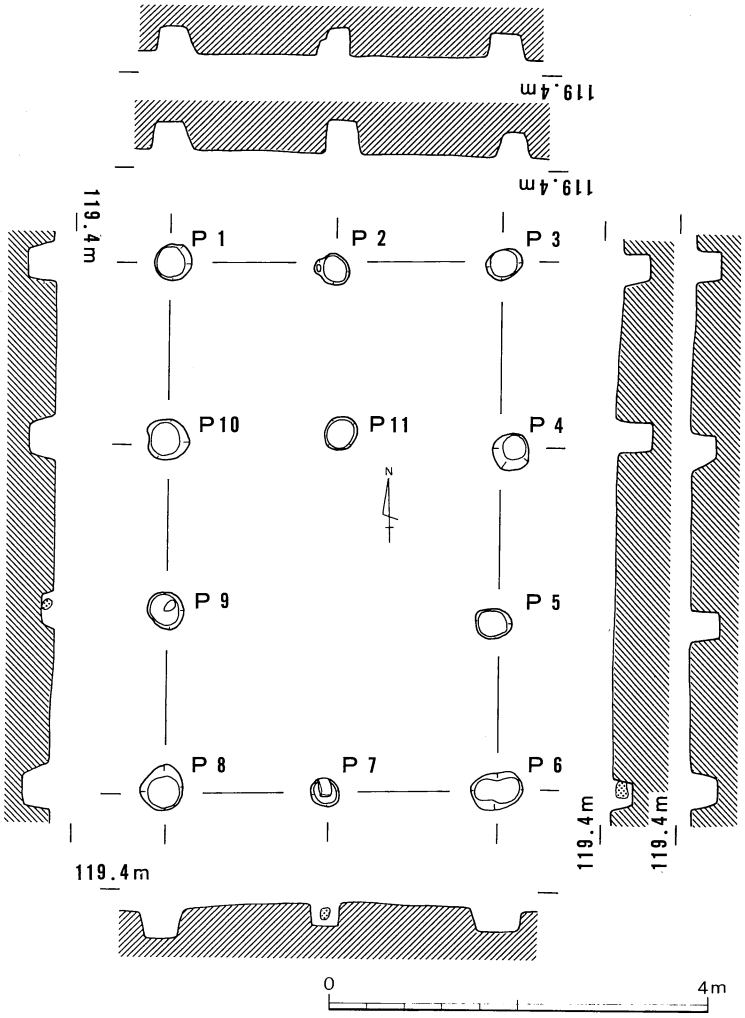



Fig 25 第Ⅱ区ＳＢ１平面図

ＳＢ２（Fig 26・27－66）

調査区の西南端に位置する。桁行２間（5.08m）×梁間２間（4.4m）で主軸方向はＮ －78° －Ｗを示す。西側の梁間では中の柱穴を検出することができなかった。柱穴規模は径30cm前後を測るが，柱間距離は2.0m（Ｐ７－Ｐ６）～28m（Ｐ２－Ｐ３）と不揃いである。遺物はＰ５より土師器皿66が出土している。66は口縁部内外面を横方向にナデ調整，口縁部以外には指頭圧痕が顕著である。内面には全面に煤が付着している。この他Ｐ３の底面には，人頭大の河原石が置かれている。

② 土坑

土坑については主要なものについて説明を行うが，他のものについては一覧表にまとめることにする。また埋土は例外なく黒褐色粘質土である。

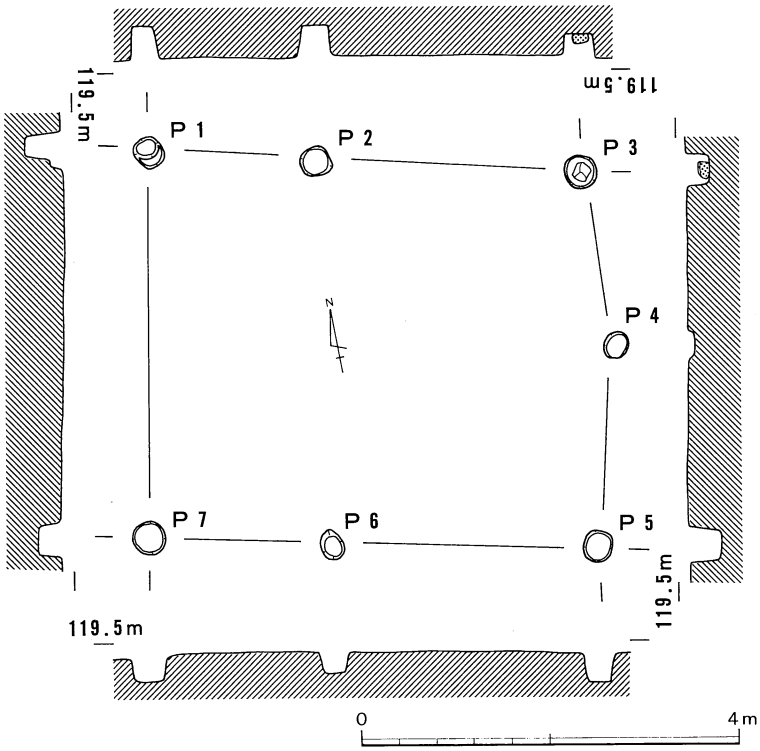



Fig 26 第Ⅱ区ＳＢ２平面図

ＳＫ１（Fig 28）

調査区北辺にあり，1.24×0.76mの楕円形のプランを有し深さは38cmを測る。床面は平坦で断面は逆台形を呈する。中世に属する土師器細片が２点出土している。

ＳＫ４（Fig 28）

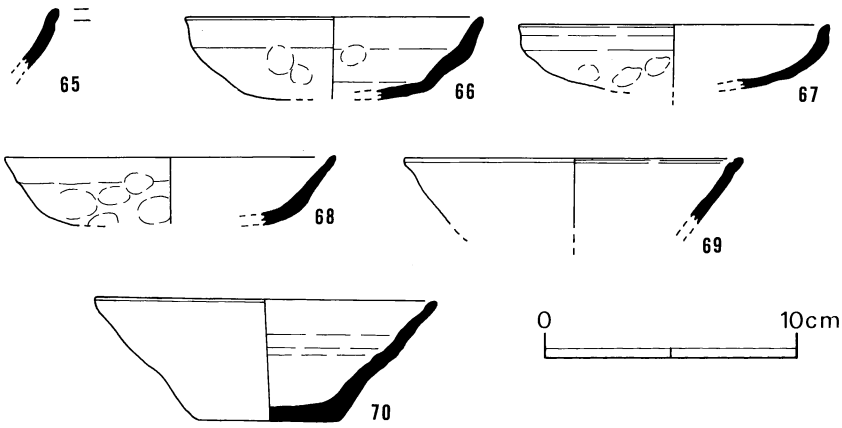



Fig 27　第Ⅱ区ＳＢ１（70），ＳＢ２（66），ＳＫ12（65），ＳＫ19（67），ＳＤ１（68，69）出土の土器

調査区西辺に位置する。1.26×1.1mの不整形プランを有し深さ８cmを測る。中世に属する土師器細片が４点出土している。

ＳＫ12（Fig 28・27－65）

調査区の南寄りに位置する。1.04×0.56mの隅丸長方形プランを有する。深さは24cm～30cmを測り東壁に向かって低くなっている。埋土はⅠ層：濃茶色粘質土，Ⅱ層：暗茶色砂礫層からなり，埋土中より土師器皿65の他に５点の土師器細片が出土している。65はⅡ層出土で口縁端部をつまんで横方向に強くナデている。

ＳＫ13（Fig 28）

調査区の南寄りに位置している。1.44×0.94mの不整形でプランを有し，床面及び壁側には径30～44cmを測るピット状の掘り込みがあるが，ＳＫ13との先後関係などについては不明である。埋土中より中世の土師器細片が４点出土しているが，図示し得るものはない。

ＳＫ14（Fig 28）

ＳＫ13の西隣に位置する。80×70cmの不整形プランを有し，深さ20cmを測る。壁面は垂直に立ち上がり埋土中より中世の土師器１点が出土している。

ＳＫ18（Fig 28）

調査区の西端に位置し一部ＳＢ１と切り合っているが，先後関係は不明である。1.5×1.2mの隅丸長方形プランを呈し，西壁側に一部張り出しが付いている。深さは10～15cmを測り床面には径20×40cm，深さ30cmのピットが掘られている。埋土中より縄文土器片１点，中世の土師器細片３点が出土しているが図示し得るものはない。

ＳＫ19（Fig 29・27－67）

調査区南端に位置する。1.8×1.5mの不整形プランを有し３段に掘り込まれている。北東側の床面は深さ７cm，南側の床面は14cm，最も深いところで24cmを測る。南側の床面にのみ拳大から人頭

大の角礫が10数個置かれているが，性格は不明である。埋土中より中世土師器16点が出土している。67は床面出土の皿で，口縁端部を横方向に強くナデ，口縁部より下には指頭圧痕が極めて顕著についている。

この他調査区南端の氾濫原との境いに6基の土坑が並ぶが，これらはすべて近世に属し墓坑の可能性がある。

表— 3　第Ⅱ区土坑一覧表

| 土坑 No. | 長軸 (cm) | 短軸 (cm) | 深さ (cm) | 平面形 | 出土遺物（点） | 出土土器実測No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK1 | 124 | 76 | 38 | 楕円形 | 土師器　2 | | 中世 |
| 2 | 100 | 72 | 20 | 不整形 | | | |
| 3 | 134 | 70 | 20 | 楕円形 | 土師器　9 | | 〃 |
| 4 | 126 | 110 | 8 | 不整形 | 〃　4 | | 中世 |
| 5 | 90 | 70 | 20 | 〃 | | | |
| 6 | 114 | 61 | 10～18 | 楕円形 | | | |
| 7 | 374 | 170 | 70～90 | 不整形 | 縄文土器細片多数 | | 縄文 |
| 8 | 100 | 100 | 12 | 〃 | | | |
| 9 | 190 | | 15 | 楕円形 | | | |
| 10 | 138 | 112 | 26 | | | | |
| 11 | 86 | 76 | 38 | 不整形 | 縄文土器9 | | 縄文 人頭大の礫あり |
| 12 | 104 | 56 | 24～30 | 隅丸長方形 | 土師器　6 | 65 | 中世 |
| 13 | 144 | 94 | 24 | 不整形 | 〃　4 | | 〃 床面にピットあり |
| 14 | 80 | 70 | 20 | 〃 | 〃　1 | | 〃 |
| 15 | 106 | 92 | 4～16 | 楕円形 | 〃　15 | | 〃 ピット状の掘り込みあり |
| 16 | 100 | 74 | 20 | 〃 | | | |
| 17 | 92 | 88 | 9 | 不整形 | 土師器　6 | | 中世 |
| 18 | 150 | 120 | 10～15 | 隅丸長方形 | 縄文土器1，土師器3 | | 〃 |
| 19 | 180 | 150 | 7～24 | 不整形 | 土師器　16 | 67 | 〃 角礫10数点出土 |
| 20 | 102 | 94 | 10 | 〃 | 〃　1 | | 〃 ピットと切り合いあり |
| 21 | 80 | 78 | 3 | 〃 | | | |
| 22 | 108 | 94 | 3 | 楕円形 | | | |
| 23 | 340 | 290 | 7 | 不整形 | | | |
| 24 | 112 | 88 | 5 | 楕円形 | | | |
| 25 | | 90 | 10 | 不整形 | | | |
| 26 | 390 | 22 | 10 | 〃 | 土師器　21 | | |
| 27 | 66 | 55 | 5 | 楕円形 | | | |
| 28 | 80 | 60 | 10 | 〃 | | | |

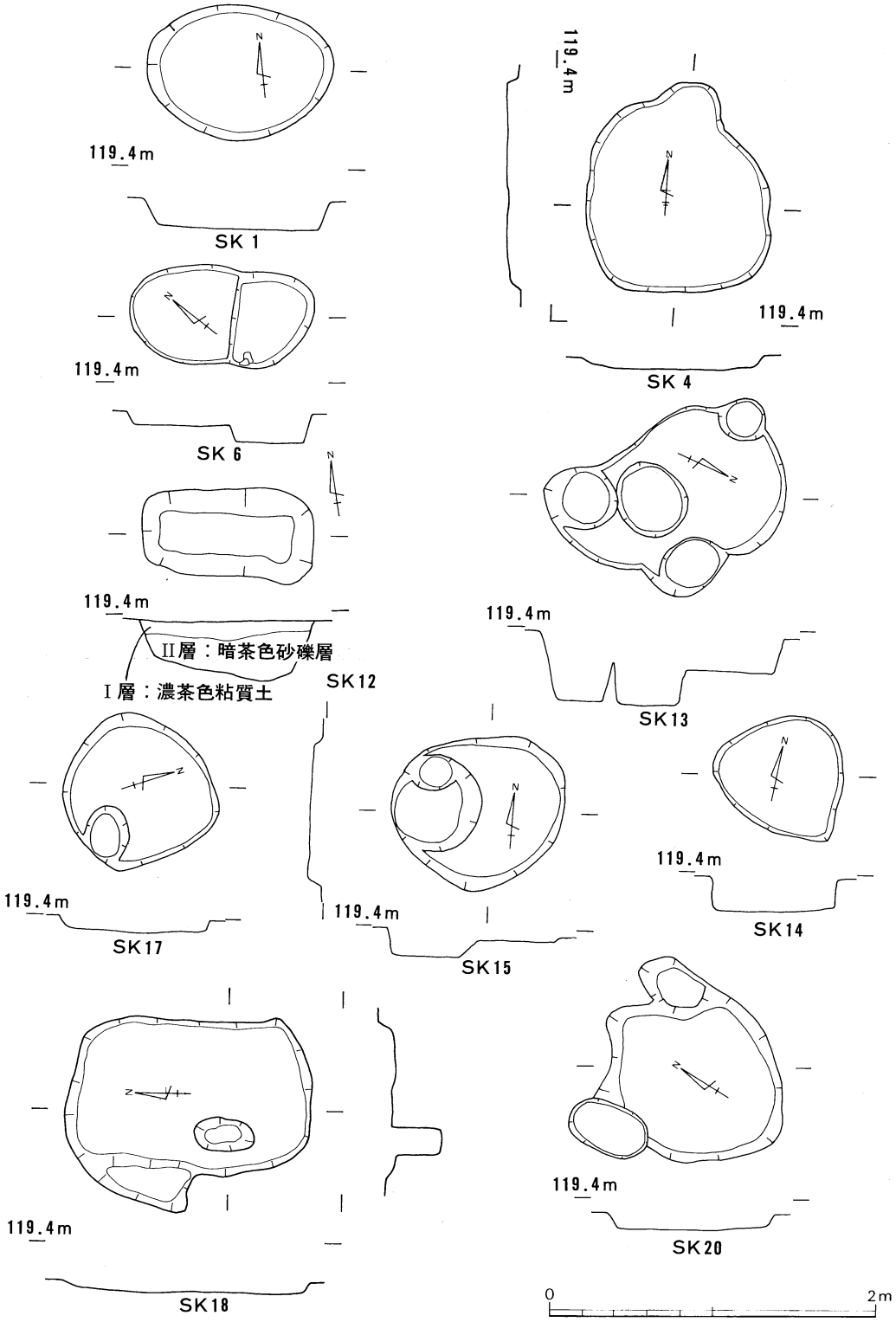



Fig 28　第II区　中世の土坑　ＳＫ１，４，６，12～15，17，18，20

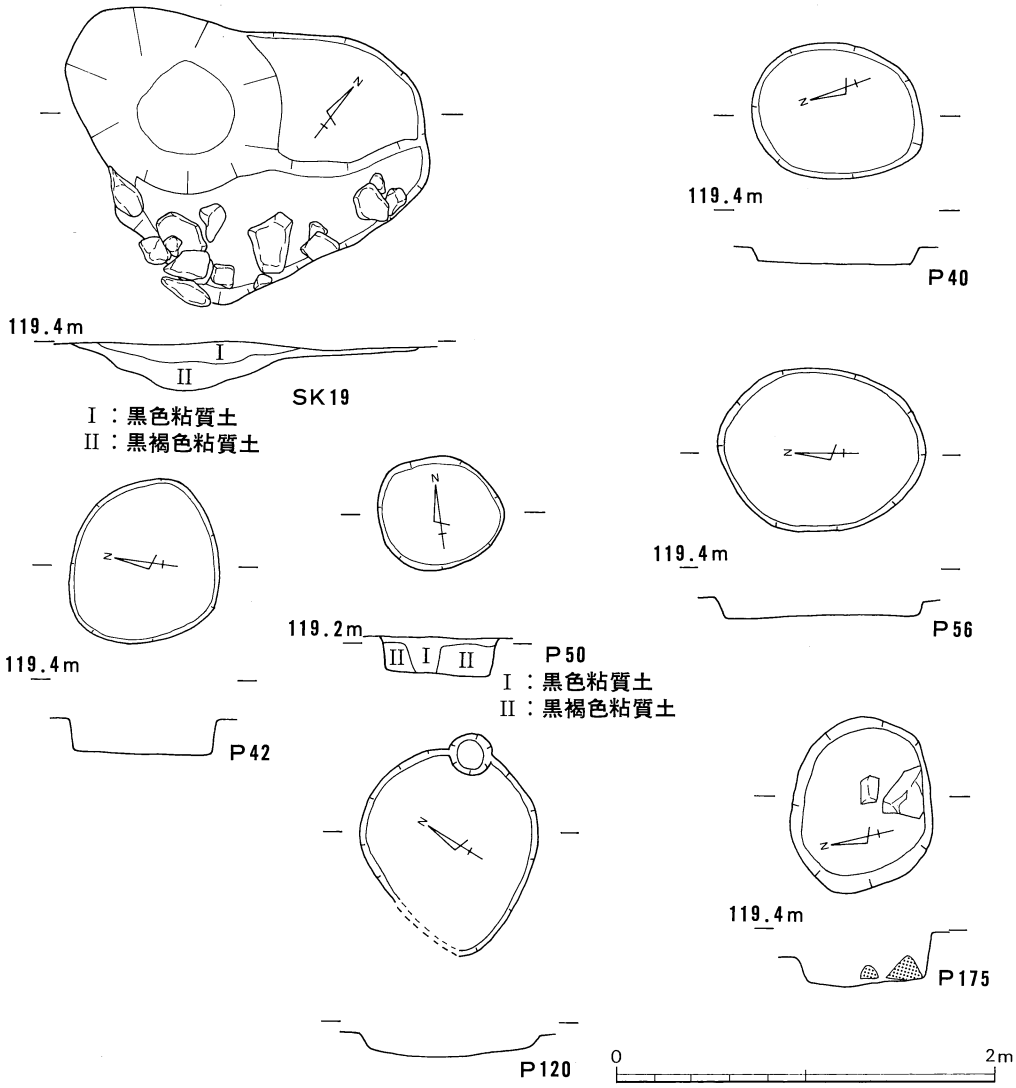



Fig 29　第Ⅱ区中世の土坑及びピット　ＳＫ19，Ｐ40，Ｐ42，Ｐ50，Ｐ56，Ｐ120，Ｐ175

③　溝

ＳＤ１（Fig 27－68・69）

ＳＢ１の東から東西に延びる溝であるが随処で大小のピットと切り合っており，いびつな形状をしている。おおよその幅は40cm前後，深さは10～15cm，延長は12cm以上で東限は不明である。西端の床面と東端の床面では10.5cmの差があり西端が低くなっている。埋土は濃茶色砂礫混ざりの粘質土で，埋土中より土師器68，69が出土している。68は未ロクロ成形の皿で，口縁部内外面横方向のナデ調整，口縁部以下は指頭圧痕が見られる。69はロクロ成形の坏と考えられる。口縁端部がわず

かに外反し内面に弱い沈線が1状走る。内外面丁寧な横ナデ調整を施す。前者は明らかに中世のものであるが，後者は古代に遡る可能性がある。後者は混入遺物と考えられる。

④　ピット出土の遺物（Fig 30）

当調査区では600個近いピットを検出し，その内150個のピットから土師器を中心として何らかの遺物が出土している。これらのピットはその多くが柱穴と考えられるが，氾濫原に掘られていることもあって整然とした並びを捉むことができない。150個のピットから 出土した遺物の中で図示し得たのは47点であり，ここでは図示し得た遺物を中心に述べて後述するピットの時期判定の基準としたい。ピット出土の土器の中で最も多いのは土師器皿であり，これについては煩雑さを避けるためにあらかじめ型態分類を行ってから述べることにする。

土師器皿（Fig 30～33－71～127）

ⓐ土師器皿Ⅰ類：未ロクロ成形によるもので，口縁端部を外方につまみ出して横方向に強くナデる。口縁部以外の部位には指頭圧痕が顕著である。71～93が該当する。P37・56～60・73・79・84・95・128・216・224・234・240・243・248・252・265から出土している。これらのうちP37からは79・93，P57からは98・89，P248からは80・90，P252からは86・91が出土している。これらはすべて破片であるが，焼成・色調などから同一個体でないことが明らかであり，皿Ⅰ類間での共存関係を示している。

ⓑ土師器皿Ⅱ類：同じく未ロクロ成形によるが，口縁部内外面の横方向のナデの幅がⅠ類に比べて広い点を特徴とする。口縁部以外の横方向のナデ調整の及ばないところは，やはり指頭圧痕が顕著である。94～101が該当し，P42・86・138・141・162・176・194・195から出土している。

ⓒ土師器皿Ⅲ類：同じく未ロクロ成形によるが，Ⅰ・Ⅱ類に比べて口縁部の横方向のナデが顕著ではなく口縁端部が外反するものはほとんどない。102～125が該当し，P37・45・97・101・105・107・137・181・167・174・177・183・212・233・247・248・251・254・260・275から出土している。P248からの108・119の2点が出土しⅠ類の80・90と共伴している。

ⓓ土師器皿Ⅳ類：ロクロ成形による。底部から内湾気味に立ち上がり口縁部に至るもので底部には糸切り痕が残る。126（P164）・127（P46）が該当する。

土師器坏（Fig 33－128～131）

128（P156）は口縁部がわずかに外反する。129（P212）と130（P125）は，内外面にロクロ目が顕著に残り，130・131は底部外面に糸切り痕が見られる。

土師器椀（Fig 33－132）

P256から出土している。底部小片であるが，断面三角形の退化した貼付高台を有する。

瓦器椀（Fig 33－133）

P170から出土している。底部小片で断面三角形の高台を有する。

須恵器蓋（Fig 33－134）

P102から出土している。口縁端部を下方につまみ出し横ナデを施す。

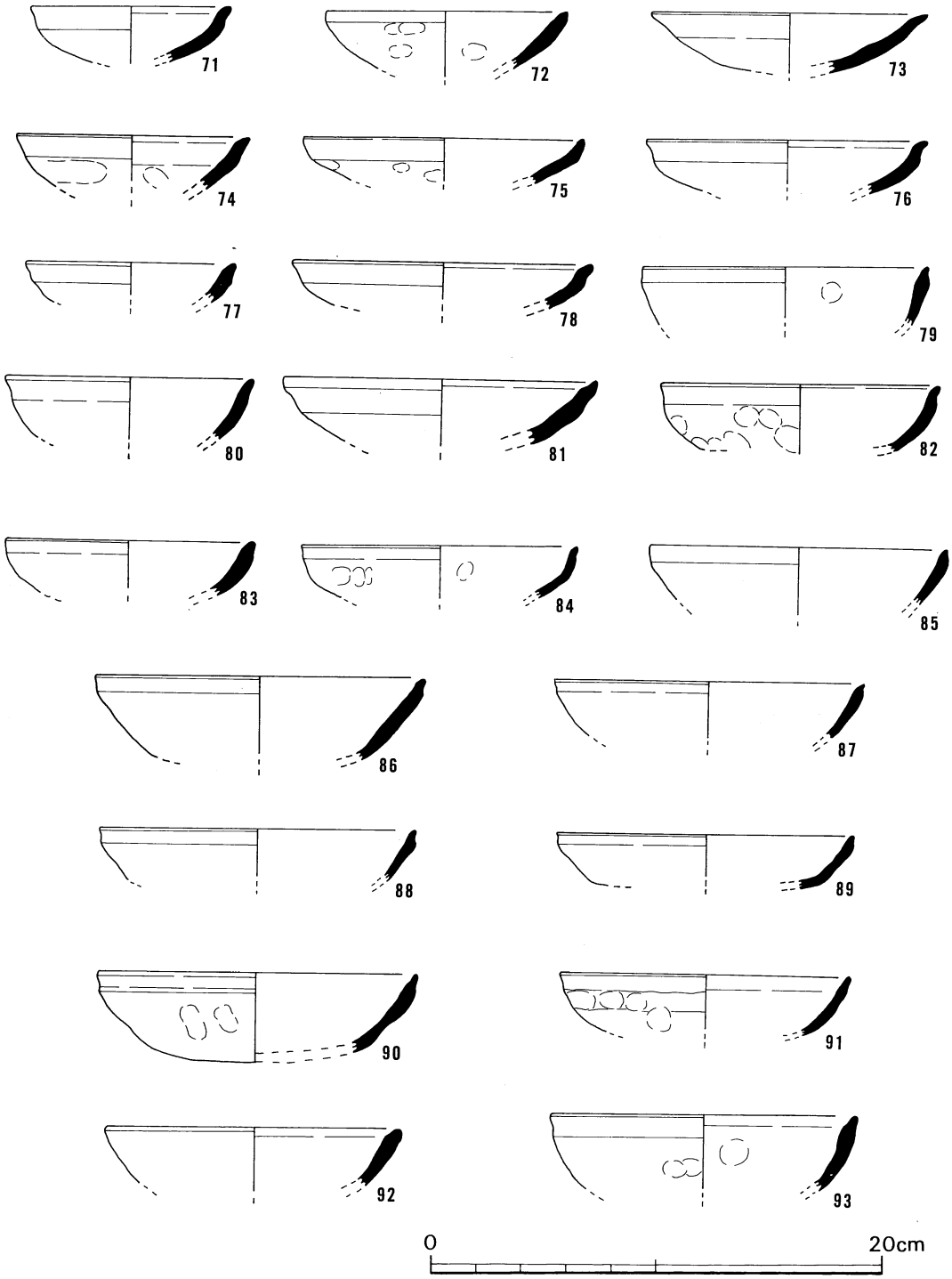



Fig 30　第Ⅱ区ピット出土の土師器皿Ⅰ類

P 37 (79・93)，P 57 (88・89)，P 56 (77)，P 58 (87)，P 60 (85)，P 73 (71)，P 59 (72)，P 79 (75)，P 84 (84)，P 95 (92)，P 128 (82)，P 216 (83)，P 224 (78)，P 234 (73)，P 243 (74)，P 248 (80・90)，P 240 (76)，P 252 (86・91)，P 265 (89)，

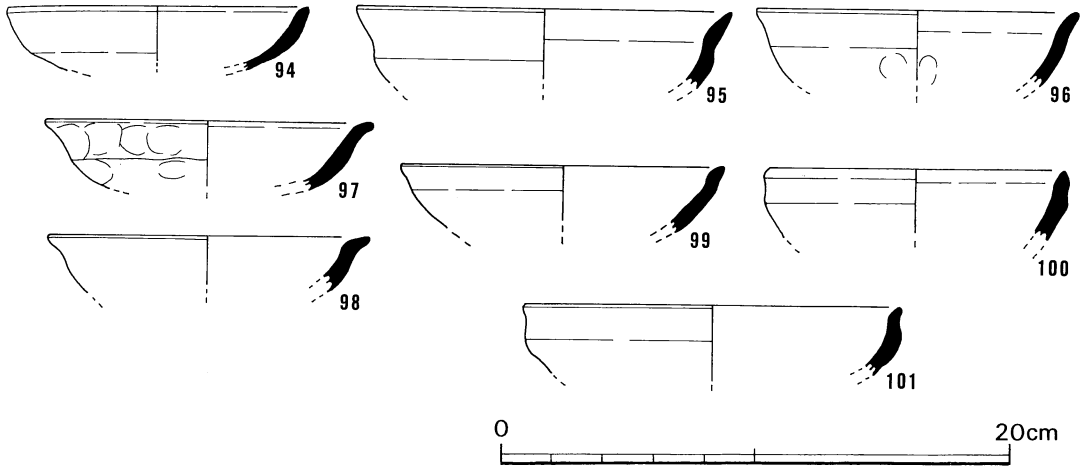



Fig 31　第Ⅱ区ピット出土の土師器皿Ⅱ類

P86 (95)，P42 (101)，P138 (96)，P141 (97)，P162 (99)，P176 (100)，P194 (98)，P195 (94)

土錘（Fig 33－135・136）

135（P82）は，長さは不明であるが最大径1.3cm，孔径0.6cmを測る。136（P100）は推定直径3cm，孔径1.2cmを測る。

土師器鍋（Fig 35－137～140）

137（P277）・138（P198）・139（P211）・140（P60）は，胴部外面に叩きを有するタイプである。137は比較的短い口縁が内傾して立ち上がり，138は口縁下に断面三角形の鍔が上向きにつく。140は直線的に立ち上がる口縁下に断面カマボコ状の鍔が下垂気味に付いている。139は他のものに比べて口径が小さく器壁が厚い。4例とも例外なく外面には煤が付着している。これらのうちでP60出土の140は，土師器皿Ⅰ類の85と共伴している。

瓦質鍋（Fig 35－141）

P83から出土している。口縁部は上胴部からく字状に屈曲し外反する。口唇部はナデにより凹状を呈す。

青磁（Fig 34－142－144）

142（P79）は内湾気味に立ち上がり外面に幅広の蓮弁を配し，143（P141）は口縁部が外反し内外面無文の椀である。144（P258）は，見込みに印花文を施す。高台は高く畳付けは丸くおさめ，釉は高台内外面から外底全面に施釉した後，外底を蛇目状に削り取っている。

瀬戸（Fig 34－146）

P82から出土した香炉である。直線的に立ち上がり口縁部は内外に肥厚，口唇部は面をなす。

⑤　包含層出土の遺物

土師器皿・坏（Fig 36－148～154）

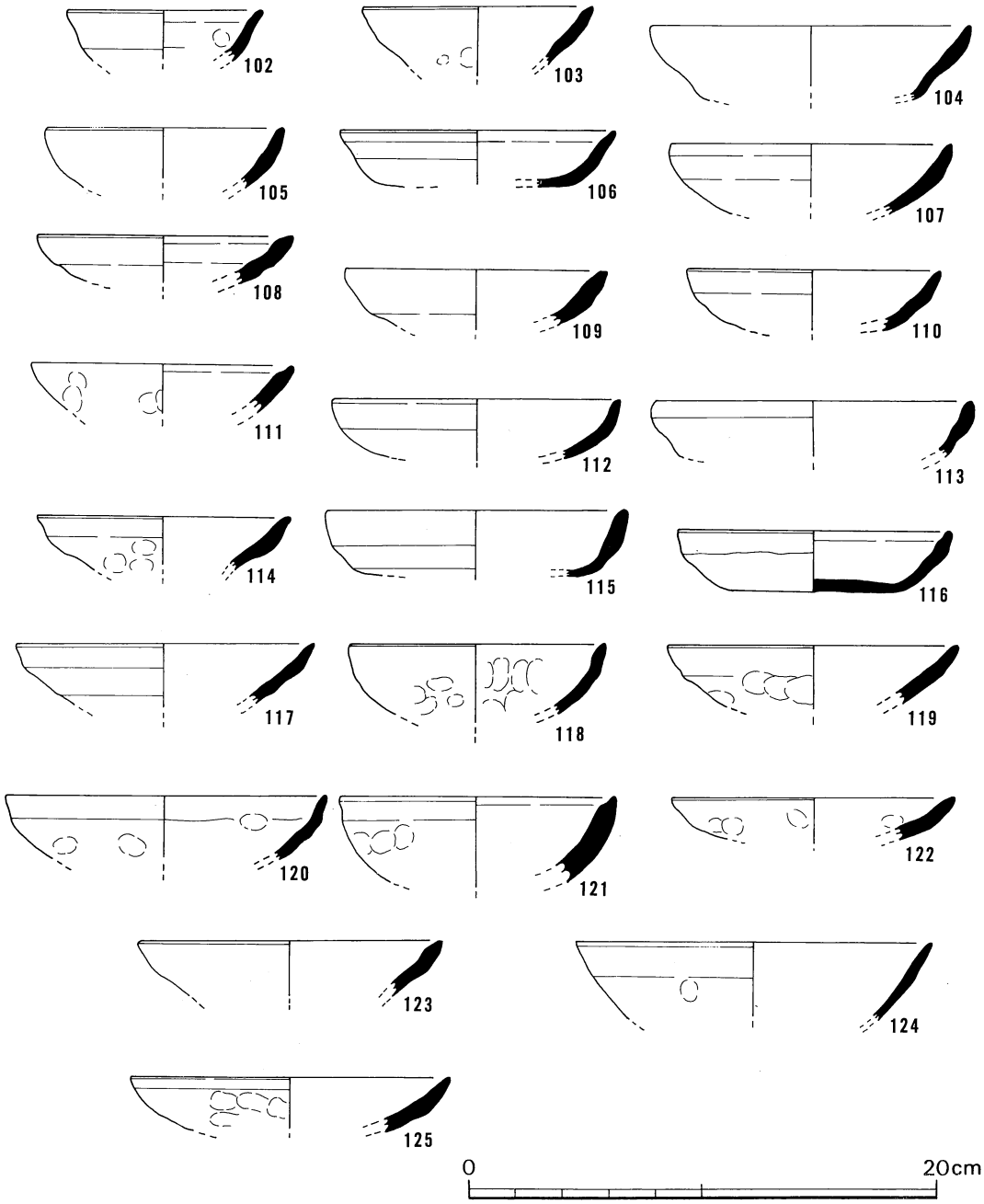



Fig 32　第Ⅱ区ピット出土の土師器皿Ⅲ類

P 37 (120)、P 45 (123)、P 97 (106)、P 101 (111)、P 105 (102)、P 107 (114)、P 137 (113)、P 181 (112)、P 167 (118・122)、P 174 (105)、P 177 (114)、P 183 (104)、P 212 (116)、P 233 (109)、P 247 (107)、P 248 (108・119)、P 251 (103)、P 254 (125)、P 260 (115)、P 275 (110・117・124)

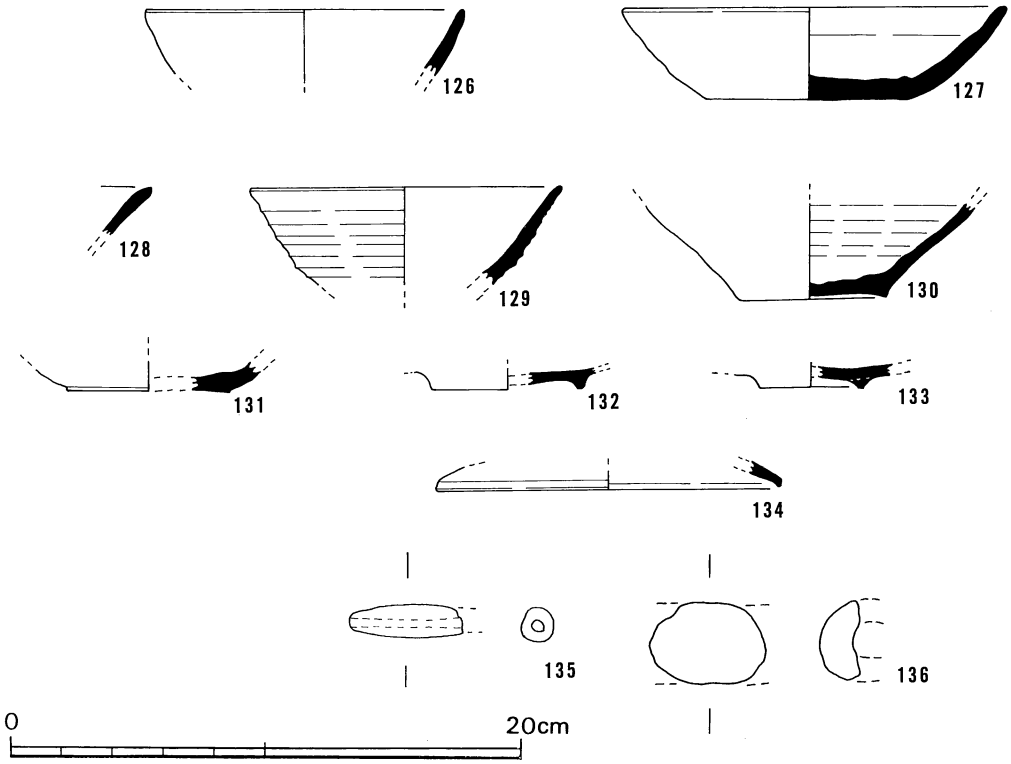



Fig 33　第Ⅱ区土師器皿Ⅳ類　P164 (126)，P46 (127)

土師器坏　P19 (131)，P125 (130)，P156 (128)，P212 (129)
土師器椀　P256 (132)，瓦器椀　P170 (133)
須恵器蓋　P102 (134)，土　錘　P82 (135)，P100 (136)

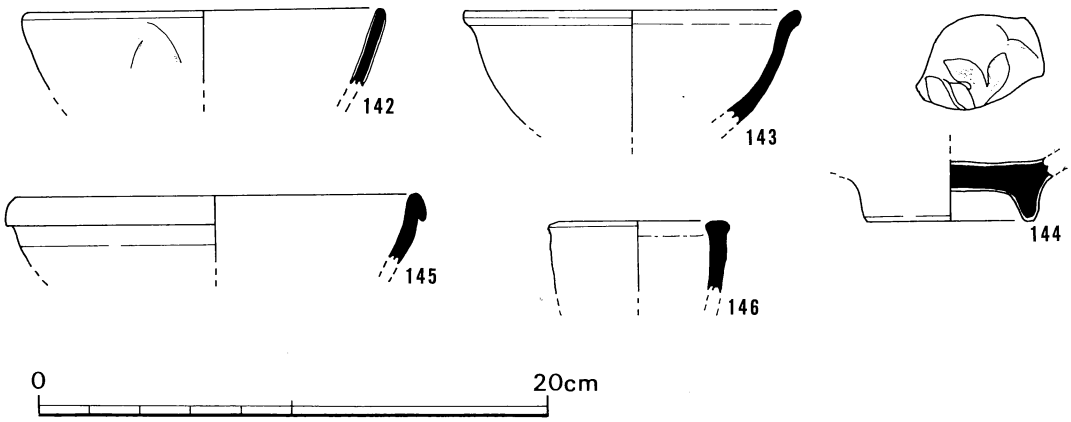



Fig 34　第Ⅱ区ピット出土の輸入陶磁器と瀬戸

青磁　P79 (142)，P141 (143)，P258 (144)，P258 (144)，白磁P190 (145)，瀬戸P82 (146)

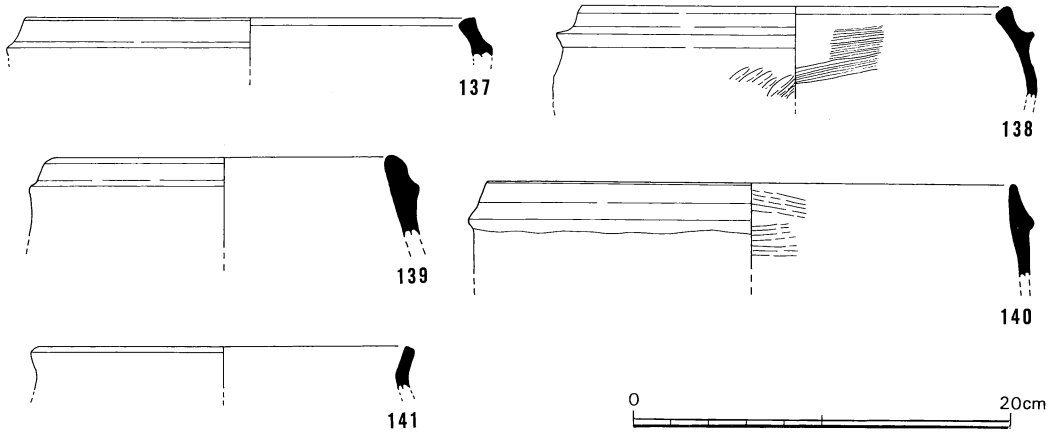



Fig 35　第Ⅱ区ピット出土の土師器・瓦質の鍋

P60 (140)，P198 (138)，P211 (139)，P277 (137)，P83 (141)

148は，口縁端部をつまんで横方向に強くナデるタイプで先述のピット出土の土師器Ⅲ分類のⅠ類に属する。149～151，153は，口縁部外面を幅広く横方向にナデるタイプでⅡ類に属する。152は内湾気味に立ち上がる口縁部を有するものでⅢ類に属する。154はロクロの成形の坏底部で糸切り痕が明瞭に残る。

土師器鍋（Fig 36－155～160）

155は口縁部に向かって直線的に立ち上がり端部は尖り気味，外面には横位の擦痕が見られ，煤けている。搬入品である。156は直立気味に立ち上がり口縁部はわずかに外側に肥厚，口唇部は横方向のナデにより凹状をなす。157は断面カマボコ状の鍔が下垂気味に付き，158～160は胴部外面叩きを施すもので，口縁下に断面三角ないしは台形のしっかりした鍔が付く。159は口縁外面にヘラ描沈線が1条巡る。

土師器釜（Fig 36－161）

肩の張った上胴部から口縁部が短く立ち上がり，端部は丸くおさめる。

土師器甕（Fig 36－162）

口縁部がく字状に屈曲外反し端部はわずかに上・下に肥厚，口唇部はナデにより凹状をなす。頸部内面に横位のハケ調整がみられる。

土錘（Fig 36－163～168）

166のみ完形品である。長さ5.2cm，径2cm，孔径8mm，重さ17g

青磁（Fig 37－167～177）

167・168は，内外面無文で口縁部が外反するタイプである。168は二次的に被熱赤変している。

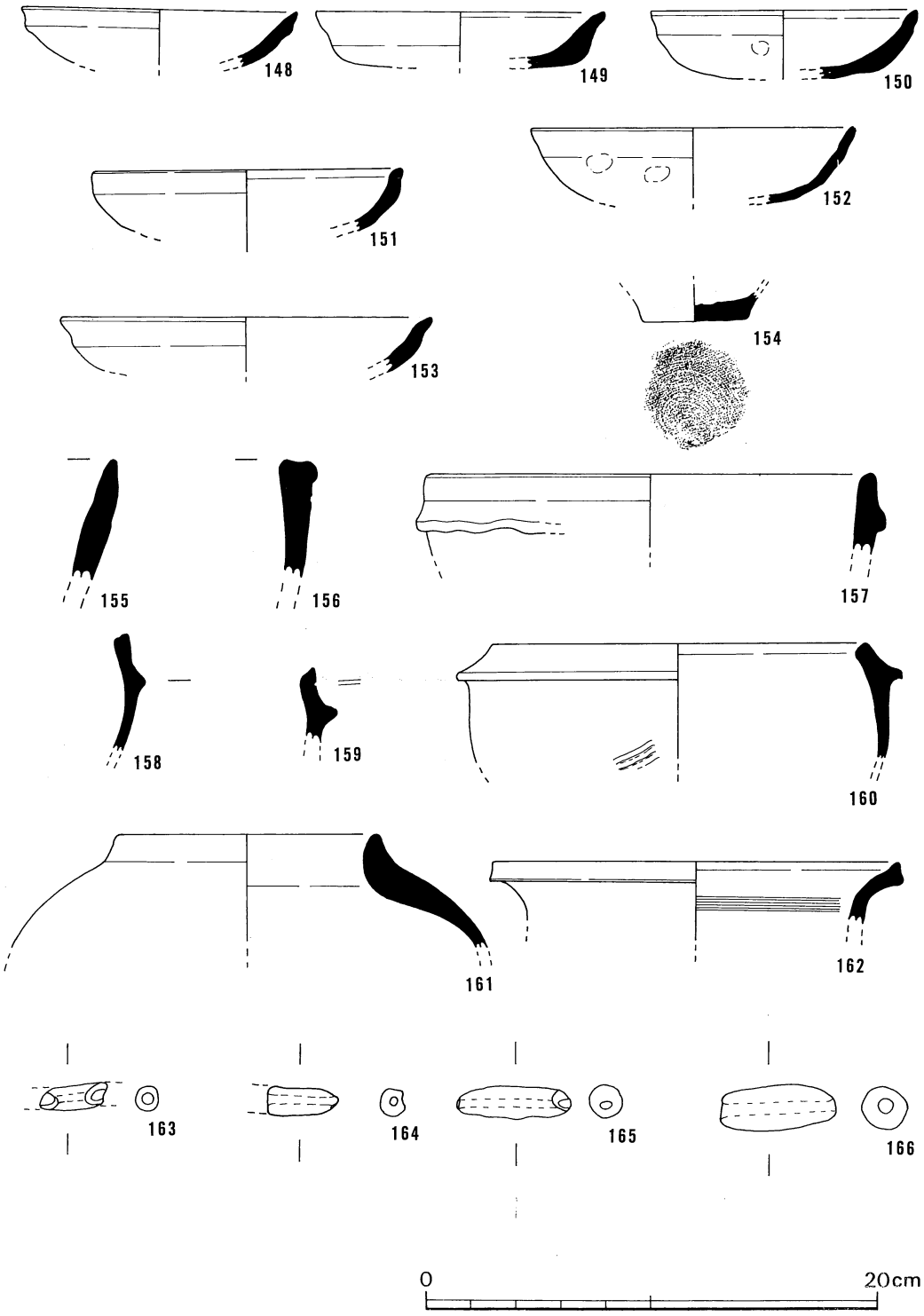



Fig 36　第Ⅱ区包含層出土の遺物：土師器

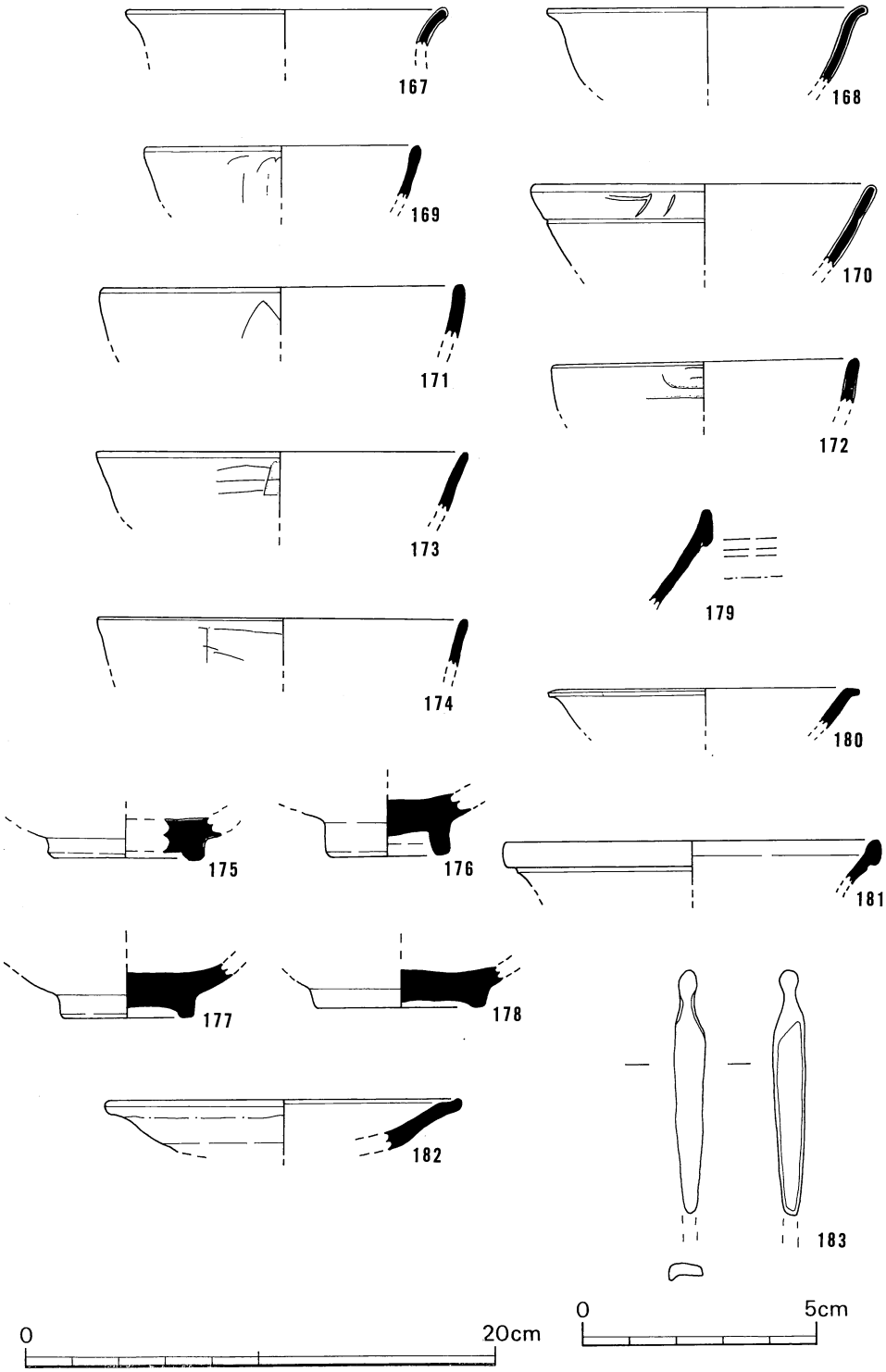



Fig 37　第Ⅱ区包含層出土の遺物：青磁その他

青磁：167～177　白磁：178～181　唐津：182　笄：183

169は内湾気味に立ち上がり，外面に線描の蓮弁を施しているが波頭部と蓮弁の単位とが全く対応しないほどに退化している。171は，外面に幅広の蓮弁を配している。170・172～174は口縁部外面に雷文帯を配するタイプで，170と172は線描，173・174は片切り彫りによっている。175～177は底部である。175は厚い底部で高台は台形状，畳付は平坦面をなし脇を斜めに面取っている。高台外面まで施釉。176は高い高台を有し外底の一部まで施釉，二次的な火を受け全面赤変している。177は厚い底部を有し高台は断面方形，畳付は平坦な面をなし脇を斜めに面取っている。高台外面にまで施釉。

白磁（Fig 37－178～181）

179・181は玉縁状の口縁を有し，180は口縁端部が短く外反する端反りの椀である。178は底部で断面台形状の高台，畳付は面をなす。外面露胎。

③　唐津（Fig 37－182）

皿である。口縁部はわずかに外反し口縁部を上方につまみ出す。内面と口縁部外面に施釉二次的に火を受けている。

④　笄（Fig 37－183）

基部を欠損するが青銅製の簪状の笄である。最大幅6㎜，厚さ2㎜を測り，先端部は細くなり匙状を呈す。

3　第Ⅲ調査区

第Ⅲ調査区は，第Ⅰ調査区の西側に位置する。基本層序は第Ⅰ調査区とほぼ同様で，床土下の灰茶色粘質土層に中世の遺物包含層が，その下層に火山灰を基調とする弥生時代・古代の遺物包含層が形成されている。

(1)　中世の遺構と遺物

①　土坑

第Ⅲ調査区で検出した土坑は大・小あわせて53基にのぼるが，主要なもののみ個別に記述し他の土坑については一覧表に譲りたい。

ＳＫ１（Fig　40）

調査区東寄りに位置し東西に並ぶ4基の土坑群ＳＫ１・49～51の1つである。98×88㎝，深さ12㎝を測る楕円形のプランをなす。埋土は黒褐色粘質土単純一層で，埋土中より土師器片2点が出土している。

ＳＫ4（Fig 40）

ＳＫ1の西に位置しＳＫ3・4・6と共に土坑群を形成している。96×80㎝，深さ8㎝を測り不整形のプランをなす。埋土は黒褐色粘質土単純一層で，埋土中より土師器片2点が出土している。

ＳＫ8（Fig 40・39－201・202）

調査区のほぼ中央部に位置し小土坑と切り合っているが先後関係は不明である。100×96㎝深さ18㎝を測り，隅丸方形プランをなす。埋土は暗褐色粘質土単純一層で，埋土中より瓦質鍋201・

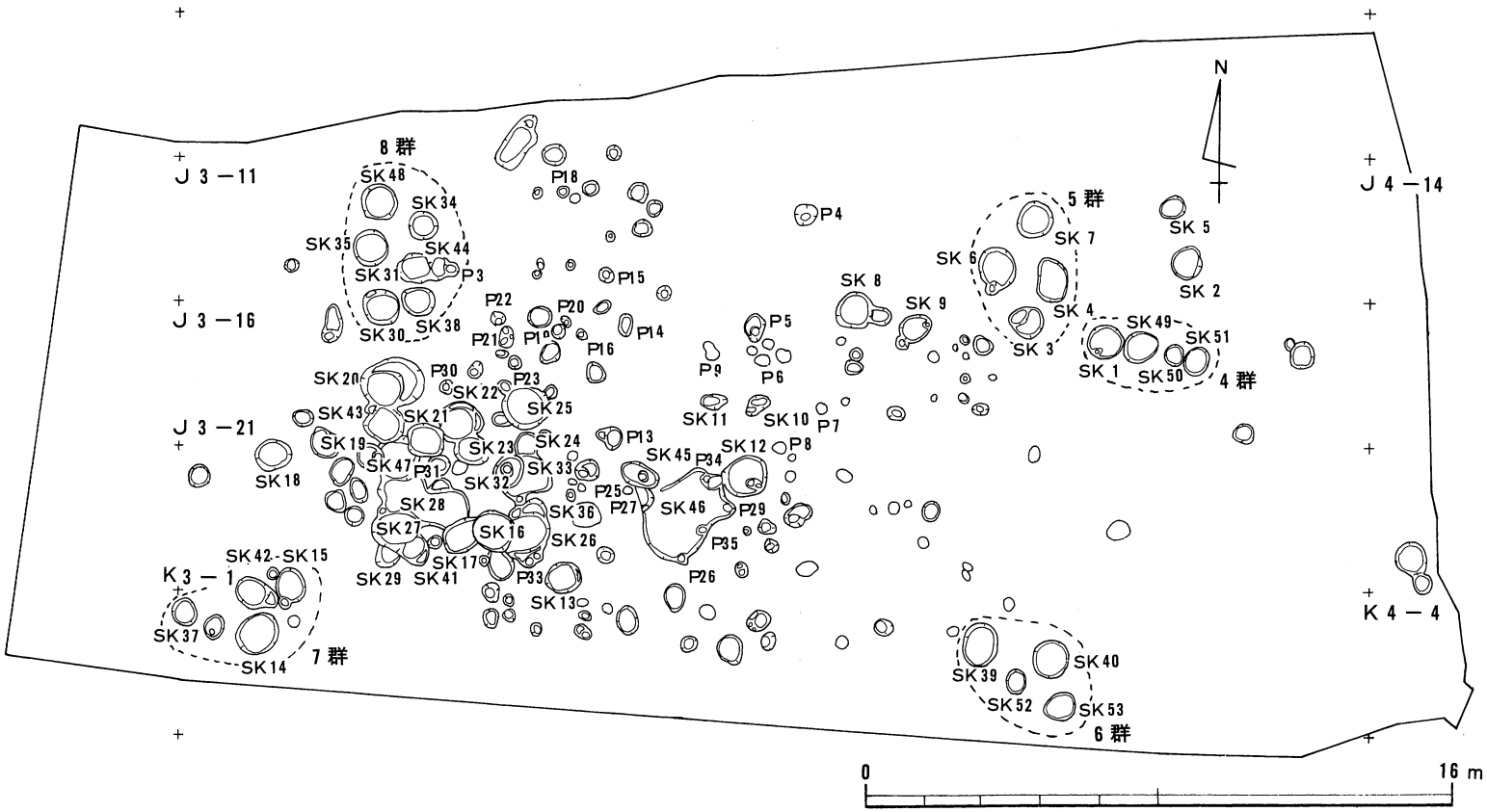



Fig 38　第Ⅲ区遺構全体図

202などが出土している。両者共に断面三角形状の鍔を貼付し，口縁端部は丸くおさめている。

ＳＫ15（Fig 40・39－191）

調査区両端部に位置しＳＫ14・37・42などと共に土坑群を形成している。90×82cm，深さ13cmを測り，楕円形のプランをなす。埋土は褐色粘質土単純一層で，埋土中よりロクロ成形の土師器坏191などが出土している。191は底部の細片であるが底部から強く内湾して立ち上がり，外底には糸切り痕が残る。

ＳＫ16（Fig 40・39－198）

調査区西寄りの土坑群密集地点にありＳＫ17・26などを切っている。121×120cm，深さ26cmを測り，楕円形のプランをなす。埋土はⅠ層：灰褐色粘質土，Ⅱ層：濃褐色粘質土であり，Ⅰ・Ⅱ層中より100点以上の土師器，瓦器，青磁片が出土しているが図示できたのは瓦質鍋198のみである。198は，口縁下に201と同様の断面三角形の鍔を貼付するタイプであるが，口唇部は面をなしている。

ＳＫ19（Fig 39）

ＳＫ19も土坑群密集地点にありＳＫ47を切っている。70×64cm，深さ6.5cmを測り楕円形のプランをなす。埋土は灰褐色粘質土単純一層で埋土中より土師器皿189，192，土師器坏193などが出土している。189，192は未ロクロ成形の皿で，口縁部外面をやや幅広く横方向にナデるタイプ（Ⅱ類）である。193はロクロ成形の坏で外底に糸切痕が残る。

ＳＫ20（Fig 40）

ＳＫ20も土坑群密集地点にありＳＫ43と切り合っているが先後関係は不明である。162×138cm，を測る楕円形のプランを呈し，床面は２段に掘り込まれており深さは22～35cmである。埋土はⅠ層：灰褐色粘質土，Ⅱ層：濃褐色粘質土であり各層から土師器細片が20点出土している。

ＳＫ21（Fig 40）

同じく土坑密集地点にありＳＫ47・ＳＫ22を切っている。94×90cm，深さは28cmを測り隅丸方形のプランをなす。埋土はⅠ層：灰褐色粘質土，Ⅱ層：暗褐色粘質土からなり，各層より土師器細片が６点出土している。

ＳＫ26（Fig 41，Fig 39－184・185・190・200）

ＳＫ16に切られ，ＳＫ36を切っている。160（推定）×110cm，深さ27cmを測り楕円形のプランをなす。埋土は灰褐色粘質土単純一層で，埋土中より土師器小皿184・185，皿190，白磁皿196，瓦質鍋200など多くの土器が出土している。184・185は共にロクロ成形で，口縁部は前者が内湾し後者が外反している。190は口縁部外面を幅広く横方向にナデるタイプ（Ⅱ類）に属する。200は今次調査で出土した瓦質鍋の中でもっともしっかりした断面三角形の鍔を有する。

ＳＫ30（Fig 40）

土坑密集地点の北にありＳＫ34・35・38などと共に土坑群を成形している。96×92cm，深さ15cmを測り隅丸方形のプランをなす。埋土は灰褐色粘質土単純一層で，埋土中より土師器片11点が出土しているが図示できるものはない。

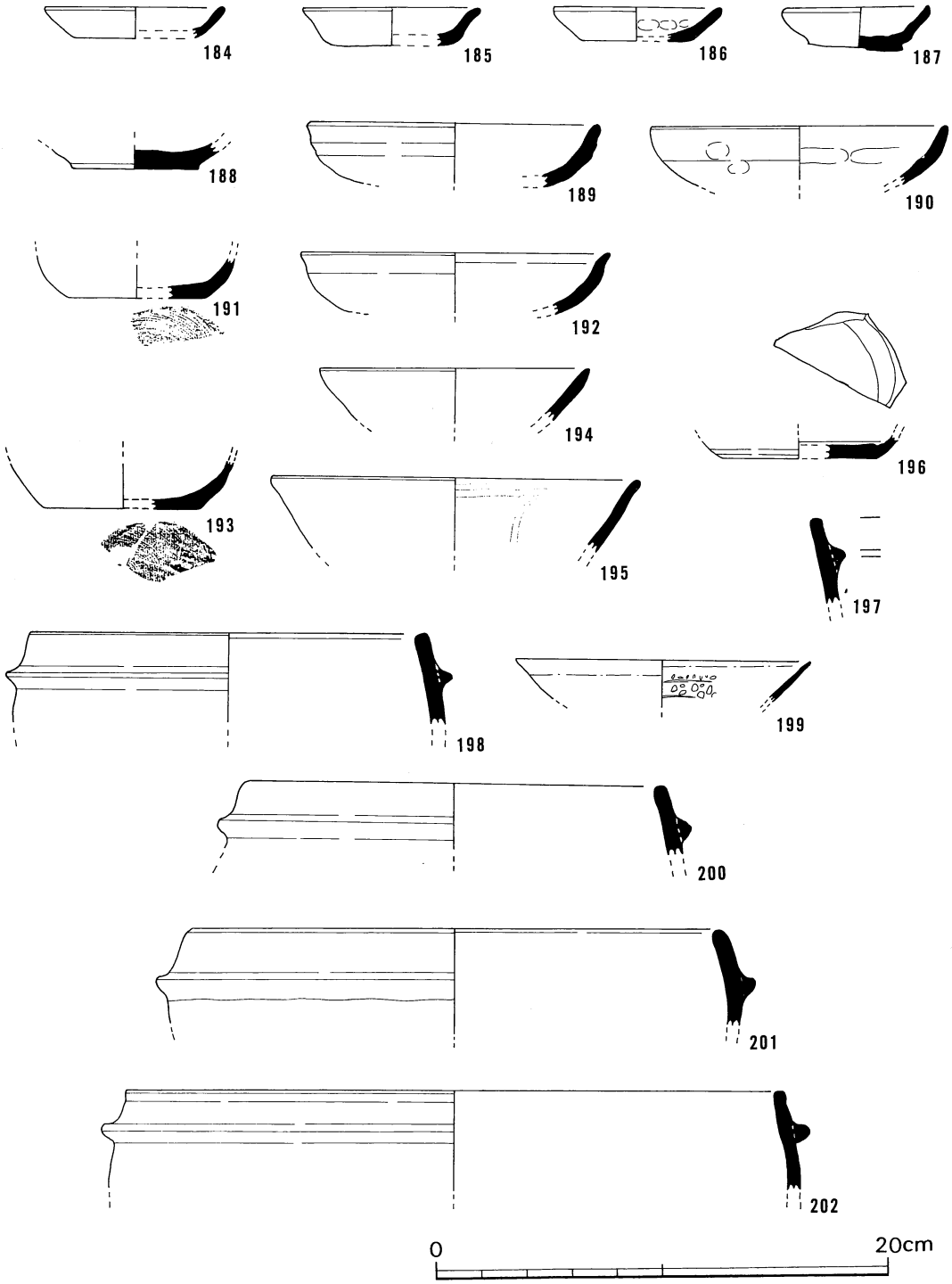



Fig 39　第Ⅲ区土坑出土の遺物

ＳＫ８（201，202），ＳＫ14（189），ＳＫ15（191），ＳＫ16（198），ＳＫ19（192，193），ＳＫ26（184，185，190，200），ＳＫ28（196），ＳＫ33（186，197），ＳＫ34（188），ＳＫ46（187，195，199）

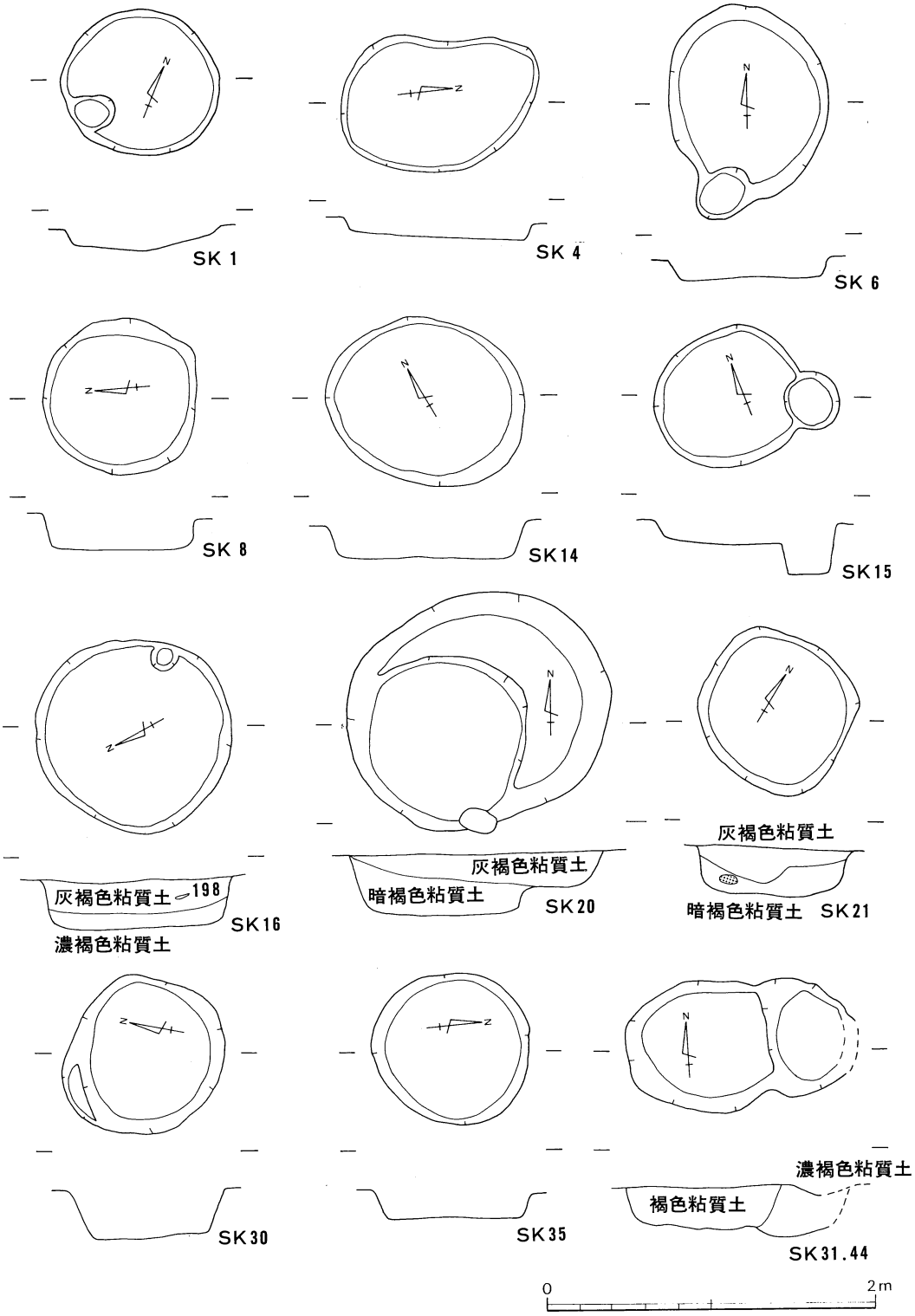



Fig 40　第Ⅲ区土坑平面及び断面図（ＳＫ１，４，６，８，14～16，20，21，30，31，35，44）

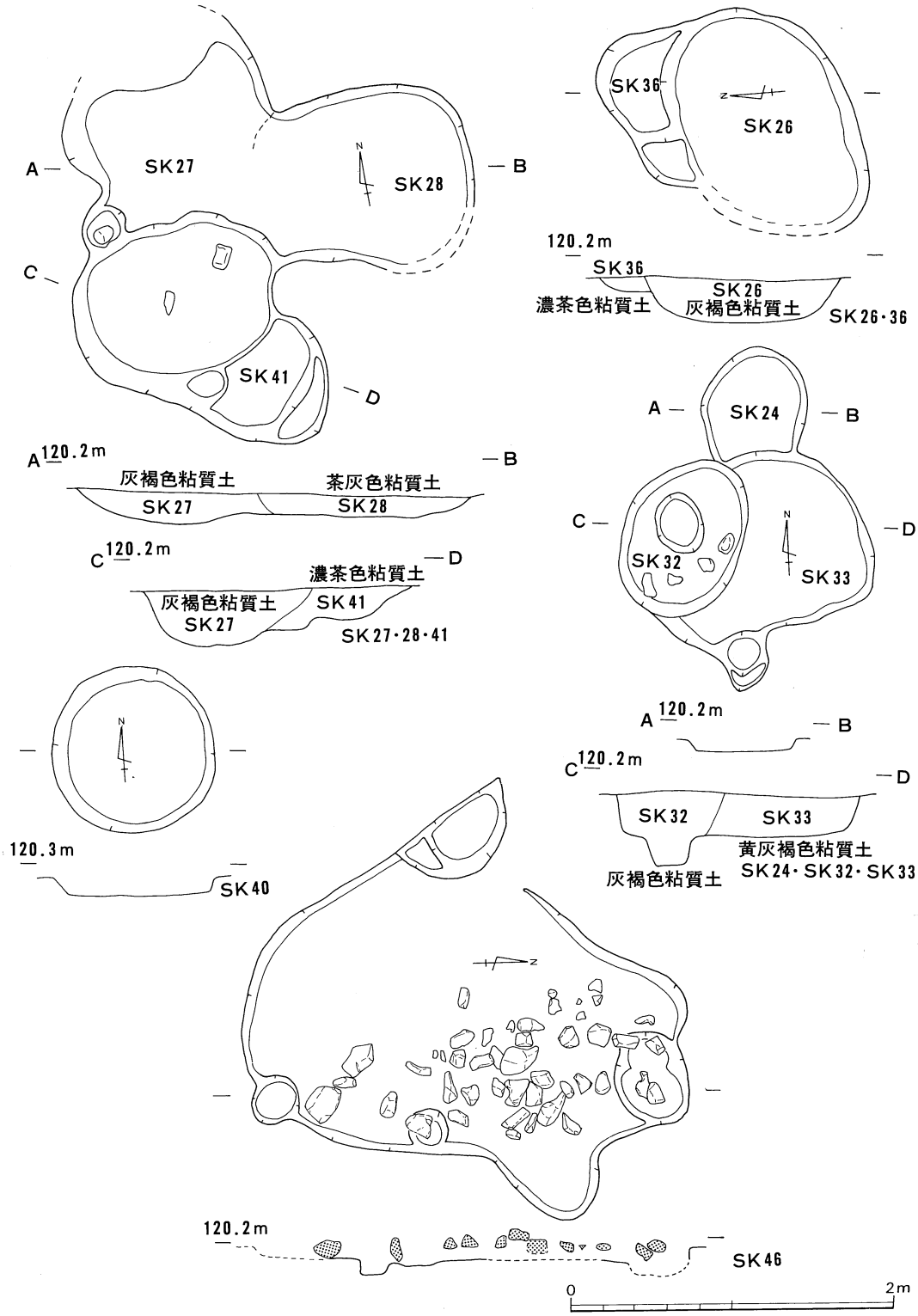



Fig 41　第Ⅲ区土坑平面及び断面図

ＳＫ33（Fig 41・39－186・197）

土坑密集地点にありＳＫ32に切られ，ＳＫ24との先後関係は不明である。150（推定）×108cm，深さ30cmを測り不整形のプランをなす。埋土は黄灰褐色粘質土単純一層で，埋土中より多量の土師器・瓦器片が出土しているが，図示できたものは土師器小皿186，瓦質鍋197のみである。186は，ロクロ成形で内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。197は，鍔，口縁の形態など198と同じである。

ＳＫ46（Fig 41・39－187・195・199）

土坑密集地の東側にある。276×170cm，深さ10cm前後を測り不整形プランをなす。床面の一部や壁の立ち上がりが一部不明であるが，床面に接するか数cm浮いた状態で角礫が多量に出土している。埋土は黒褐色粘質土で，埋土中より土師器小皿187，瓦器椀194，青磁椀195，青白磁199が出土している。187はロクロ成形による丁寧なつくりの小皿で，外底に糸切り痕が残る。195は龍泉窯の椀で内面に片切り彫りによる文様を配す。

② ピット出土の遺物（Fig 42）

当調査区においては100個近いピットを検出し，その内37個のピットから土師器を中心として何らかの遺物が出土している。これらのピットの多くは柱穴と考えられるが，その位置関係から掘立柱建物などを復元することはできなかった。ここでは第Ⅱ調査区と同様に図示し得た遺物を中心に述べて時期判定の基準としたい。

Ｐ１（207）：ロクロ成形による坏である。体部中位まで内湾気味に立ち上がり，口縁部に向かって直線的に外方に伸びる。内外面横ナデ調整。

Ｐ２（209・211・213）：プランの形態からすれば土坑とした方が適当なのかもしれない。３点ともロクロ成形による土師器坏で209・211はほぼ完形品である。209は内湾気味に立ち上がり，213は口縁部が外反し内外面にロクロ目を残す。両者共に糸切り痕が残る。

Ｐ３（227）：鎬蓮弁を有する龍泉窯の青磁椀である。蓮弁は片切り彫りで丁寧に描かれているが，鎬は中心をそれている。胎土は灰色堅緻，釉は透明度のある黄緑色で気泡が目立つ。

Ｐ６（206）：ロクロ成形による土師器坏で，内湾気味に立ち上がった後，直線的に口縁部に向って伸びる。207と同じ手法である。

Ｐ７（229）：最大径1.3cm，孔径４mm，長さ4.5cm，重さ4.5ｇの土錘である。

Ｐ10（216），Ｐ11（220），Ｐ12（219），Ｐ13（214・217），Ｐ16（221），Ｐ27（215），Ｐ30（218），：214以外はすべてロクロ成形による坏底部で外底には糸切り痕が認められる。219のみベタ高台を有し外面に擦痕が認められる。217，220の外底には糸切り後に付いた平行圧痕が認められる。214は内湾気味に立ち上がるロクロ成形の土師器坏口縁部である。

Ｐ14（223）：ロクロ成形による土師器坏である。口縁部は外反し端部がわずかに肥厚する。

Ｐ17（225）：瓦器椀である。上胴部から内側に屈曲し口縁部に向かって外反する。

Ｐ25（228）：土師器鍋である。断面カマボコ状の鍔を有し，口縁部は強く内傾している。口唇部は丸くおさめる。

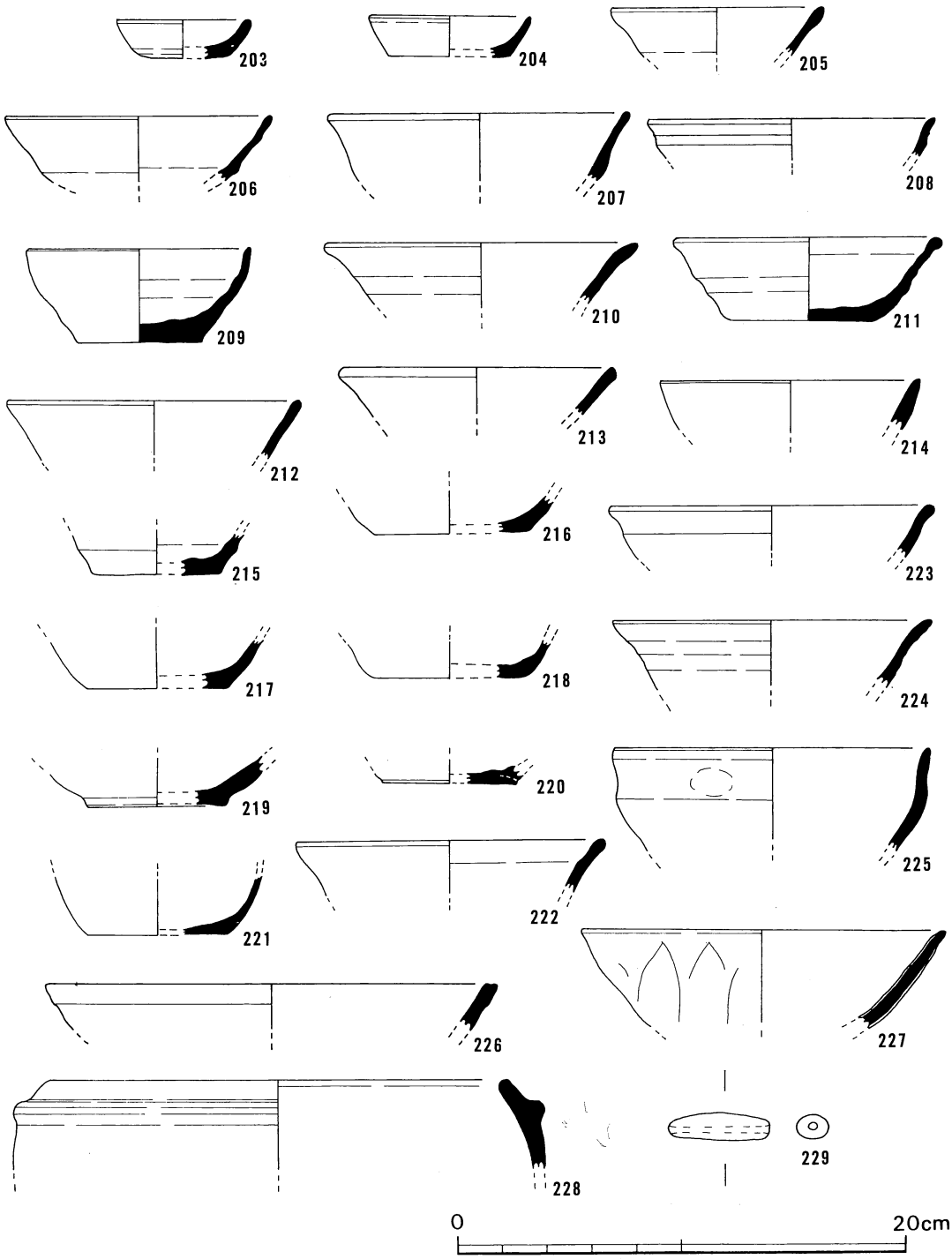



Fig 42　第Ⅲ区ピット出土の土器

P 1 (207)、P 2 (209・211・213)、P 3 (227)、P 7 (229)、P 10 (216)、P 11 (220)、P 12 (219)、P 13 (214・217)、P 14 (223)、P 16 (221)、P 17 (225)、P 24 (222)、P 25 (228)、P 26 (203・210)、P 27 (215)、P 28 (224)、P 29 (226)、P 30 (218)、P 34 (204・205・208・212)

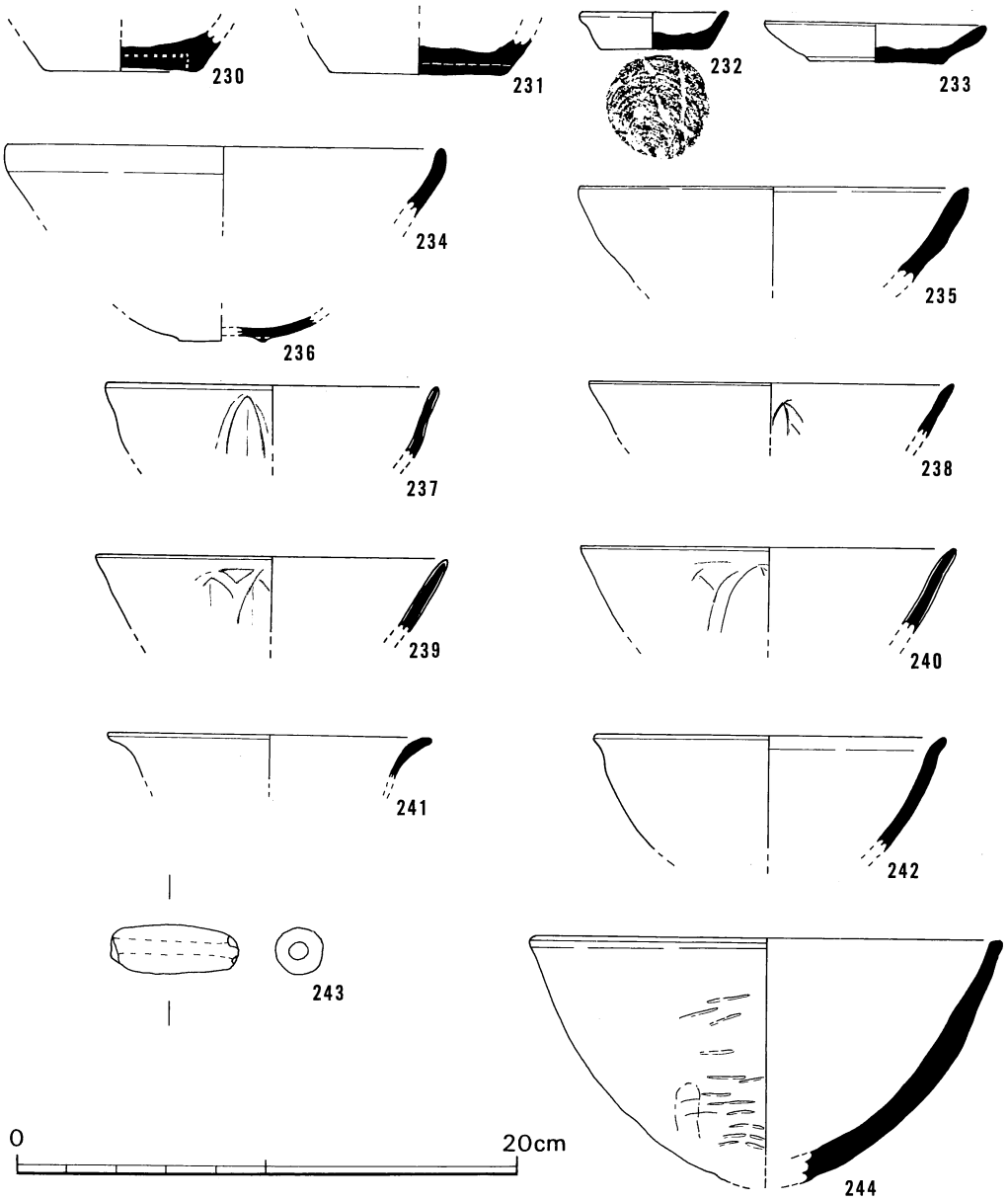



Fig 43　第Ⅲ区包含層出土の土器

土師器小皿（232・233）　土師器坏（230・234）　瓦器椀（234・235・236）　青磁椀（237～240・242）
白磁椀（241）　弥生土器鉢（244）　土鐘（243）

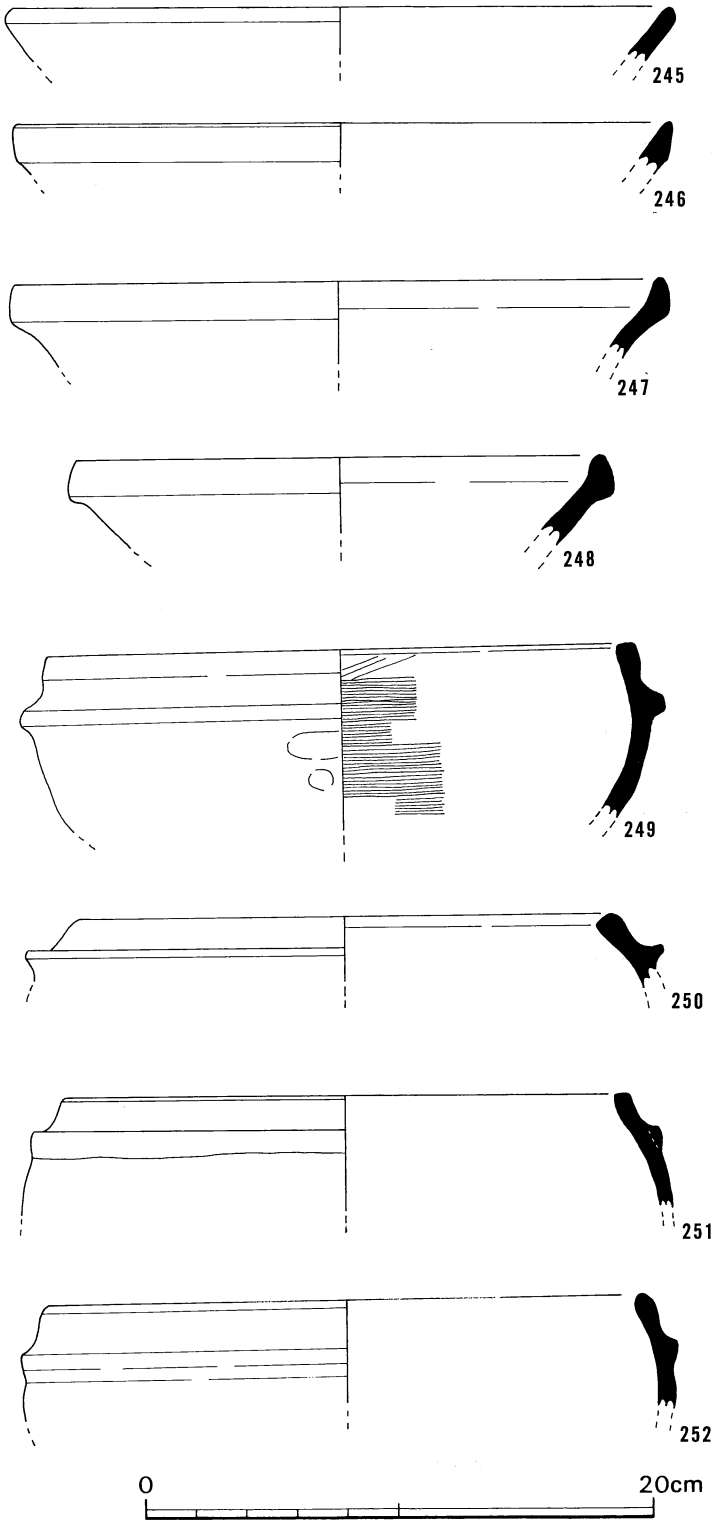



Fig 44　第Ⅲ区包含層出土の土器

P24（222）：ロクロ成形による土師器坏で口縁部に向かって大きく外反する。内外面横ナデ調整。

P26（203・210）：203はロクロ成形による丁寧なつくりの土師器小皿である。217は土師器坏で222と全く同じ手法・形態である。

P28（224）：ロクロ成形による土師器坏で，210と全く同じ手法によるが，外面にロクロ目が顕著に見られる。

P29（226）：土師器鉢口縁部である。口唇部は面をなし全面ナデ調整で仕上げる。

P34：（204・205・208・212）：すべてロクロ成形による土師器小皿（204）坏（205・208・212）である。204は203と類似するもややつくりが雑である。205・208・212は口縁部が外反するタイプで208は外面のロクロ目が顕著である。

③　包含層出土の遺物（Fig 43・44）

ⓐ弥生土器（244）後期末（6期）に属する鉢である(1)。半球形の体部を有し外面は叩きのあとをナデている。口縁部はわずかに外方に肥厚し口唇部は面をなす。

ⓑ土師器皿（232・233）：共にロクロ成形による小皿であるが，233の方が丁寧なつくりである。232は内面に煤が付着しており灯明皿として使用されたものであろう。

ⓒ土師器坏（230・231）共にロクロ成形による坏底部であるが両者共に粘土の剝離したところから製作技法を知ることのできる重要な資料である。まず成形に際して直径5㎝，厚さ6～7㎜の粘土円板を作り，その上に粘土をつきたして体部や底部を成形している。ロクロ上におかれた粘土塊からそのままロクロ引きして成形されたものではないことを示している。円板製作とロクロ引きという2段階の工程を必要としている。

ⓓ瓦器椀（234～236）234・235は，椀の口縁部であり，235は器壁が厚く外面には指頭圧痕が顕著に見られる。236は高台がかなり退化した椀底部である。

ⓔ青磁椀（237～240，242）237・239・240は外面に鎬連弁を有す。239・240はわずかに間弁が認められる。胎土はすべて灰色堅緻，釉は237が青白色，他は黄緑色。238は内面にヘラによる花文が描かれ，口縁は尖り気味。胎土，釉調は239・240と同じ。242は内外面無文で口縁部の外反するタイプである。胎土も粗く釉も濁っている。

ⓕ白磁皿（241）口縁部が大きく外反するタイプである。胎土は灰白色で粗く釉は透明度が強い。

ⓖ土錘（243）長さ5㎝，最大径2㎝，孔径8㎜，重さ10ｇを測る。

ⓗこね鉢（245～248）245は直線的に外方に立ち上がり口縁部は全く肥厚せず口唇部は外傾の面をなす。246は口縁部断面が三角形をなし，口唇部は垂直な面をなす。247・248も同様の口縁を呈するが，248は口縁部下端がより外方に肥厚し玉縁状に近い。246は瓦質であり他はいわゆる東播系のこね鉢である。

ⓘ土師器鍋（249）胴部下半から内湾して立ち上がり口縁部は直線的に内傾して立ち上がる。口唇部は面をなす。口縁下の鍔は断面台形でしっかりしている。内面は横位のハケ調整，外面はナデを施し全面が煤けている。

ⓘ瓦質鍋（250～252）250・251は口縁部が強く内傾，口唇部は面をなし断面三角形のしっかりした鍔が付く。252は前二者に比べて口唇部が丸味をもち鍔も少し退化している。

**表－4　第Ⅲ区土坑一覧表**

| 土坑No. | 長軸(cm) | 短軸(cm) | 深さ(cm) | 平面形 | 出土遺物(点) | 出土土器実測No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK 1 | 98 | 88 | 12 | 楕円形 | 土師器 2 | | |
| 2 | 94 | 82 | 13 | 〃 | 〃 2 | | |
| 3 | 87 | 84 | 9 | 不整形 | 〃 4 | | |
| 4 | 96 | 80 | 8 | 〃 | 〃 5 | | |
| 5 | 68 | 58 | 5 | 楕円形 | 〃 5 | | |
| 6 | 120 | 98 | 14 | 〃 | 土師器 1 弥生 1 | | |
| 7 | 100 | 97 | 13 | 〃 | 〃 2 縄文27 | | |
| 8 | 100 | 96 | 18 | 隅丸方形 | 〃 8 瓦器12 | 201，202 | |
| 9 | 90 | 70 | 9 | 楕円形 | 〃 8 〃 2 | | |
| 10 | 72 | 40 | 44 | 不整形 | 〃 2 | | |
| 11 | 72 | 40 | 43 | 楕円形 | 〃 3 | | |
| 12 | 122 | 112 | 10 | 〃 | 〃 19瓦器 3 | | スラグ 2 点 |
| 13 | 100 | 84 | 9 | 隅丸方形 | 〃 15 | | |
| 14 | 122 | 100 | 19 | 楕円形 | 〃 27青磁 1 瓦器 1 | | |
| 15 | 90 | 82 | 13 | 〃 | 〃 10 | 191 | |
| 16 | 121 | 120 | 26 | 〃 | 〃 132瓦器 5 青磁 1 | 198 | SK26を切っている |
| 17 | (120) | 84 | 10 | 〃 | 〃 25 | | SK16に切られSK28を切っている |
| 18 | 100 | 84 | 15 | 〃 | 〃 1 | | |
| 19 | 70 | 64 | 6.5 | 〃 | 〃 15瓦器 1 | 189，192，193 | SK47を切る |
| 20 | 162 | 138 | 22～35 | 〃 | 〃 20 | | |
| 21 | 94 | 90 | 28 | 隅丸方形 | 〃 6 | | SK22SK47を切る |
| 22 | 120 | 104 | 22 | 楕円形 | 〃 37 | | SK21に切られる |
| 23 | 90 | 86 | 20 | 〃 | 〃 33 | | |
| 24 | ( 80) | 64 | 5 | 〃 | 〃 4 | | SK33に切られる |
| 25 | 120 | 116 | 19 | 〃 | 〃 45瓦器 2 | | |
| 26 | (160) | 110 | 27 | 〃 | 〃 97瓦器 1 他 | 184,185,190,196,200 | SK16に切られSK36を切る |
| 27 | 不明 | 不明 | 14 | 不明 | 〃 24 | | SK47に切られSK28,29,41を切る |
| 28 | 〃 | 〃 | 20 | 〃 | 〃 38 | | SK17SK27に切られP32を切る |
| 29 | 〃 | 64 | 13 | 不整形 | 〃 3 | | SK27，41に切られる |
| 30 | 96 | 92 | 15 | 隅丸方形 | 〃 11 | | |
| 31 | (100) | 80 | 24 | 楕円形 | 〃 5 | | |
| 32 | 100 | 74 | 21 | 〃 | 〃 28 | | 床面に10～20cmの河原石ありSK33を切る |
| 33 | (150) | 108 | 30 | 不整形 | 〃 55瓦器 2 | 186，197 | SK32に切られている |
| 34 | 72 | 76 | 10 | 楕円形 | 〃 1 | 188 | |
| 35 | 96 | 90 | 15 | 〃 | 〃 5 | | |
| 36 | 200 | (110) | 10 | 不整形 | 青磁 1 須恵器 1 | | SK26に切られる |
| 37 | 70 | 66 | 8 | 楕円形 | 土師器 7 | | |
| 38 | 86 | 80 | 22 | 〃 | 〃 8 | | |
| 39 | 118 | 90 | 13 | 〃 | 〃 1 | | |
| 40 | 102 | 100 | 11 | 〃 | 〃 1 | | |
| 41 | 不明 | 82 | 17 | 〃 | | | SK27に切られSK29を切る |
| 42 | 120 | 78 | 19 | 〃 | 土師器 2 | | |
| 43 | (110) | 106 | 22 | 不整形 | 〃 19 | | SK20に切られSK47を切る |
| 44 | 70 | 不明 | 22 | | | | |
| 45 | 106 | 62 | 6 | 楕円形 | 土師器19 | | |
| 46 | 276 | 170 | 10 | 不整形 | 〃 2 青磁 2 他 | 187，194，195，199 | P26，29，34に切られる |
| 47 | 不明 | 110 | 24 | 不明 | | | SK19,21,43に切られSK27を切る |
| 48 | 94 | 92 | 13 | 楕円形 | | | |
| 49 | 68 | 56 | 9 | 不整形 | | | |
| 50 | 80 | 70 | 6 | 楕円形 | | | |
| 51 | 78 | 60 | 6 | 〃 | | | |
| 52 | 66 | 54 | 3 | 〃 | | | |
| 53 | 86 | 48 | 6 | 〃 | | | |

4　第Ⅳ調査区

第Ⅳ調査区は第Ⅲ調査区の西にあり，７基の土坑と50個のピットを検出した。ここでは比較的まとまった一括遺物が出土したＳＫ５及びピット出土の遺物を中心に述べることにする。ＳＫ５以外の土坑については一覧表にまとめた。

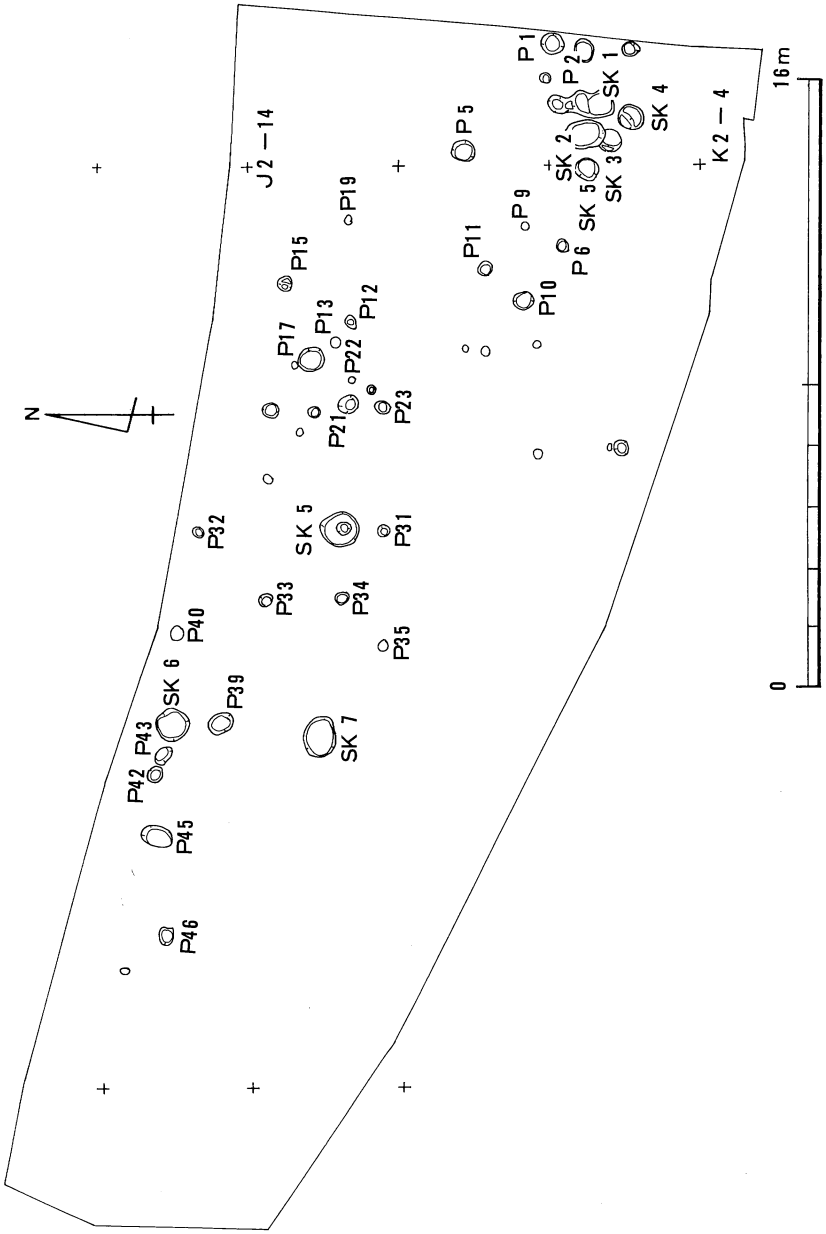



Fig 45　第Ⅳ調査区遺構全体図

(1) ＳＫ５ (Fig 46・47)

調査区のほぼ中央部にあり，１×0.95m，深さ20cm前後を測る楕円形の土坑である。床面中突部には径35cm，深さ20cmを測るピット状の掘り込みがある。埋土は淡茶色粘質土で炭化物が多く含まれている。埋土中より土師器253～261が出土している。253・254はロクロ成形の小皿で底部ヘラ切りである。255～261はロクロ成形による坏である。255～256は底部から内湾気味に立ち上がり口縁部は外反する。261は大振りである。257～260は底部で糸切りが見られ，257の断面には底部の円盤に粘土を付きたして成形している痕跡が認められる。

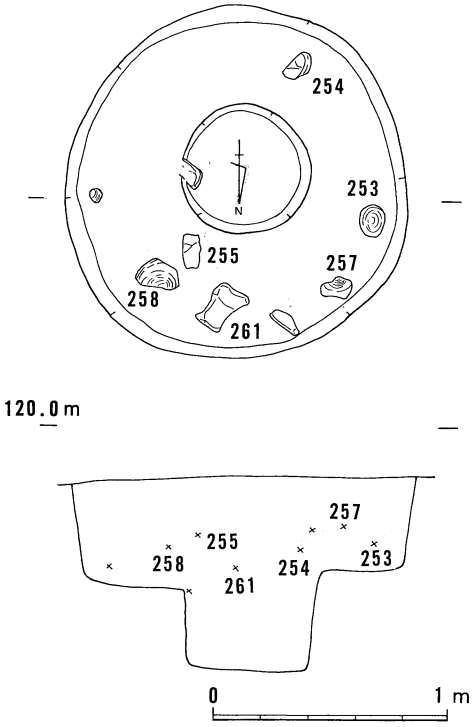



Fig 46 第Ⅳ区ＳＫ５

(2) ピット出土の遺物 (Fig 49－262・264・267・268・270)

Ｐ12 (267)：ロクロ成形の坏である。底部から直線的に立ち上がり口縁部はわずかに外反する。内外面横ナデ調整，外底に糸切り痕が見られる。口縁部外面と体部内面に煤が付着。

Ｐ14 (268)：ロクロ成形の坏で，口縁部がわずかに外反し，外面にはロクロ目が顕著。

Ｐ24 (264)：ロクロ成形の坏底部で，外底にロクロ目が見られる。

Ｐ25 (262)：ロクロ成形の小皿で，口縁部が外反，底部糸切りである。

Ｐ40 (270)：ロクロ成形の坏で，底部から内湾して立ち上がった後，口縁部に向かって直線的に

表－５ 第Ⅳ区土坑一覧表

| 土坑No. | 長軸 (cm) | 短軸 (cm) | 深さ (cm) | 平面形 | 出土遺物 (点) | 出土土器実測図 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 74 | 68 | 40 | 隅丸方形 | | | |
| 2 | 102 | 72 | 30 | 〃 | 土師器３ | | |
| 3 | 64 | 56 | 30 | 楕円形 | 土師器９ | | |
| 4 | 66 | 64 | 20～32 | 隅丸方形 | 〃 16，弥生１ | | ２段に掘られている |
| 5 | 100 | 95 | 20 | 楕円形 | 〃 80 | 253～261 | 炭化物が多い |
| 6 | 86 | 84 | 36 | 〃 | 〃 25 | | |
| 7 | 106 | 80 | 20 | 〃 | 〃 15 | | |

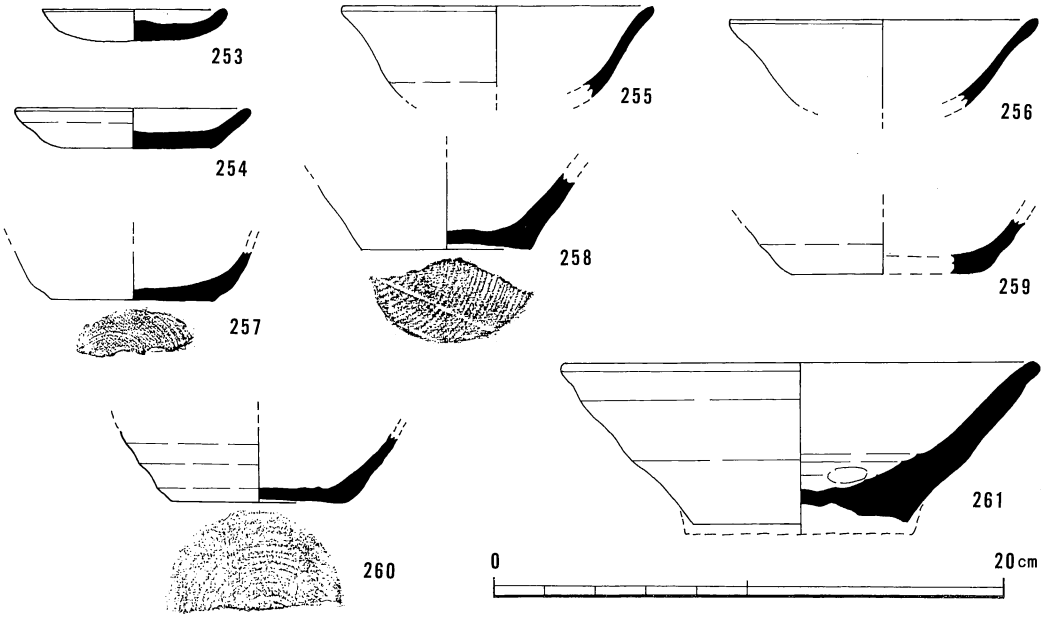



Fig 47　第Ⅳ区ＳＫ５

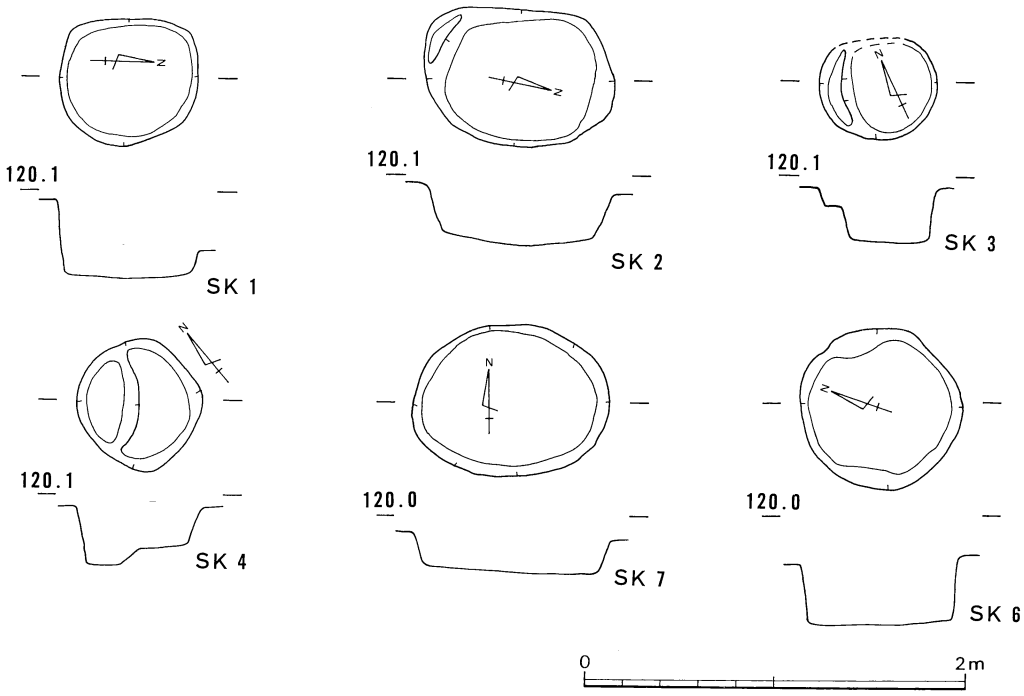



Fig 48　第Ⅳ区ＳＫ１～４・６・７平面及び断面図

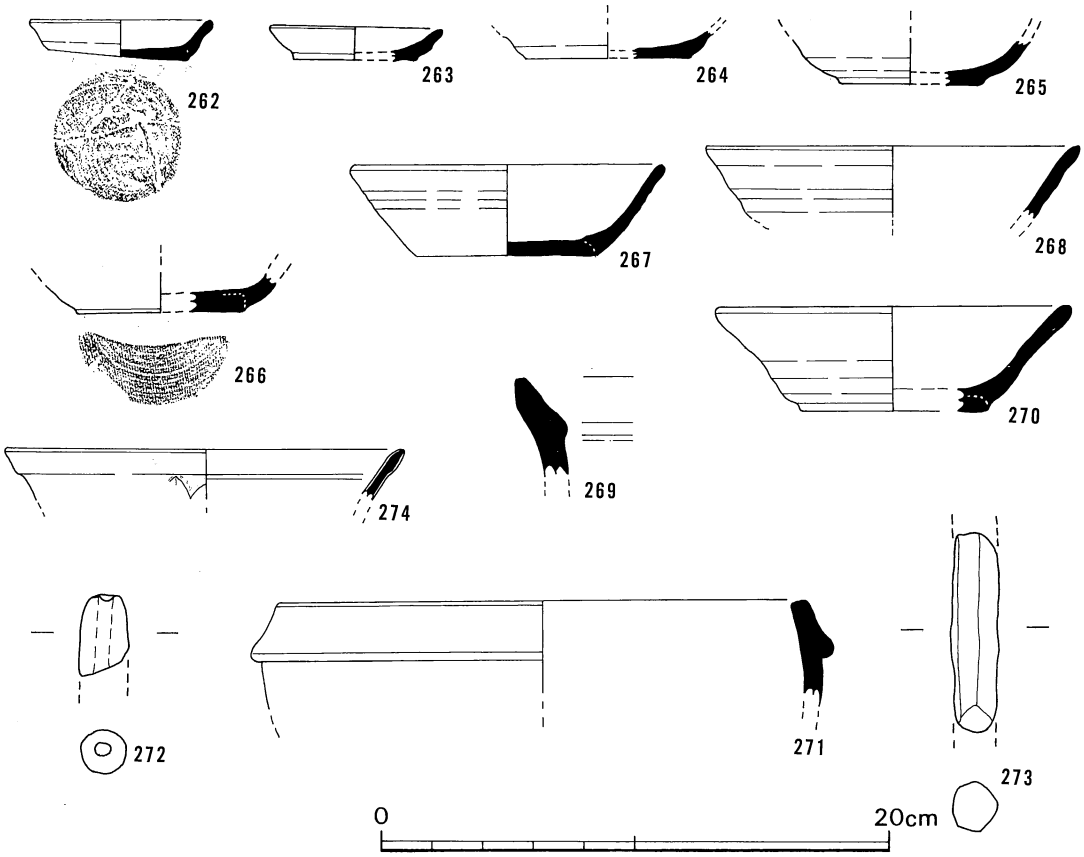



Fig 49　第Ⅳ区ピット及び包含層出土土器P12（267），P14（268），P25（262），P40（270）
包含層出土の土器（263，265，266，269，272～274）

伸びる。底部断面に成形時の円盤を認めることができる。

(3)　包含層出土の遺物（Fig 49－263・265・266・269・272～274）

263は土師器小皿，265・266はロクロ成形による坏底部である。269は瓦質の鍋，271は土師器の鍋である。共に口縁部は内傾し下垂気味の鍔が付く。273は瓦質三足鍋の脚部，235は土錘である。274は龍泉窯系の鎬連弁を有する青磁椀である。

5　第Ⅴ調査区

第Ⅴ調査区は第Ⅱ調査区の西側にあり，現地表面が第Ⅱ調査区よりも約50cm程低い。縄文・中世の土坑・ピットなどを検出したが，他の調査区に比べて諸遺構の分布密度は濃くない。

(1)　基本層序（Fig 51）

第Ⅴ調査区の旧地形は東から西に向かってわずかに下降している。セクションベルトの東部と西

端部の層序は比較的整然と堆積しているが，中央部分は複雑な状況を呈している。

Ⅷ層：1～10cm大の礫によって構成される。無遺物層である。

Ⅶ層：茶色粘質土に砂礫が混入している。全体に広がるのではなくⅧ層が凹条になっているところに堆積している。

Ⅵ層：濃茶色粘質土でところどころに音地層が入っている。この層準は中央部の一部にしか見られず，Ⅶ層あるいはⅧ層の上に堆積している。また一部シルトが混入する部分をⅥ'層とした。共に無遺物層である。

Ⅴ層：西半分に堆積している。黒色の火山灰土を基調とする層準で西部に厚く堆積している。音地層が混入している部分をⅤ'層とした。無遺物層である。

Ⅳ層：茶色粘質土で西に向かって厚さを増している。中世の遺物包含層である。

Ⅲ層：灰色粘質土で東部に堆積が見られる。旧耕作土である。

Ⅱ層：現耕作土の下に堆積する床土である。

Ⅰ層：現耕作土で地表面を形成する。

(2) 縄文時代の遺構と遺物

ピット1 (Fig 52・55)

76×70cmの楕円形に近いプランを呈し深さは82cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり埋土は黒褐色粘質土単純一層で検出面に40×20cm大の砂岩が置かれている。遺物は検出面直下及び中層より縄文土器深鉢（275～278）及び浅鉢（279～280）が出土している。275は上胴部でく字状に屈曲し口縁部に向かって直線的に立ち上がる。内外面共に

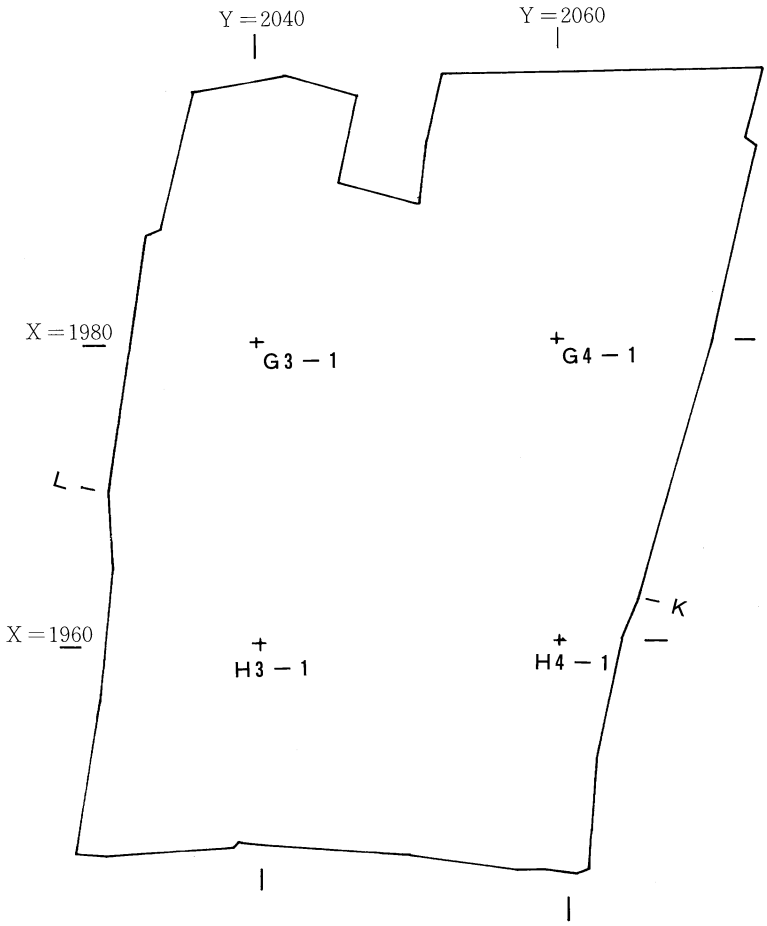



Fig 50 第Ⅴ区発掘区及び基本層序位置図（$\frac{1}{500}$）

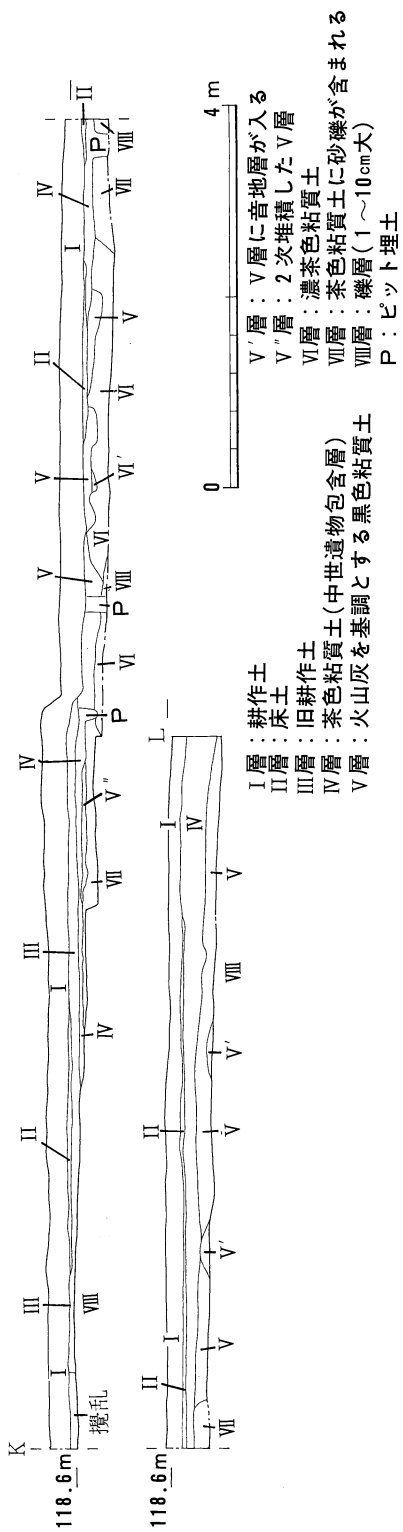



Fig 51　第Ⅴ調査区基本層序

横位の二枚貝条痕調整を施す。276は僅に外反する口縁部を有し，口唇部は面取る。内外面横の2枚貝条痕調整，外面は煤ける。断面に2個所粘土帯接合部を認めることができる。粘土帯の幅は約2㎝である。277・278は上胴部で僅に外方向に屈曲し口縁部に向かって内湾気味に立ち上がり口唇部は丸くおさめるが，277は2枚貝腹縁と考えられる原体で刻目がつけられる。内外面横位の2枚貝条痕が見られる。279は上胴部が強く張り，口縁部はく字状に屈曲し内面が肥厚している。外面は研磨，内面は頸部以下左←右の削りが認められる。280は胴部中位で段をなすタイプと考えられる。口縁部は大きく外反し端部は内面に肥厚し段をなす。内外面共に丁寧に磨いている。

ＳＫ１（Fig 55・53－281・282）

調査区の北部にあり一部をＳＤ１に切られている。284×110㎝，深さ44㎝の不整形土坑で断面は逆台形状を呈するが，北壁は2段に掘り込まれている。埋土は黒褐色粘質土単純一層で埋土中より深鉢・浅鉢片21点が出土しているが図示し得たのは281・282のみである。281は直線的に外方に立ち上がり口縁部は内面で肥厚，口唇部は凹状を呈す。282も同様の形態を有するが，口縁内面の肥厚部が断面カマボコ状を呈し口唇部は尖り気味である。両者共に内外面丁寧に磨かれている。

ＳＫ３（Fig 55）

ＳＫ１の南にある。190×136㎝の不整形プランをなし深さ74㎝を測る。壁面は東側が急角度に立ち上がり西は比較的ゆるやかである。埋土はⅠ層：黒褐色粘質土，Ⅱ層：濃茶色粘質土でⅠ層より縄文土器細片が2点出土している。また検出面及び中層より人頭大の河原石が出土している。

ＳＫ８（Fig 55）

調査区の北部にあり72×60㎝，深さ15㎝の楕円形プランを有する土坑である。埋土はⅠ層：濃茶色粘質～シルト層で炭化物を多く含む。Ⅱ層：茶色粘質土層である。Ⅰ層中より縄文土器片数点が出土しているが，図示し得

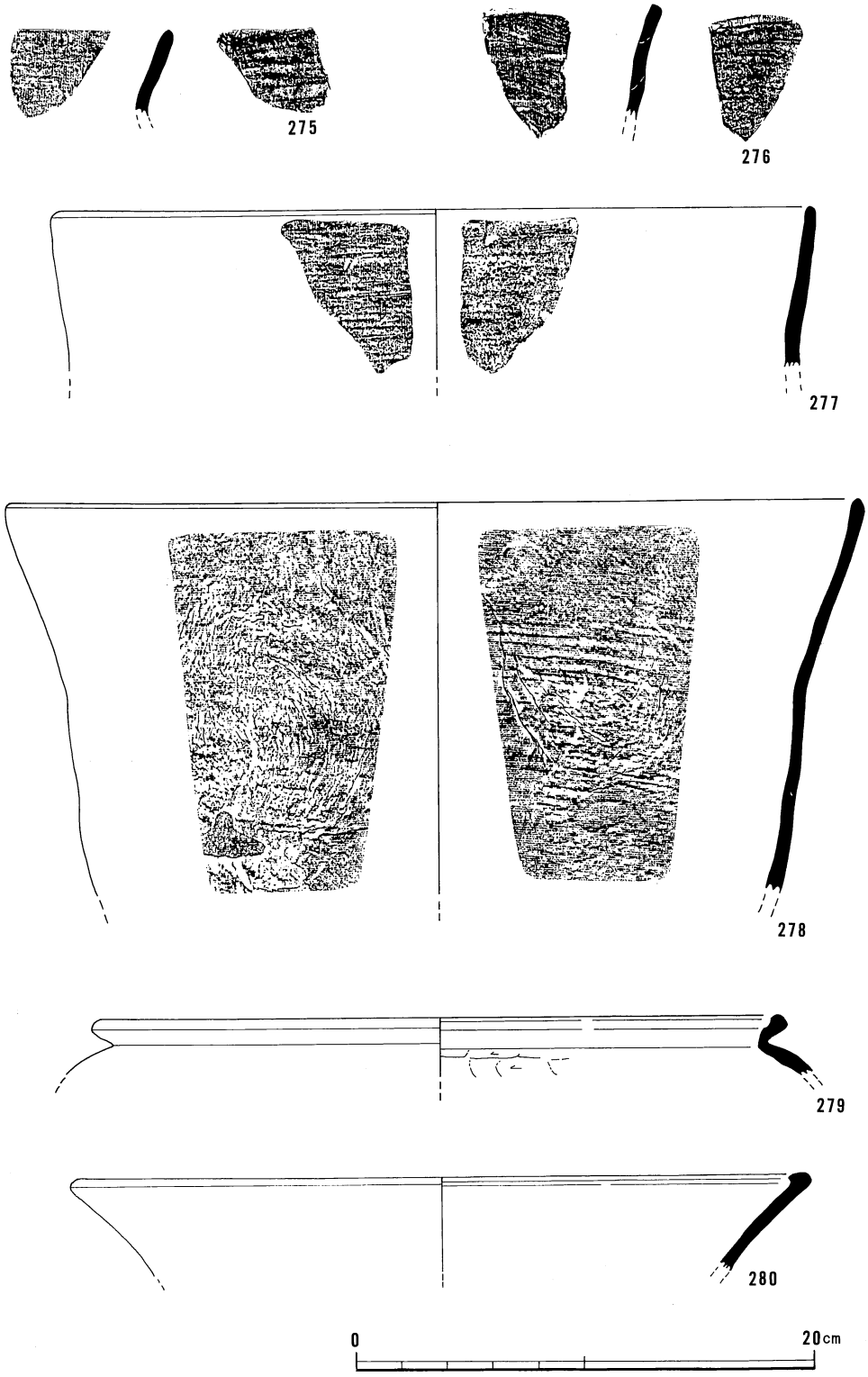



Fig 52　第Ⅴ区Ｐ１出土の縄文土器

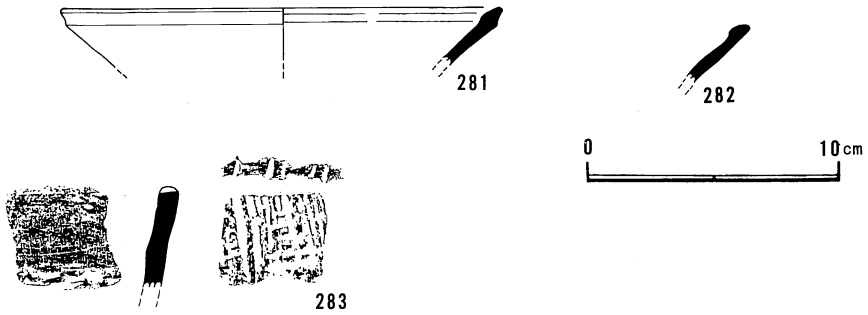



Fig 53　第Ⅴ区ＳＫ１（281，282），ＳＫ８（283）出土の縄文土器

たのは283のみである。深鉢で外面タテ方向の２枚貝条痕内面には左←右の削りが認められる。口唇部は丸くおさめ半戴竹管状の工具で刻目を施す。

ＳＫ22（Fig 57）

調査区の東端にあり166×104cm，深さ52cmを測る楕円形の土坑で東北隅が突出して掘り込まれている。埋土はⅠ層：赤茶褐色粘質土　Ⅱ層：暗茶色粘質土　Ⅲ層：黒褐色粘質土であり埋土は認められない。

(3)　中世の遺構

ＳＫ20（Fig 57）

調査区の西寄りにある。90×80cm，深さ６cmを測る楕円形の土坑で，埋土は黒色粘質土単純一層で炭化物が多く混入している。床面には大小の礫が多く詰まっている。縄文の遺構埋土と似ているが粘性が強いことから中世の遺構と考えた。

ＳＤ１

調査区の北辺で検出した。幅50cm前後，深さ10cm未満を測る溝で，中央部分と東部でプランを検出することができなかったが，東から西に流れる溝である。埋土は黒色粘質土単純一層で遺物は全く認められなかった。

(4)　ＳＸ（Fig 58・59）

ＳＸ１からＳＸ９まであり平面形は楕円形状（ＳＸ１・２・８）をなすものと不整形（ＳＸ３～６・９）のものとがある。各々の規模は表－６に示したとおりである。これらの土坑は調査区中央部に位置し西に向かって開口する楕円形にレイアウトされている。第１に挙げられる特徴は各々埋土の堆積が極めて複雑なことである。各土坑共に縄文時代の埋土である火山灰を基調とする黒色粘質土を含んでいるが，何に原因してこのような複雑な堆積を示しているのか不明である。しかし各土坑が楕円形に並んでいることは一定の計画のもとに掘られたことを示している。遺物はほとんど認められず，わずかにＳＸ１のⅢ層から縄文土器細片20点，ＳＸ９のⅠ層から縄文土器細片２点と土師器１点が出土している。この土師器は後からの混入の可能性も十分に考えられる。これらの時期あるいは性格について明らかにすることはできない。将来類似例の増加をまって検討しなければならない。

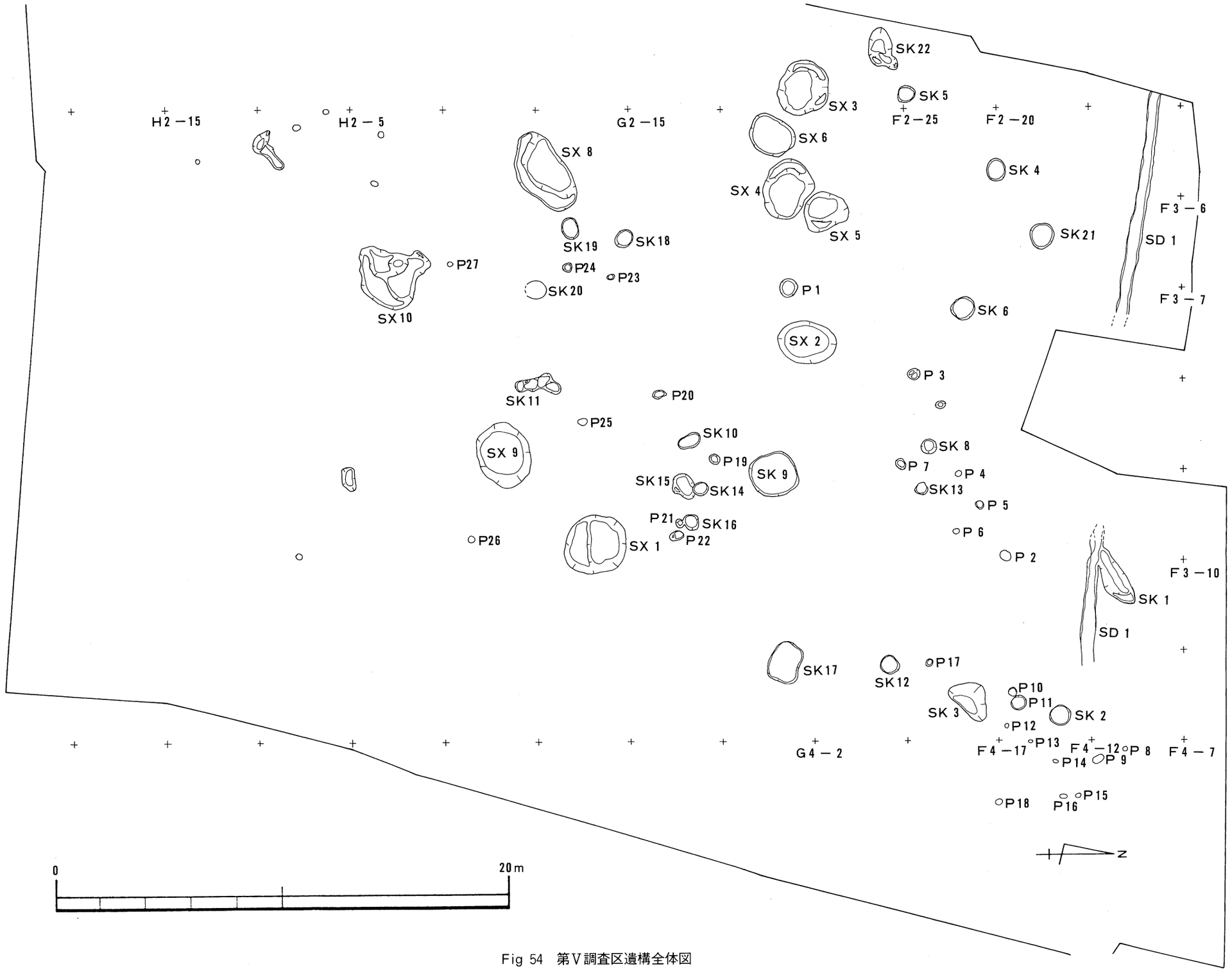



Fig 54　第Ⅴ調査区遺構全体図

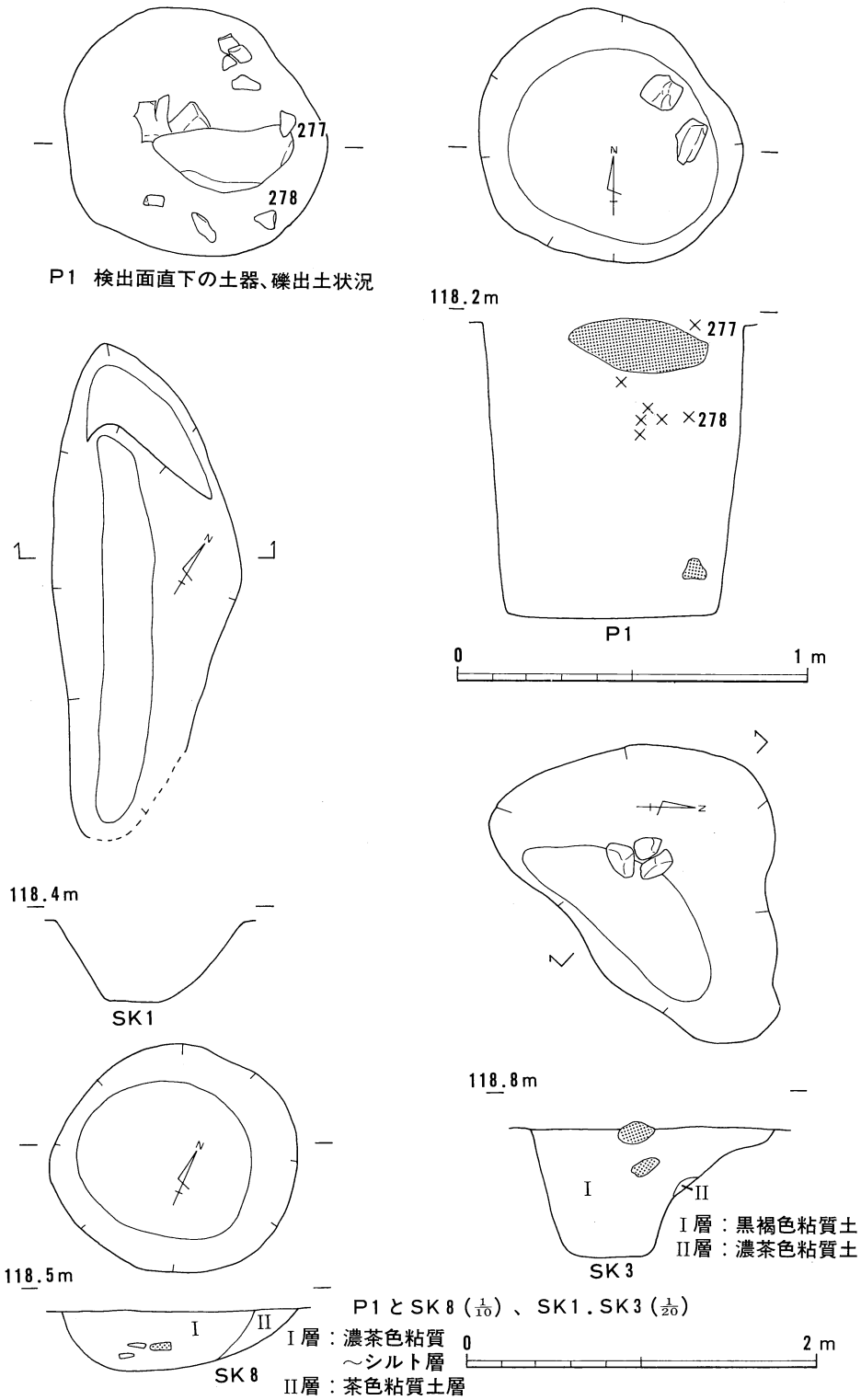



Fig 55　第Ⅴ区縄文時代のピットと土坑

(5) 包含層出土の土器（Fig 56－284～288）

284は，内外面共に二枚貝腹縁による条痕が施される。焼成も堅緻である。縄文前期に属する。

285は口縁部外面に無刻の突帯文を有する。外面はヘラ磨き内面はナデ調整を施している。286・287は粗製深鉢の口縁部である。286は口唇部に棒状工具で太い刻目を施し内外面ナデ調整，287は外面横位の２枚貝条痕，内面はナデ調整，口唇部には細かい刻目を施す。また内面には粘土紐のつなぎ目が明瞭に認められる。この２枚貝条痕は他のものより条線の目がせまい。288は土師器の甕である。口縁部は丸味を帯びて外反，丸底で全面ナデ調整である。

表－６　第Ⅴ区土坑一覧表

| 土坑No. | 長軸(cm) | 短軸(cm) | 深さ(cm) | 平面形 | 出土遺物（点） | 出土土器実測図 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 284 | 110 | 44 | 不整形 | 縄文土器多数 | | |
| 2 | 95 | 92 | 7 | 円形 | | | |
| 3 | 200 | 136 | 66 | 不整形 | 縄文土器細片 2 | | |
| 4 | 96 | 80 | 6 | 楕円形 | | | |
| 5 | 76 | 72 | 4 | 〃 | | | 炭化物を多く含む |
| 6 | 104 | 100 | 6 | 〃 | | | |
| 7 | 100 | 50 | 25 | 不整形 | | | |
| 8 | 72 | 66 | 15 | 楕円形 | | | |
| 9 | 202 | 186 | 15 | 隅丸方形 | 土師器細片 4 | | |
| 10 | 104 | 56 | 4 | 楕円形 | | | |
| 11 | 160 | 56 | 37 | 不整形 | | | |
| 12 | 80 | 70 | 8 | 隅丸方形 | | | |
| 13 | 56 | 54 | 8 | 〃 | 縄文土器細片 2 | | |
| 14 | 68 | 61 | 8 | 楕円形 | | | |
| 15 | 120 | 74 | 8 | 〃 | | | |
| 16 | 66 | 62 | 8 | 隅丸方形 | | | |
| 17 | 168 | 132 | 8 | 〃 | | | |
| 18 | 80 | 70 | 15 | 楕円形 | | | 炭化物 |
| 19 | 96 | 70 | 15 | 〃 | | | 床面に10cm大の礫あり |
| 20 | 90 | 80 | 6 | 〃 | | | 床面に大小の礫大量 |
| 21 | 112 | 100 | 10 | 不整形 | 土師器細片 1 | | |
| 22 | 164 | 104 | 47 | 〃 | | | |

表－７　第Ⅴ区ＳＸ一覧表

| ＳＸNo. | 長軸(cm) | 短軸(cm) | 深さ(cm) | 出土土器 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| ＳＸ１ | 176 | 154 | 25～40 | 縄文細片20点 | |
| 2 | 252 | 192 | 61 | | 床面に径30cm，深さ10cmのピットあり |
| 3 | 240 | 210 | 60 | | |
| 4 | 234 | 220 | 80 | | |
| 5 | 190 | 170 | 57 | | |
| 6 | 200 | 166 | 36 | | |
| 7 | 370 | 210 | 61 | | |
| 8 | 286 | 226 | 31 | | |
| 9 | 300 | 246 | 20～90 | 土師器細片 1 縄文細片 2 | |

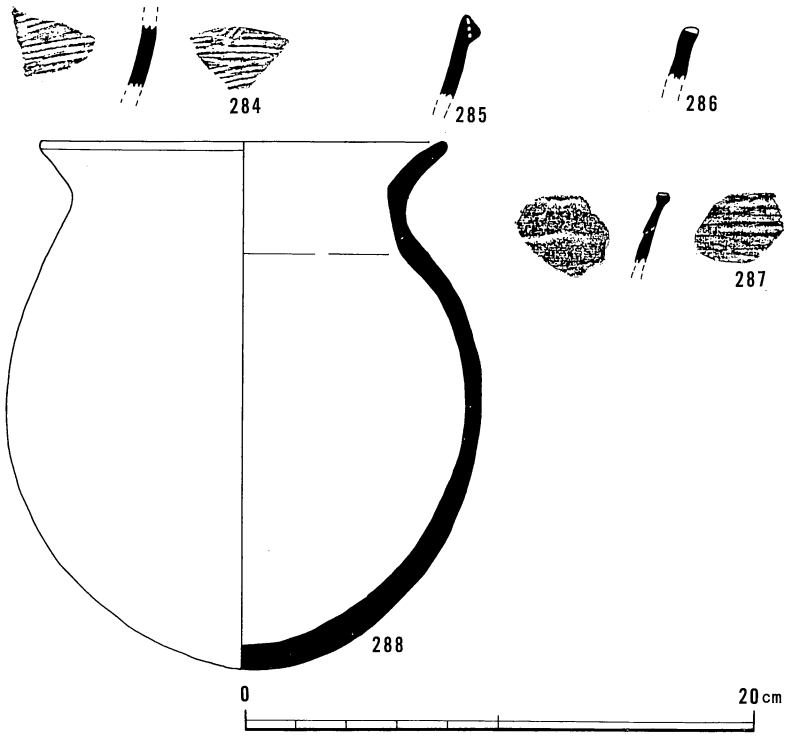



Fig 56　第Ⅴ区包含層出土の土器

縄文土器（前期―284，晩期285～287）
土 師 器

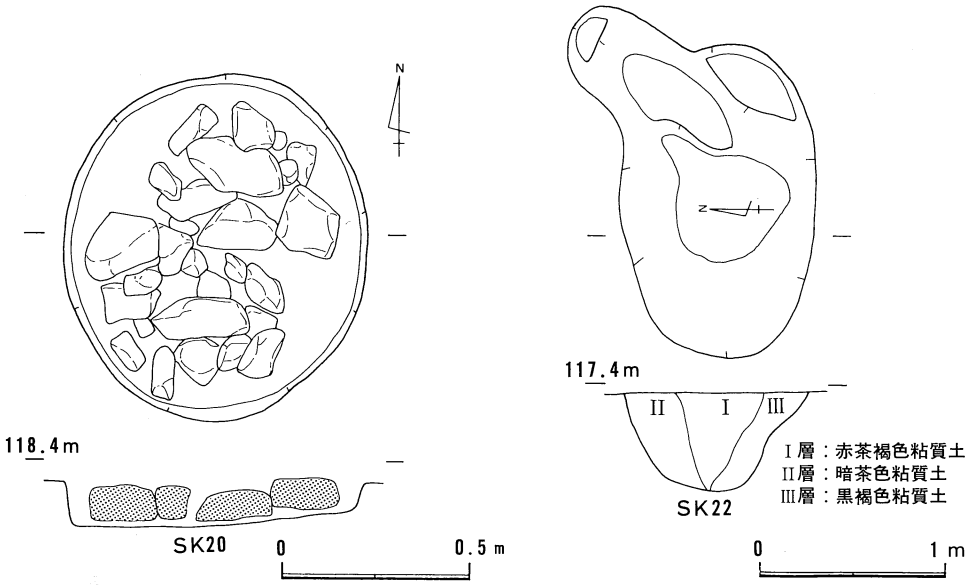
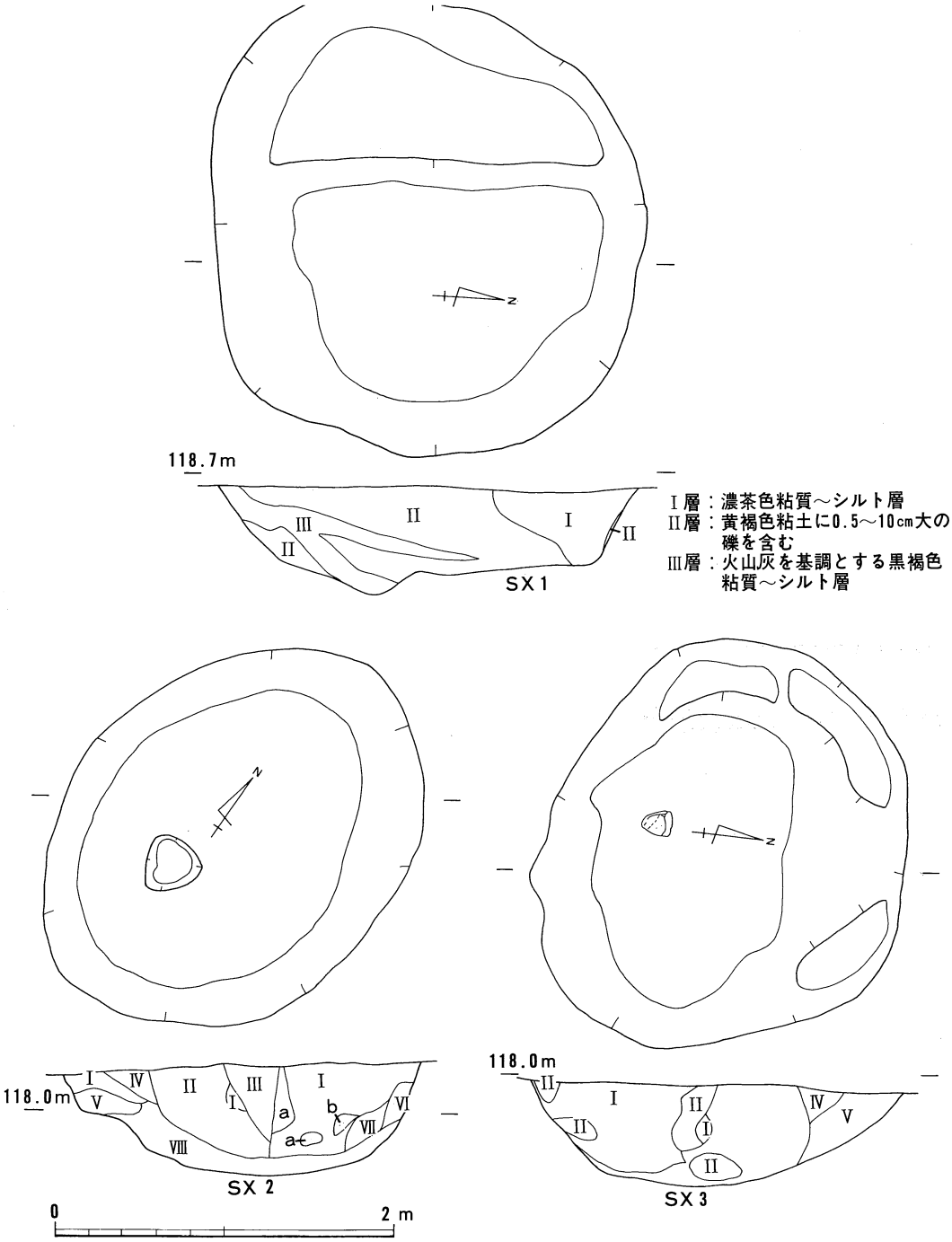



Fig 57　第Ⅴ区縄文時代（ＳＫ22）及び中世の土坑（ＳＫ20）




I層：火山灰を基調とする黒色粘質～シルト層
II層：茶色粘質土で1～3cmの礫を含む
III層：黄茶色粘質土で　〃
IV層：暗茶色砂礫層
V層：赤茶色　〃
VI層：灰黄色砂礫層
VII層：暗茶色粘質土
VIII層：暗黄茶色粘質土
a：茶色粘土
b：黒色　〃

I層：火山灰を基調とする黒褐色粘質土
II層：茶色粘質土(1～3cmの礫を含む)
III層：黄茶色粘質土(2～3cmの　〃)
IV層：暗茶色砂礫層
V層：I層とII層が混ったもの

Fig 58　第V区SX1，2，3

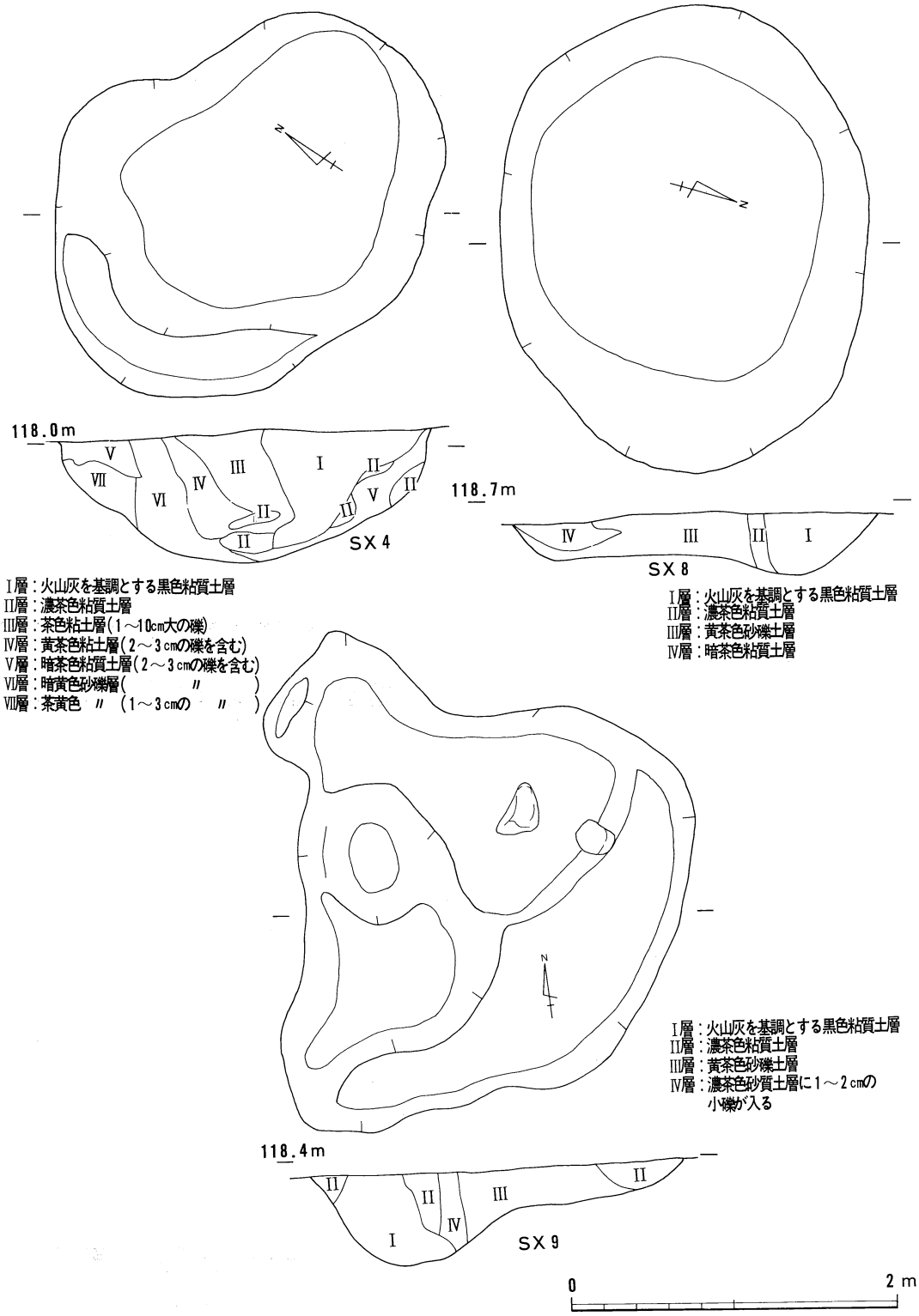



Fig 59　第V区ＳＸ４，８，９

# 第Ⅴ章　考　　察

以上美良布遺跡の調査結果について各調査区毎に述べた。美良布遺跡はすでに小規模な調査が数回にわたって実施されており縄文時代晩期から弥生時代前・中・後期にわたって営まれた遺跡であることが判明している。国道195号線以南を対象として実施した今次調査においては，弥生時代の遺構を検出することができなかったことから，弥生時代の遺構は国道の北側の地区に中心があるものと考えなければならない。今次調査は6,200㎡という広範な調査にしては質量共に良好な状況で一括遺物等を得ることは少なかった。しかし県下では極めて僅少な縄文時代晩期前半に属する資料を遺構から検出できた唯一の例である。また縄文前期土器が認められたことは物部川水系の縄文時代研究に資するところは大きい。更に完形品には乏しいが古代末から中世の土師器の変遷を知ることが可能である。ここでは縄文時代と古代末・中世の遺物・遺構を中心に若干の考察を行い，美良布遺跡の性格や特徴，変遷などについて触れたい。

## 1．縄文時代の土器と遺構

(1)　前期の土器（Fig 56－284）

第Ⅴ調査区の包含層から出土したもので，細片であるが前期初頭の不動ヶ岩屋Ⅲ式(2)に属するものと考えられる。この他に第Ⅱ調査区のⅣ層（地山）に接して厚手無文土器細片が出土している。この土器は早期の蔦島式に属する可能性もある。

(2)　晩期の土器

①　深鉢

粗製と精製の両者が見られ型態的な特徴からⅠ～Ⅳ類に分けることができる。

Ⅰ類（5・275・276）：粗製の深鉢で波状口縁を有する。口唇部に刻目を施す（5）と施さないもの（275・276）があり，器面には共に貝殻条痕が残る。

Ⅱ類（8）：粗製土器であるが口縁部にリボン状，あるいはヒレ状の突起を有する。器面は内外面共に貝殻条痕を残す。

Ⅲ類（1～4・6・59・60・277・278・283・285・286）：粗製深鉢で最も出土量の多いものである。総じて上胴部からわずかに外方に屈曲して立ち上がるが，内湾気味（2）や直線的（6）に立ち上がるものもある。器面は内外共に横位の2枚貝条痕が主流であるが，内外面ナデ調整を行い外面に細いヘラ原体で文様を描くもの（3）も存在する。口唇部に刻目を有するものと有さないものの比率は6：6で相接している。前者の原体はすでに触れたように貝殻腹縁によると考えられるもの（1・277）棒状原体によるもの（2・278・285）半截竹管によるもの（283）がある。

Ⅳ類（284）：口縁外面に無刻の突帯を貼付するもので，他の類に比べて器面調整が極めて丁寧である。

② 浅鉢

すべて精製磨研土器で型態的な特徴からⅠ～Ⅶ類に分けることができる。

Ⅰ類（7・10）：上胴部でく字状に屈曲し，そこから口縁部が外反する。10は内面に細い沈線を巡らしている。

Ⅱ類（9・62・280・282）：口縁部が大きく外反し内面に肥厚帯を貼付し，内側に強い段が生じる。胴部以下の形態は不明であるが，下胴部が内湾気味に立ち上がり中位あたりで屈曲するものであろう。

Ⅲ類（63）：Ⅱ類と類似しているが，口縁部が肥厚せず内面に沈線を施す。

Ⅳ類（11）：胴部中位でクランク状に屈曲し，口縁部に向かって直線的に外方に立ち上がる。

Ⅴ類（61）：口縁部にリボン状の突起を有し，外面に沈線が巡る。

Ⅵ類（64）：上胴部で内側に屈曲し口縁は短く外反する。

Ⅶ類（297）：上胴部が強く張り，口縁部がく字状に強く屈曲し内面が肥厚，胴部内面にはヘラ削りが施される。

以上，僅少な資料ながら深鉢をⅠ～Ⅳ類，浅鉢をⅠ～Ⅶ類に分類した。これらの資料は突帯文土器（Ⅳ類－248）を除くとすべて遺構出土の資料である。従って遺構出土の土器は，突帯文土器出現以前の縄文時代晩期前半に編年的位置付けを求めることができる。ただすでに述べたようにこれらの土器は，すべて遺構床面より出土したものではなく貯蔵穴などの土坑が廃棄され，それらが埋没する過程に廃てられた出土状況を示している。一括性に乏しいきらいは否めないが以下述べるように土器型式としてはおおむね1型式中におさまると考えられる。出土土器は僅少であるがその特徴について見ると，深鉢は1例を除いてすべてが刻目を施す以外粗製無文である。浅鉢は7つものバリエーションをもっており，その中ではⅡ類とした口縁が内面に肥厚するものが多いことを特徴として挙げることができる。

本県における晩期前半の資料は極めて少なく，比較検討できる資料は長岡郡土佐町にある八反坪遺跡(2)と1969年に調査した当遺跡の資料のみである(3)。しかも両者共に包含層出土の資料であり，かつ粗製深鉢を中心とするものであった。遺構出土の資料としては今次調査によるものが初めてである。岡本健児氏は，八反坪遺跡出土の土器について瀬戸内海地方の晩期前半の土器型式である黒土ＢⅠ式に併行関係を求め八反坪式土器として型式設定し，1969年調査の当遺跡出土土器も八反坪式土器として編年的位置付けを行っている。今次出土土器についても粗製深鉢については，八反坪式土器に該当させて不都合は生じないが，これまで知られなかった精製浅鉢を加えると，その後の土器編年の研究の進展もあってそのまま黒土ＢⅠ＝八反坪式の中にあてはめることはできない。すなわち精製浅鉢によってより詳細な編年的位置付けを試みることが可能となったのである。中国・四国地方の当該期の土器編年は，良好な資料に恵まれないながらも鎌木義昌・高橋護氏(4)や春成秀爾氏(5)らによって進められ，最近では平井勝氏によって突帯文土器出現直前の土器型式を明らかにする試みがなされている(6)。これらの成果に依拠しながら今次調査出土土器の編年的位置付

けを行うと，精製深鉢に波状口縁を有するⅠ類が存在することや浅鉢に口縁部が内側に肥厚するタイプが特徴的に認められる点などから谷尻遺跡130土壙(7)出土の一群に最も近く，平井氏によって突帯文出現直前の型式として位置付けられた谷尻式土器に併行関係を求めることが可能であろう。谷尻式に先行するとされる舟津原式土器(8)の浅鉢は，明らかにより古い型態を示しており，後出とされる原下層式や前池式には頸部文様や突帯文がもっと判っていなければならない。したがって現段階においては谷尻式に比定することが最も妥当である。しかし当遺跡の深鉢には谷尻式特有の爪形の連続圧痕文が見られないことやⅠ区のP64出土の7・10（Ⅰ類）はやや新しく位置付けられるものであり今後資料の増加をまって再検討を加えなければならない。この他無刻突帯が1点(284) 出土している。本県の無刻突帯は西部の中村市中村貝塚出土の中村Ⅰ式土器(2)の特徴である。284は無刻という点においては中村Ⅰ式と共通するが，突帯の貼付手法や器面調整などで大きな違いがある。系譜を異にしていると考えられる。

(3) 晩期の遺構

晩期前半に属する遺構は，Ⅰ区のP64とP90，Ⅱ区のP10・SK3，SK7，SK10，Ⅴ区のP1，SK1，SK3，SK8，SK22を挙げることができる。これらの諸遺構は出土遺物が僅少であるため各々の性格や時期を決定することは難しいが，平面及び断面の形態から4つに分けることができる。A類は，円筒状のピットでⅠ区－P64・P90，Ⅱ区－P10，Ⅴ区－P1を挙げることができる。これらのピットはその形状から推定して南方前池遺跡(9)で知られているようなドングリなどナッツ類を収納するための貯蔵用ピットと考えられる。県内では晩期後半に属する例であるが十万遺跡から同様のピット（SK24）が確認されている(10)。このような形態を有する貯蔵穴は晩期を通して南四国に一般的な貯蔵穴として理解することができよう。ただ十万遺跡は調査面積4,200㎡の中に1基，当遺跡においても6,200㎡の中に4基が散発的に存在するところに特徴がある。B類は，楕円形のプランを有し，比較的浅く壁面も斜めに立ち上がるもので各時代を通して一般的に見られる土坑である。Ⅱ区のSK3・SK10，Ⅴ区のSK8，SK22が該当する。これらは土坑墓の可能性があるが断定はできない。C類は，隅丸三角形状のプランを有し，短い2辺の壁の立ち上がりが緩やかであり，長辺の壁の立ち上がりが急勾配となっているところに特徴がある。類例は十万遺跡のSK23に求めることができ，先述の貯蔵穴に近接して出土している。このように僅少ながらも他に類例が認められることは，一定の目的と規格のもとに設けられた遺構と考えなければならない。遺物はSK1から細片（281・282）が出土しているのみであり，性格を明確にすることはできない。D類は，Ⅱ区のSK7をあてることができる。他の類に比べてプラン，深さ共に大型であり，図示可能な遺物はないが土器細片が多量に出土している。性格については不明であるが，やはり長辺の壁面の立ち上がりの一方が急勾配で一方が緩やかである。C類と共に晩期集落を構成する一要素として把握しておきたい。

以上土器と遺構について若干の考察を試みた。その結果美良布遺跡は，縄文時代前期に最初の生活の痕跡が認められ，その後長い間空白が続くが，縄文時代晩期前半の終わり頃，突帯文土器成立

の直前に再び営まれた集落址である。しかしその存続期間は短く僅かに土器1型式のうちに終息している。また6,200㎡という広範囲の調査であったにもかかわらず竪穴住居址を検出することができなかった。後世の削平による消滅も考えられるが，十万遺跡もふくめて掘立柱建物であった可能性も十分に考えられる。石器など土器以外についての遺物は全く不明であるが，南四国で唯一の晩期前半集落址の調査例であり，当該期研究の指標となろう。

## 2．中世の土器と遺構

### (1) 土器

出土土器の器種組成は表－8に示した通りである。これに示した点数及び百分率の算定は個体数によるものではなく破片によったものであるが，おおよその傾向はつかめるであろう。ここでは最も出土量の多い土師器（94.3%）を中心として若干の考察を試みることにする。これらの土器の出土状況はすでに触れたように，ピットと包含層からのものが圧倒的に多く，第Ⅳ調査区のＳＫ５を除くと土坑出土の一括資料など共伴関係をつかむうえで良好な資料に恵まれているとは言い難い。しかし近年，本県における中世土器の編年的な研究は漸次充実しつつあり，今次調査出土土器もそれらと整合させることにより遺跡の変遷を把握することが可能となる。土師器は，坏・皿・椀・鍋などが出土しているがここでは特に出土土器の多かった坏と皿・小皿について，型態・手法などの特徴から分類を行い次いで時期比定を行いたい。

表－8　古代末・中世の土器組成

| 器種 | | 点数 | % |
|---|---|---|---|
| 土師器 | | 6,180 | 94.3 |
| 瓦器 | | 121 | 1.8 |
| 黒色土器 | | 7 | 0.1 |
| 輸入陶磁 | 青磁 | 108 | 1.65 |
| | 白磁 | 70 | 1.0 |
| 備前 | | 43 | 0.6 |
| 須恵器（東播系） | | 24 | 0.4 |
| 計 | | 6,553 | 99.85 |

① 土師器

坏としたものは，すべてロクロ成形・糸切りである。全体の器形がわかるものが少ないので口縁部の形態，手法からⅠ～Ⅵ類に分類することができる。

Ⅰ類（23・56・57）：底部のみしか確認できないが，ベタ高台を有し糸切り底である。

Ⅱ類：胴部中位または下半まで内湾気味に立ち上がり，そこから口縁部に向かって緩やかに外反する。口縁部が肥厚するⅡ－Ａ類と肥厚しないⅡ－Ｂ類，更に，小振で胎土・作り共に粗雑なⅡ－Ｃ類がある。Ⅱ－Ａ類は，15・26・35・210などが該当し，Ⅱ－Ｂ類には19・36・39・206・208・224・270が，Ⅱ－Ｃ類には255・256が属する。

Ⅲ類（14・38・53・55・69・223・261）：口縁直下まで内湾気味に立ち上がり，口縁部が外反する。

Ⅳ類（16・22・129・268）：わずかに内湾気味，もしくは直線的に立ち上がる。

Ⅴ類：Ⅱ～Ⅳ類に比べて小振であり底部から直線的に立ち上がり，内外面にロクロ目が顕著。胎土が精選され作りの丁寧なⅤ－Ａ類（50・267）と胎土中に不揃いの砂粒を含み作りの雑なⅤ－Ｂ類（52・209・202・211・214・260）に分けることができる。

Ⅵ類：Ⅴ－Ｂ類に比べて底径は小型化するが器高が高く大振りとなる。作りは粗雑である。

Ⅲ

Ⅲについては第２調査区で分類したとおりである。

Ⅰ類：65・71～93・192

Ⅱ類：66・68・94～101・189・190

Ⅲ類：102～125

Ⅳ類：126・127

小Ⅲ

Ⅰ類（21・32）：未ロクロ成形で口縁部が外反。

Ⅱ類（12・13・253・254）：ロクロ成形でヘラ切り，Ⅲ類に比べて口径が広い。

Ⅲ類：ロクロ成形で糸切り。型態的特徴によってⅢ－Ａ・Ⅲ－Ｂ類に分けることができる。

Ⅲ－Ａ類（28）：底部から胴部下半まで内湾して立ち上がり，そこから口縁部に向かって大きく外反，坏Ⅱ類を小型化したようなタイプ。

Ⅲ－Ｂ類（18・31・184～187・203・204・232・233・262・263）：底部から内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。わずかに外反するものもある。

以上の分類をもとに量的には僅少であるが共伴関係のつかめる第Ⅰ調査区のＳＢ２・３，同ＳＫ９及び第Ⅳ調査区のＳＫ５について見ると，ＳＢ２からは坏Ⅱ－Ａ類（15）・Ⅲ類（14）・Ⅳ類（16）と小ⅢⅡ類（12・13）が，ＳＢ３からは坏Ⅱ－Ａ類（35）・Ⅱ－Ｂ類（39）・小ⅢⅠ類（32）が，ＳＫ９からは坏Ⅰ類（23）・Ⅱ－Ｂ類（19）・Ⅳ類（16），小ⅢⅠ類（21）・Ⅲ－Ｂ類（18）が，ＳＫ５からは坏Ⅱ－Ｃ類（255・256）・Ⅲ類（261）・Ⅴ－Ｂ類（260），小ⅢⅡ類（253・254）が出土している。次にこれら遺構出土の土師器の時期比定を行わなければならない。これらの土器と比較検討できる資料としては野市町曽我遺跡のＳＫ５[11]と香我美町十万遺跡のＳＫ11を挙げることができる。曽我遺跡のＳＫ５からは坏Ⅱ－Ａ・Ｂ類に似た数点の坏と共に白磁椀類や畿内で言うところの「て」字状口縁を有する小Ⅲが出土しているところから11世紀後半代に属すると考えられている。ＳＢ２・３・ＳＫ９出土の坏Ⅱ－Ａ・Ｂ類は，曽我遺跡のものに比べると器面調整にヘラ削りやその上を磨く例が少ないことなどから後出的な要素が強い。またＳＢ３出土の小ⅢⅠ類（32）は，「へ」字状口縁の退化形態として把握することができる。十万遺跡のＳＫ11からは坏Ⅱ－Ｃ類に類似した坏と共に多数の未ロクロ成形によるⅢが出土しており，共伴の青磁から14世紀代とすることができる[12]。ＳＫ５の坏は十万遺跡ＳＫ11と共通する要素が強いが，Ⅲを伴っていない点が異なる。本県の未ロクロ成形によるⅢの出現について松田直則氏は14世紀代以降と見ており[13]，十万

遺跡ＳＫ11をその初現としている。従って上述の一連の遺構出土の土師器は，11世紀後半よりは新しく，14世紀よりは古い段階とすることができる。現段階では，土師器のみからこれ以上に時期を限定することができない。後述する瓦器・黒色土器などから時期をしぼって行きたい。

次に坏Ⅴ類・Ⅵ類であるが，Ⅴ類はその形態的特徴から15世紀前半に，Ⅵ類は15世紀後半に比定することができる。前者については十万遺跡のＳＤ１，後者については芳原城出土(14)の土器に類例を求めることが可能である。

土師器皿は，Ⅳ類以外すべて未ロクロ成形によるものである。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の形態上の差異は口縁内外面のナデ調整の違いを反映したものであるが，県下各地の出土状況を見ると厳密な時間的な先後関係を示したものではない。ただ上述の十万遺跡ＳＫ11からはⅡ類の出土が圧倒的に多いことからⅡ類が古相を示していることは否めない。次にⅣ類に注目したい。127は，完形であり第２調査区のＰ46からの単独出土であるが，これまで出土しているロクロ形成の皿のどれよりも形態的に古い様相を呈している。これまでロクロ成形による皿の出現は16世紀前後と考えられていたが，出現期はもっと遡ることが明らかになった。

今一つ土師器について注目すべきことがある。それは坏底部の成形手法についてである。230・231の底部断面で観察することができたが，底部製作の方法として厚さ0.8㎝，径５㎝前後の円板を作り，その外縁から粘土を巻き上げて全体の成形を行い，更に円板の上にも粘土をのせて底部を完成させている。このような工程による製作は，15世紀後半以後の坏には全く認められないことである。この円板はおそらく10世紀代に盛行を極めるベタ高台坏のルジメントとして把握することができる。芳原城や田村遺跡群ＬＯＣ42－ＳＫ96（15），岡豊城出土の坏には認められない。これら15世紀後半以後の坏底部はそれ以前のものに比べて底径が小さくなりロクロ目もより顕著となる。今後分析を進めて行かなければならない課題であるが，15世紀代に土師器坏製作上の技術革新があったと考えられる。それは上述のような坏製作手法上の変化のみでなく，それと不離一体の関係にあるロクロ自体の変化を伴ったものと推察される。

(2) 瓦器

椀・小皿・鉢・鍋がある。椀20・24は第１調査区ＳＫ９出土のものでⅢ期（13世紀）に属し(16)，45はそれよりも古い。他の椀は小片であり時期比定が困難であるが器壁の厚さなどからして概ねⅢ期及びそれ以降のものと考えられる。鉢（246）は，本県では 出土例のほとんどないものである。形態から後述する東播型こね鉢を模した鉢である。和泉・河内では14世紀後半に東播磨型のこね鉢を写した瓦器擂鉢の製作が開始され，東播磨型のものに取ってかわることが明らかになっているが(17)本例もその１つで和泉あるいは河内からの搬入品と考えられる。鍋（141・198・200～202など）は，141以外はすべて鍔を巡らすタイプである。141は芳原城などで和泉Ｄ型の瓦器釜(18)や15世紀後半の土師器と共伴している。鍔付の鍋は，それに先後するものであり14世紀代と考えることができる。

(3) 黒色土器

すべてB類で口縁部片が3点（41・42・44）出土している。本県における黒色土器はA類が9世紀後半に出現するが[20]，これは明らかに畿内からの搬入品であり，その後の消長やB類の成立・出現期，瓦器椀との関係などは全く不明と言わざるを得ない。この3点は搬入品の可能性が強い。41は，12～13世紀の掘立柱建物ＳＢ3柱穴からの出土であること以外は言及できない。資料の増加をまって検討しなければならない。

(4) 国産陶器

東播磨型のこね鉢247・248を挙げることができる。両者共にⅦ期（13世紀後半～14世紀前葉）[21]に属する。本県の山城や中世集落では備前焼の出土が目立つが，当遺跡からはほとんど出土していない。備前焼が流入する以前の様相を示している。

(5) 貿易陶磁

青磁・白磁・青白磁があり，椀と皿が見られ椀が圧倒的に多い。青磁では，大宰府分類の同安窯系皿Ⅰ－1－b（69）と龍泉窯系椀Ⅰ－4－b[22]（195）が古く13世紀前半に位置付けられる。後者は第Ⅲ調査区ＳＫ46から出土白磁椀199と共伴している。しかし最も出土例の多いのは雷文帯を有するタイプと鎬蓮弁文を有するタイプである。後者の鎬は中心線からはずれるものばかりで，かつ間弁も退化したものが多い。前者は14世紀末～15世紀前葉，後者は14世紀代に位置付けられる。次いで細描蓮弁文（169）と無文（167・168・242）のタイプがあり，15世紀代に属する。

白磁は，椀179・181が大宰府分類のⅣ－1－a類に，46・47・180がⅤ類に，48がⅨ類に属する。また底部178はⅣ類に対応するものである。皿196は，Ⅸ－1類に属する。241も同類に属する可能性が強い。従って白磁は46・47・178～181が12世紀前後，48・196・241が14世紀に該当する。

(2) 遺構とその変遷

検出遺構は柱穴と考えられるピットが圧倒的に多かったが，掘立柱建物として復元できたものは，第1調査区のＳＢ1・2・3と第Ⅱ調査区のＳＢ1・2のみであった。出土遺物から時期を求めると第1調査区のＳＢ2・3が12～13世紀，第Ⅱ調査区のＳＢ1が15世紀，ＳＢ2が14世紀代とすることができる。土坑は第Ⅰ～Ⅳ調査区から多数検出し得たが，出土遺物が僅少であるためその性格や時期を明確にできるものが少ない。時期の把握できたものは，第Ⅰ調査区のＳＫ9が13世紀，ＳＫ10・18が12～13世紀，第Ⅱ調査区のＳＫ19が14世紀，第Ⅲ調査区のＳＫ19が15世紀，ＳＫ8・14・16・26・28・33が14世紀，同じくＳＫ46が13世紀，第Ⅳ調査区のＳＫ5が13世紀末～14世紀初に属する。以上のように時期の把握できる中世遺構は，遺構の数に限って見れば12～13世紀に営みが開始され，14世紀に盛行期を迎えるが，15世紀に至ると遺構数が現象し衰退に向かう。この変遷は，包含層出土の遺構やピットなどからの単独出土遺物の変遷にも対応した変化である。

ここで第Ⅰ調査区の西方及び第Ⅲ調査区で検出した土坑群について触れなければならない。大きさは必ずしも統一されていないが円形または楕円形のプランを有する土坑が3～7基が1つのまとまり（単位）となって配置されている。これらの一単位が同時期の所産であるか否かは，遺物が少

ないために断定できないが位置関係から考えておそらく同時期に営まれ一単位で何らかの機能を果したものと考えられる。先ずグルーピングをすると第1調査区の1群（ＳＫ16・30・29），2群（ＳＫ20・21・Ｐ14），3群（ＳＫ22・23・24），第Ⅲ調査区の4群（ＳＫ１・49・50・51），第5群（ＳＫ３・４・６・７），第6群（ＳＫ39・40・52・53），第7群（ＳＫ２・14・15・37），第8群（30・31・34・35・38・44・48），この他中央部の土坑密集地点では数群に分けることができると考えられる。これらの土坑は第Ⅲ区密集地点のＳＫ19が15世紀に属する他は概ね14世紀に属するものである。すなわち当遺跡の中世の盛行期にこれら土坑群が営まれたことになる。遺物が僅少なために土坑群の性格を明確にすることはできないが，祭祀的な要素を有する可能性も考えられる。

### 3．美良布遺跡の変遷

今次調査は国道195号線より南の部分を対称として実施したものであり，美良布遺跡の推定範囲の南半分をほぼ全面にわたって調査したことになる。ここでは過去の調査結果も加味しながら美良布遺跡の変遷について述べることにしたい。

美良布遺跡は，これまで縄文時代晩期前半に遡る遺跡とされていたが，今次調査によって縄文時代前期（約6000年前）に始まる遺跡であることが明らかとなった。更に小破片ではあるが厚手無文の蔦島式土器の可能性のあるものも認められており，早期にまで遡る可能性も秘めている。香北町の歴史が6000年以上も前に始まることを明らかにし得たことは今次調査の成果の1つである。高知県の流れる大河川である四万十川・仁淀川・吉野川の上流やその支流域には縄文草創期や早期・前期の遺跡が少なからず確認されているが，これまで不明であった物部川流域においてもこのような古い段階の遺跡が展開している可能性を示すものである。

美良布遺跡は，川上谷に水源を求めて縄文時代前期や晩期前半に生活が営まれているが，その続存期間は両者共に短く，土器一型式のうちに終わっている。おそらく他の地域へ移動していったものと考えられる。この移動の範囲，すなわち集団のテリトリーが物部川の流域内であるのか，吉野川など他の河川流域をも含む広範囲なものであったのかということは今後追求して行かなければならない大きな課題である。

次いで弥生時代前期後半に至ると再び集落が営まれるようになるが，過去の調査において前期土器や竪穴住居の一部が確認されていることからその中心は遺跡の北半分（195号線の北側）と考えなければならないであろう。物部川流域における弥生前期の遺跡は高知平野に展開する県下最大の拠点的集落である田村遺跡群を除くと美良布遺跡が挙げられるのみである。前期後半の時期は全国的な趨勢として弥生集落が拡散し遺跡数が飛躍的に増加する現象が見られる。本県においても田村遺跡群を拠点として香宗川流域に下分遠崎遺跡が，国分川流域には比江廃寺遺跡などが新たに営まれるようになる。美良布遺跡もそのような動きの中で成立した遺跡の一つとして位置付けられるべきものである。しかしながらその後の展開のあり方を見ると美良布遺跡は，他の諸遺跡とは明らかに異なった展開を示している。すなわち下分遠崎遺跡や比江廃寺遺跡などは比較的短期間に終焉を

迎え断絶が見られるのに対して美良布遺跡は前期後半から中期・後期へと断続的に営み続けられているのである。そして後期後半頃には銅鐸2個（突線紐式）を有するまでの集落に成長し，土佐において政治的にも一定の役割を果すまでになっている。現段階において県下の弥生時代の集落址で，前期から後期まで連続して生活の跡を追うことのできる遺跡は田村遺跡群と美良布遺跡のみである。このことは，遺跡の規模こそ狭小ではあるが，美良布遺跡の位置付けを考える上で重要視しなければならない要素である。

古墳時代に属するものは，第Ⅴ調査区包含層出土の土師器甕1例（288）のみである。以後奈良平安時代を通して遺物は極少量にすぎない。しかしながら『続日本後期』の承和八年（841）8月4日条には「以土佐国美良布神，石土神，並預宮社」と文献に初見し，更に『三代実録』の貞観8年（866）8月7日条には「授土佐国従五位下大川上美良布神従五位上」とあり，延喜以前の美良布神社の存在とその動向が窺われることから，美良布遺跡あるいはその周辺には，神社関連の遺構の存在か多分に考えられる。12・13世紀になると遺構・遺物が増加しはじめ，14世紀に至ってピークを迎える。前述のように祭祀土坑とも考えられる性格不詳の円楕・楕円形の土坑が数多く営まれる。15世紀代には掘立柱建物などが認められるが，前代に比べて量的には少なくなっている。以後近世に属するものは遺物・遺構ともほとんど認められない。おそらく水田になったのではないかと考えられる。

（註）


(1) 出原恵三「土佐の弥生後期土器編年」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』1990年，古代学協会四国支部第4回大会資料

(2) 岡本健児『高知県史・考古編』　高知県　1968年

(3) 香北町教育委員会『美良布遺跡発掘調査報告書』　1970年

(4) 鎌木義昌・高橋　護「瀬戸内」『日本の考古学』Ⅱ　河出書房　1978年

(5) 春成秀爾「中国・四国」『新版日本考古学講座』Ⅲ

(6) 平井　勝「岡山における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集　1988年

(7) 高畑知功「谷尻遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』6，岡山県教育委員会　1976年

(8) 藤田憲二「倉敷市舟津原貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』　16，1981年

(9) 南方前池遺跡調査団「岡山県山陽町南方前池遺跡」『わたしたちの考古学』7，1965年

(10) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』　香我美町教育委員会1988年

(11) 高橋啓明・吉原達生『曽我遺跡発掘調査報告書』　野市町教育委員会　1989年，他

(12) (10)に同じ

(13) 松田直則「遺物について」『岡豊城跡』　高知県教育委員会　1990年，他

(14) 宅間一之・出原恵三『芳原城跡発掘調査報告書』　高知県教育委員会　1984年

⒂ 高知県教育委員会『田村遺跡群』　第10分冊　1986年

⒃ 橋本久和『上枚遺跡』　高槻市教育委員会　1980年

⒄ 管原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』　第19集　1989年

⒅ 管原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　1983年

⒇ 出原恵三「風指遺跡」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ　高知県教育委員会　1989年

㉑ 荻野繁春「財産目録に顔を出さない焼物」『国立歴史民族博物館研究報告』　第25集　1990年

㉒ 森田　勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」　1978年　九州歴史資料館研究論集　4

# 第Ⅵ章　高知県香美郡香北町美良布遺跡の縄文晩期堆積物の花粉分析

高知大学理学部生物学科
山　中　三　男

美良布遺跡は，高知県香美郡香北町美良布にあって，北緯約33°38′50″，東経約133°47′，海抜約110mに位置している。この遺跡は物部川左岸の河岸段丘上にある縄文・弥生の複合遺跡で，現在その周辺は香北町の中心集落となっている。

今回，私は美良布遺跡から採取した，縄文晩期の堆積物と考えられる試料3点について，花粉分析的研究を行ったので，その結果を報告する。

研究の機会をあたえて下さった香北町教育委員会と高知県教育委員会文化振興課の関係者の方々に厚くお礼申し上げる。

## 試料および分析方法

3点の分析試料はいずれも遺跡のKB90，Ⅰ区，P64から採取した。3試料ともほぼ同時代（縄文晩期）の堆積物と考えられているので，便宜的に1，2，3の番号をつけた。これらの試料は黒色の土壌で，細礫と腐植を含みいわゆる「くろぼく」状を呈している。このような「くろぼく」状の土壌中には，花粉・胞子の含有量がきわめて少ないことがわかっていたので，今回の分析には通常の分析に用いる試料の100～200倍（100～200g）の試料を使用した。

試料の処理は，HFによるケイ酸質の除去，10%KOH溶液による有機物の分解，$ZnCl_2$の飽和溶液による比重分離の順で行い，最後にアセトリシス処理を行ってプレパラートを作成した。検鏡にはオリンパスのバノックス型光学顕微鏡を使用した。

## 分析結果と考察

3試料を通じて木本花粉24種類，草本花粉15種類およびシダ胞子2種類を検出した。これら花粉・胞子の保存状態は，あまり良くなくて，変形しているものや，一部破損しているものもあった。

花粉・胞子の百分率の算出は，通常行われているように，検出した木本花粉（ただし低木性のモチノキ属，ブドウ属，サンショウ属，ツツジ科およびジンチョウゲ科をのぞく）の総数を基本数として行った。したがって多量に検出された一部の草本花粉やシダ胞子は100%を越えている。

検出した花粉・胞子の出現率の詳細は表1に，主な花粉・胞子の出現率は図1に示した。

ところで分析結果を検討する前に，美良布遺跡周辺の植生を概観しておく。このあたりの気候的極相は，常緑広葉樹を主とするいわゆる照葉樹林のはずである。遺跡の近くにある大川上美良布神

社の社叢林には，イチイガシ，サカキ，クスノキ，ミミズバイ，カゴノキ，モッコク，アラカシ，クスドイゲ，ネズミモチ，ムクノキ，ムクロジなど照葉樹林要素の植物が生育している（山脇，1978）。またここにはスギやイヌマキの大木もある。

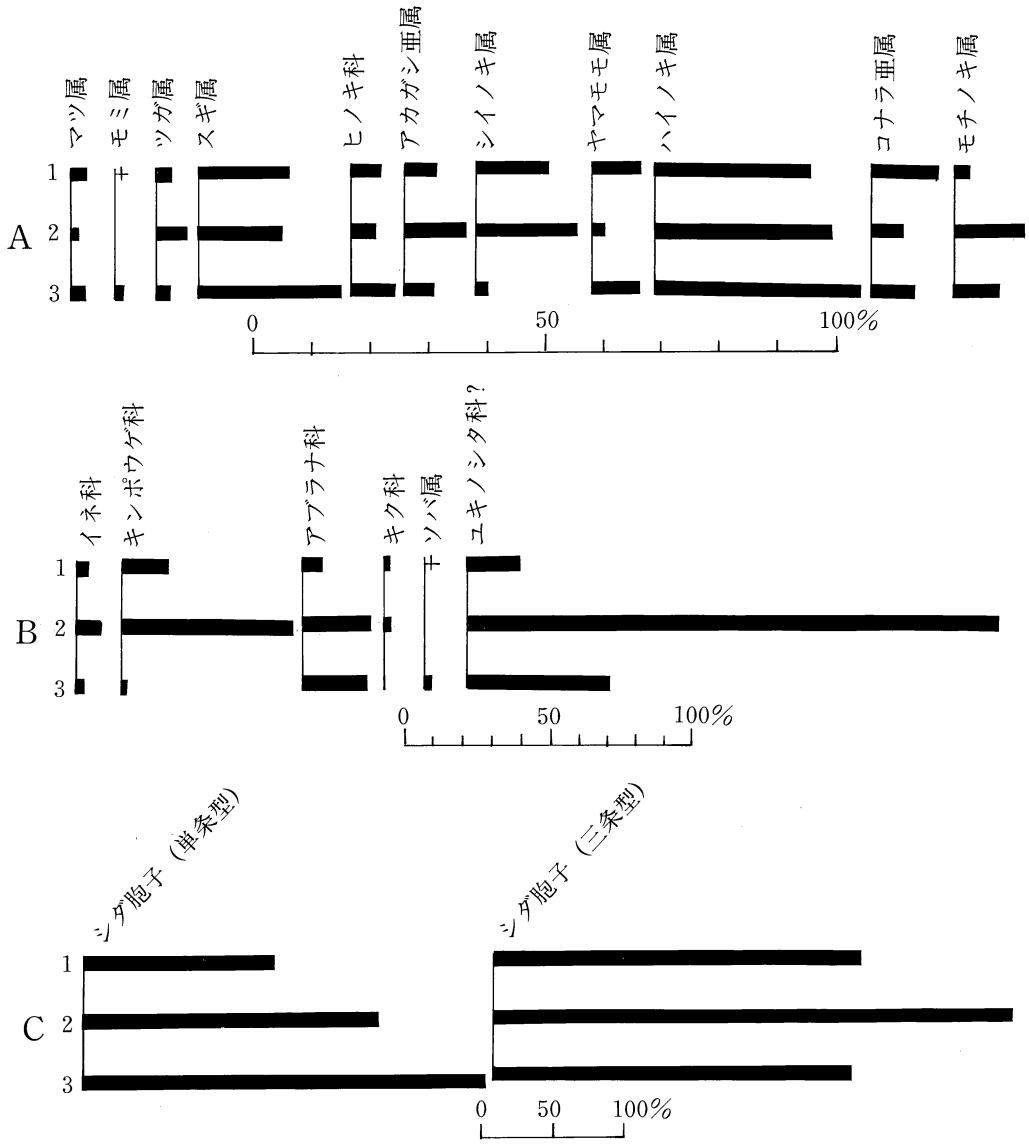



図1．主な花粉・胞子のダイアグラム。

A：木本花粉，

B：草本花粉（一部に低木花粉を含む可能性あり），

C：シダ胞子

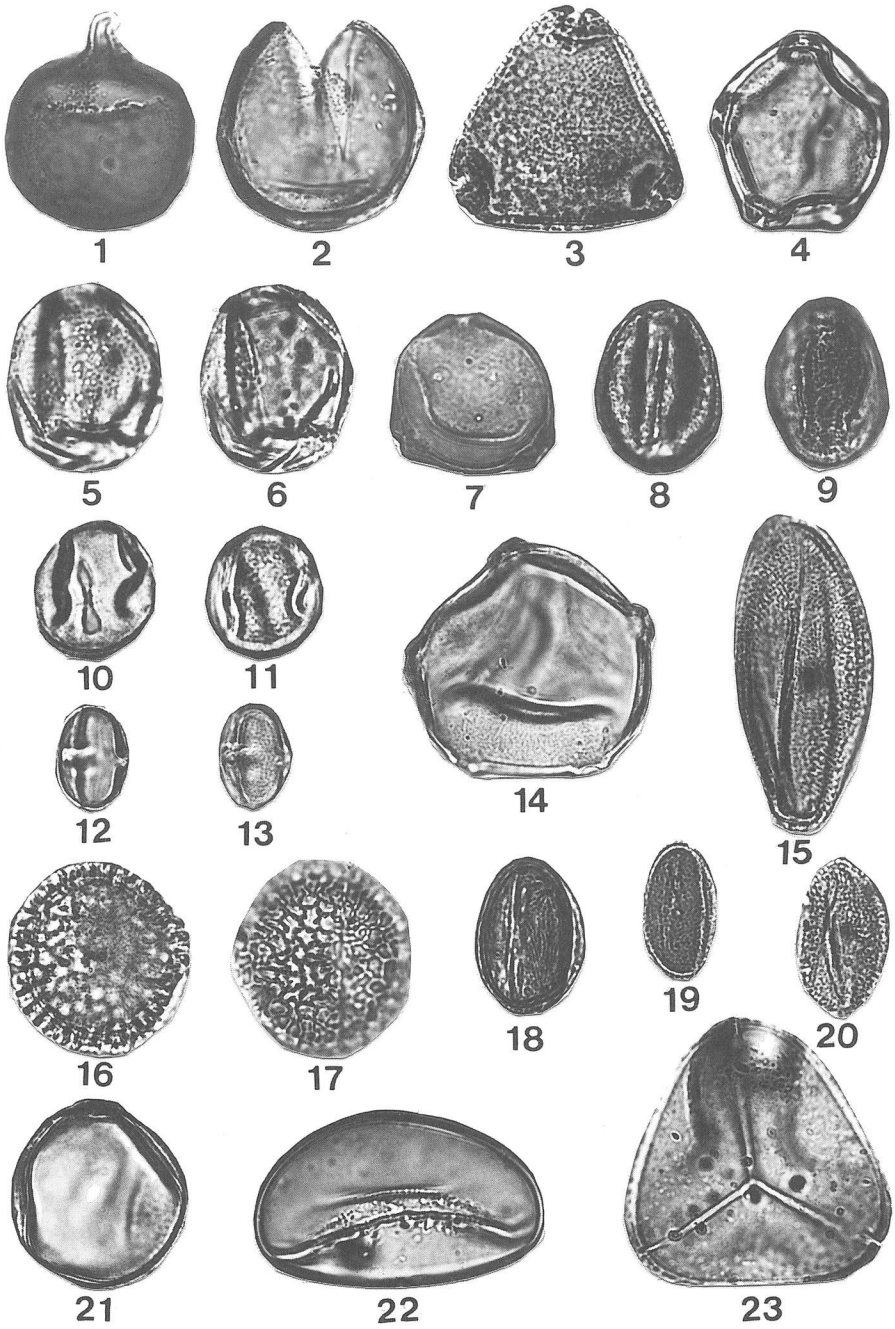



図２．主な花粉・胞子の顕微鏡写真

１－２：スギ属，３：ハイノキ属，４：ハンノキ属，５－６：ヒノキ科，７：ヤマモモ属，８－９：コナラ亜属，10—11：アカガシ亜属，12—13：シイノキ属，14：イヌシデ，15：ソバ属，16—17：ジンチョウゲ科，18：サクラ属，19：ユキノシタ科？，20：アブラナ科，21：イネ科，22：シダ胞子（単条型），23：シダ胞子（三条型），（写真はすべて800倍に拡大）。

表1．美良布遺跡の花粉分析結果（%）

| サンプル記号・番号 / 花粉・胞子型 | KB90，I区，P64 | | |
|---|---|---|---|
| | 1 | 2 | 3 |
| Arboreal pollen （木本花粉） | | | |
| *Pinus* （マツ属） | 2.5 | 2.0 | 2.1 |
| *Abies* （モミ属） | 0.8 | | 1.1 |
| *Tsuga* （ツガ属） | 2.5 | 5.0 | 2.1 |
| *Cryptomeria* （スギ属） | 15.8 | 13.9 | 24.2 |
| *Sciadopitys* （コウヤマキ属） | 0.8 | | |
| Cupressaceae（ヒノキ科） | | 4.0 | 7.4 |
| *Castanopsis* （シイノキ属） | 12.5 | 18.8 | 2.1 |
| *Cyclobalanopsis* （アカガシ亜属） | 5.8 | 10.9 | 5.3 |
| *Myrica*（ヤマモモ属） | 9.2 | 5.0 | 8.4 |
| *Symplocos* （ハイノキ属） | 26.7 | 30.7 | 35.8 |
| *Quercus* （コナラ亜属） | 11.7 | | |
| *Alnus* （ハンノキ属） | 0.8 | 2.0 | |
| *Acer*（カエデ属） | | | 2.1 |
| *Carpinus*（クマシデ属） | 2.5 | 2.0 | |
| *Carpinus tschonoskii*（イヌシデ） | 1.7 | | |
| *Celtis*（ニレ属） | | | 1.1 |
| *Prunus*（サクラ属） | 0.8 | | |
| *Salix* （ヤナギ属） | 0.8 | 1.0 | |
| *Zelkova* （ケヤキ属） | | | 1.1 |
| *Ilex*（モチノキ属） | 2.5 | 11.9 | 7.4 |
| *Vitis* （ブドウ属） | 2.5 | | |
| *Zanthoxylum* （サンショウ属） | | 4.0 | |
| Ericaceae （ツツジ科） | 0.8 | | |
| Thymelaeaceae （ジンチョウゲ科） | | | 1.1 |
| Non-arboreal pollen （草本花粉） | | | |
| Gramineae （イネ科） | 3.3 | 6.9 | 2.1 |
| Cyperaceae（カヤツリグサ科） | | 1.0 | 3.2 |
| Cruciferae（アブラナ科） | 6.7 | 23.8 | 22.1 |
| Ranunculaceae （キンポウゲ科） | 17.5 | 58.4 | 1.1 |
| Chenopodiaceae（アカザ科） | | 1.0 | |
| Urticaceae（イラクサ科） | | 5.9 | |
| Umbelliferae（セリ科） | 0.8 | | |
| Saxifragaceae （ユキノシタ科）？ | 20.0 | 182.8 | 50.5 |
| *Humulus* （カラハナソウ属） | | | 1.1 |
| *Fagopyrum* （ソバ属） | 0.8 | | 1.1 |
| *Thalictrum*（カラマツソウ属） | 0.8 | | |
| *Paederia*（ヘクソカズラ属） | | | 3.2 |
| Platycodon（キキョウ属） | | 1.0 | |
| *Artemisia* （ヨモギ属） | 0.8 | | |
| other Compositae（その他のキク科） | 1.7 | 2.0 | |
| Fern spore（シダ胞子） | | | |
| Monolete type （単条型） | 131.7 | 203.0 | 232.6 |
| Trilete type（三条型） | 253.3 | 355.4 | 248.4 |

しかし現在この付近では，スギやヒノキの植林が圧倒的に広い面積を占め，アカマツの二次林や，アラカシやシイノキ類を主とする雑木林もみられる。この雑木林はかつての薪炭林の名残りであろう。また河岸段丘上の平坦地は，居住地，水田および畑として利用されている。

さて分析結果をみると，木本花粉ではハイノキ属が高率で出現し，これにアカガシ亜属，シイノキ属およびヤマモモ属などの常緑広葉樹，スギ属やヒノキ属など針葉樹の花粉も比較的多量に検出されている。また落葉広葉樹であるコナラ亜属や，低木性のモチノキ属の花粉も少なくない。

草本類ではキンポウゲ科，アブラナ科およびユキノシタ科？の出現率が高く，とくにユキノシタ科と考えられる花粉の量は，百分率算出の基本数の180％に達していた。

シダ類胞子は単条型，三条型ともに非常に高い値となっている。

上記の分析結果から，当時の植生は次のように推定することができる。

森林植生は常緑広葉樹が主であったと考えられるが，ハイノキ属がもっとも高率であるのは，やや異例のことである。おそらく当時の森林は完全な自然林ではなく，かなり人手が加わっていたものと思われる。本来の森林としてはシイノキ類，カシ類，ヤマモモなどが主要な構成要素であったと考えられるが，人間の居住地に近いところでは，クロバイやミミズバイなど，ある程度人手の加わった二次林によく出現するハイノキ属の樹種が生育していたのであろう。

スギ属も高い出現率を示しているが，スギの花粉の生産量が非常に多いことを考慮すれば，当時の森林構成の主体となっていたのは，常緑広葉樹でこれにスギやヒノキなどの針葉樹が混生していたとみるべきであろう。

ソバ属花粉が試料１と３から検出された。このことは，当時遺跡の周辺でソバが栽培されていた可能性があることを示している。キンポウゲ科やアブラナ科など，日当たりの良い耕作地周辺によくみられるグループの花粉が同時に出現していることも，畑作農耕の存在をうらづけるものと考えられる。

シダ類胞子の大量出現は，常緑広葉樹林の林床で暖地性のシダが繁茂していたことを示すとともに，シダ胞子の外膜の強さを示すものと思われる。すなわち花粉の外膜は分解消失するような堆積環境でも，シダ胞子は割合良好な状態で保存されていることが多い。

## ま と め

(1) 高知県香美郡香北町美良布にある美良布遺跡から採取した縄文晩期の堆積物の花粉分析を行った。

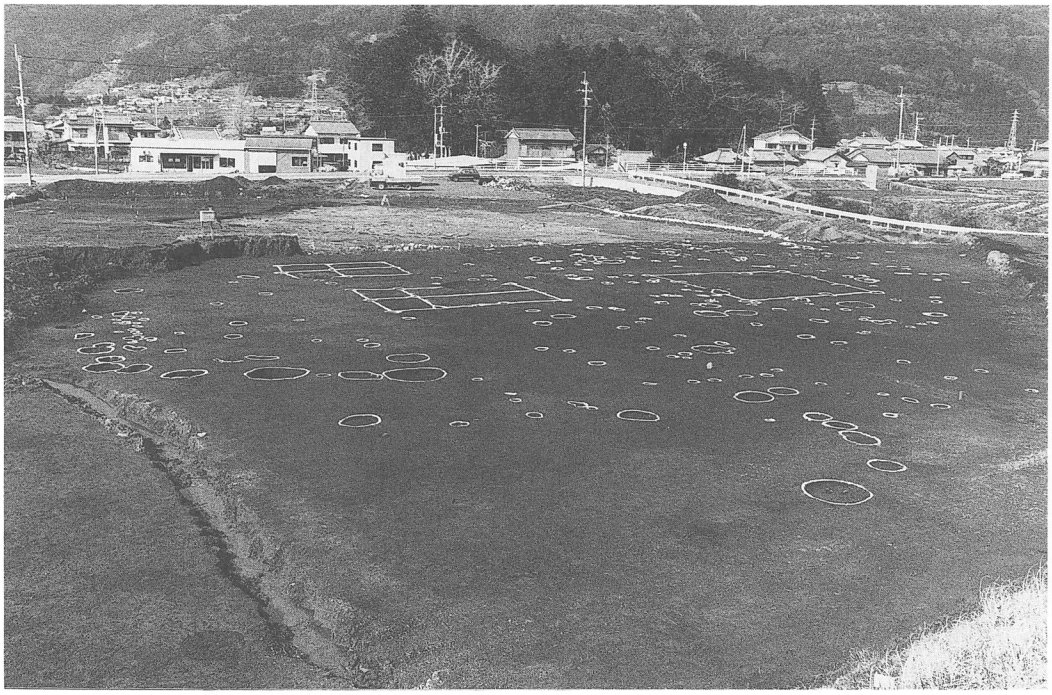
(2) 当時の森林植生は，常緑広葉樹が中心でこれに一部針葉樹や落葉樹が混生していた。ただ遺跡周辺では森林にかなり人手が加わっていたものと思われる。

(3) 遺跡の付近でソバが栽培されていた可能性が強い。

## 引 用 文 献

山脇哲臣（1978）：鎮守の森，その20，大川上美良布神社社叢。土佐の自然（17）14。

# 図　　版



第Ⅰ区完掘状況(南から)

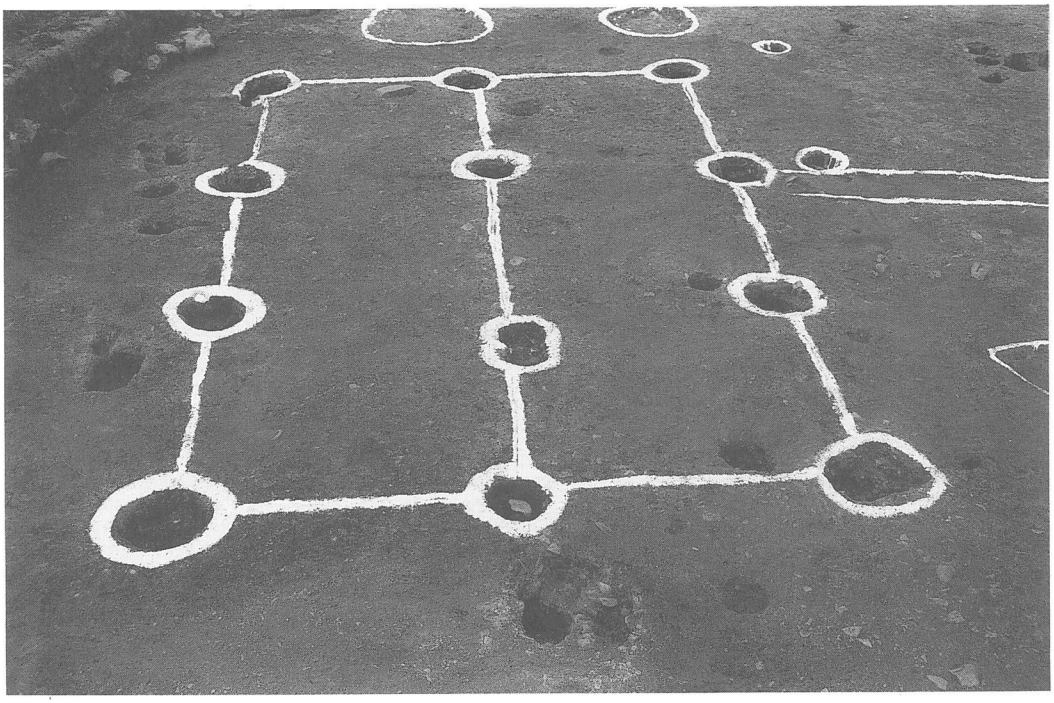
第Ⅱ区完掘状況(東南から)

第Ⅲ区完掘状況(東から)

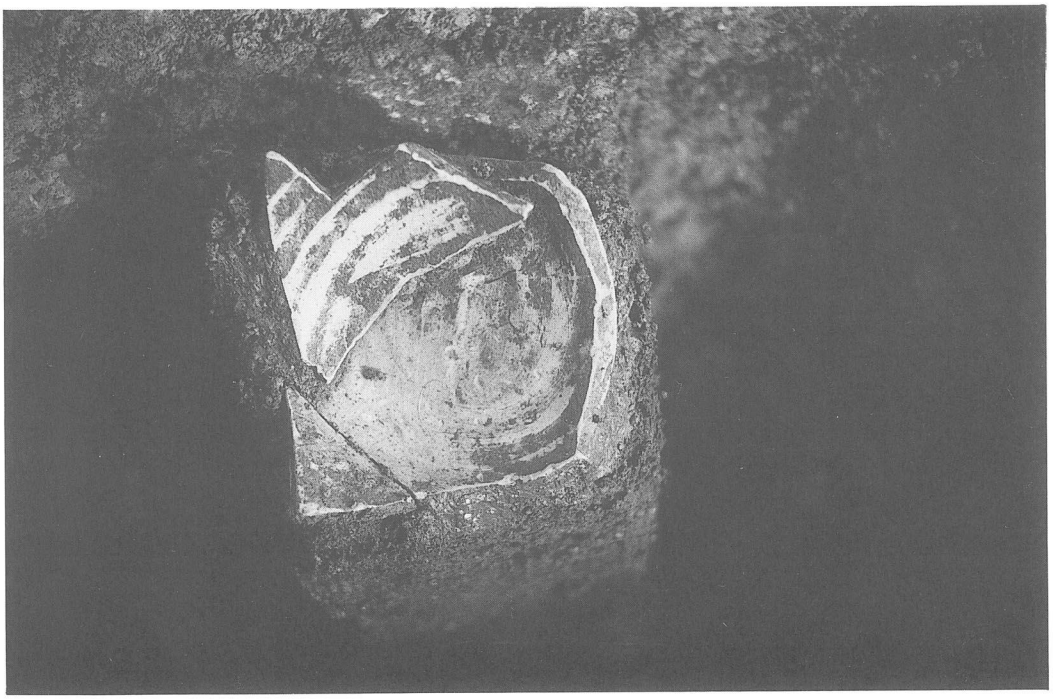
第Ⅳ区完掘状況(南東から)

第Ⅴ区完掘状況(南から)

第Ⅴ区　SX群検出状況(西から)



第II区　SB 1 完掘状況

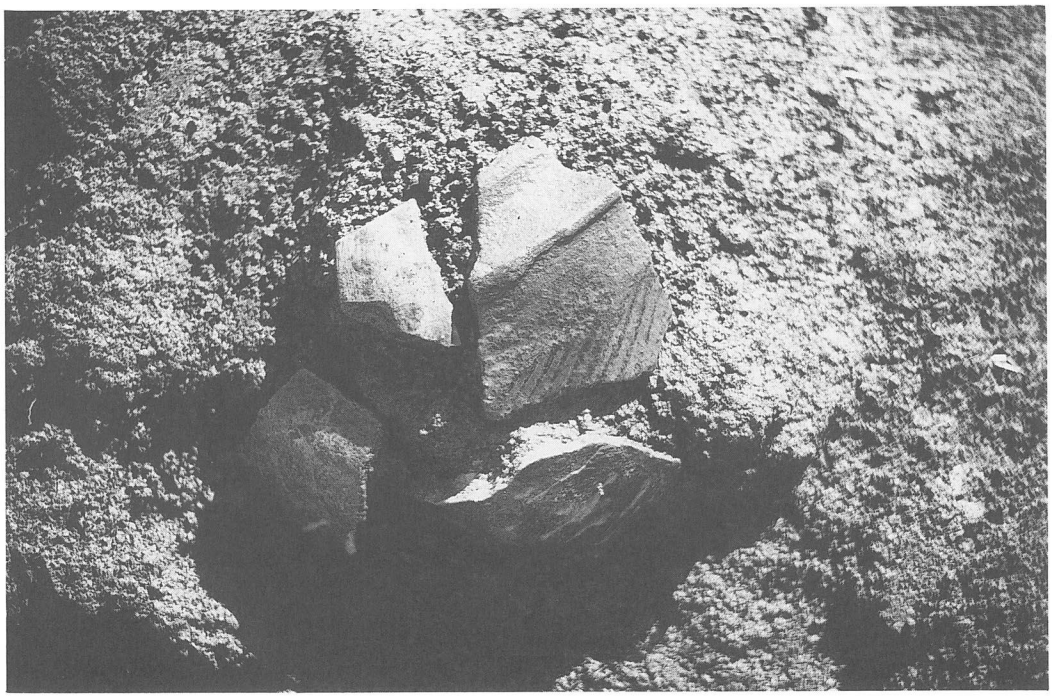


II区　SB1－P10 土師器坏出土状況(70)

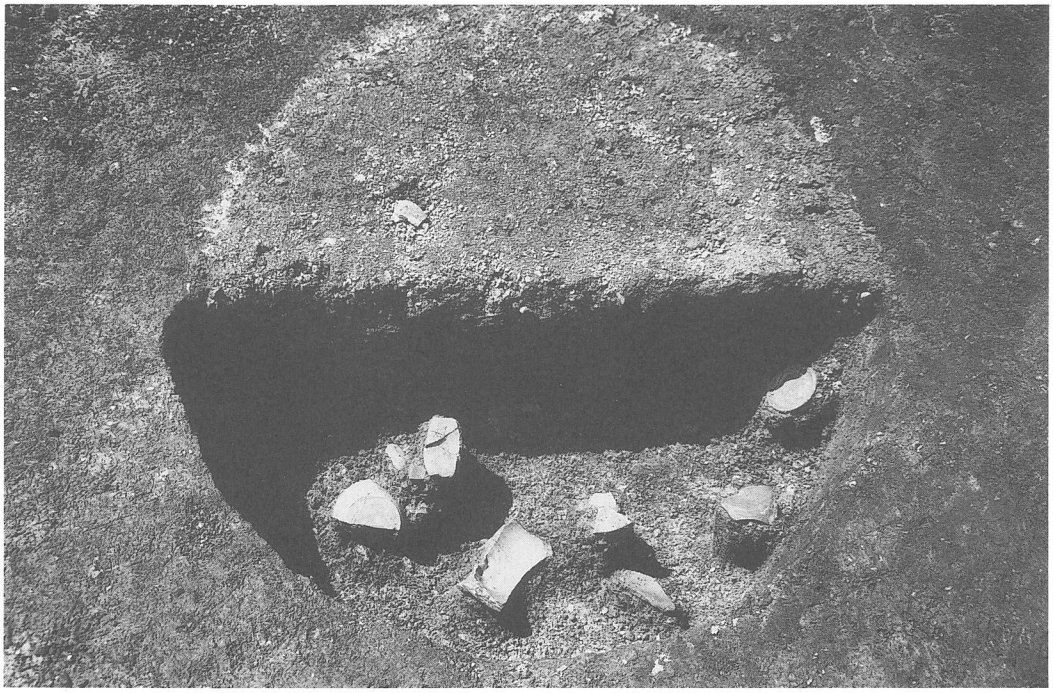
第Ⅰ区P64 浅鉢出土状況(10)

Ⅱ区P10 中層河原石出土状況

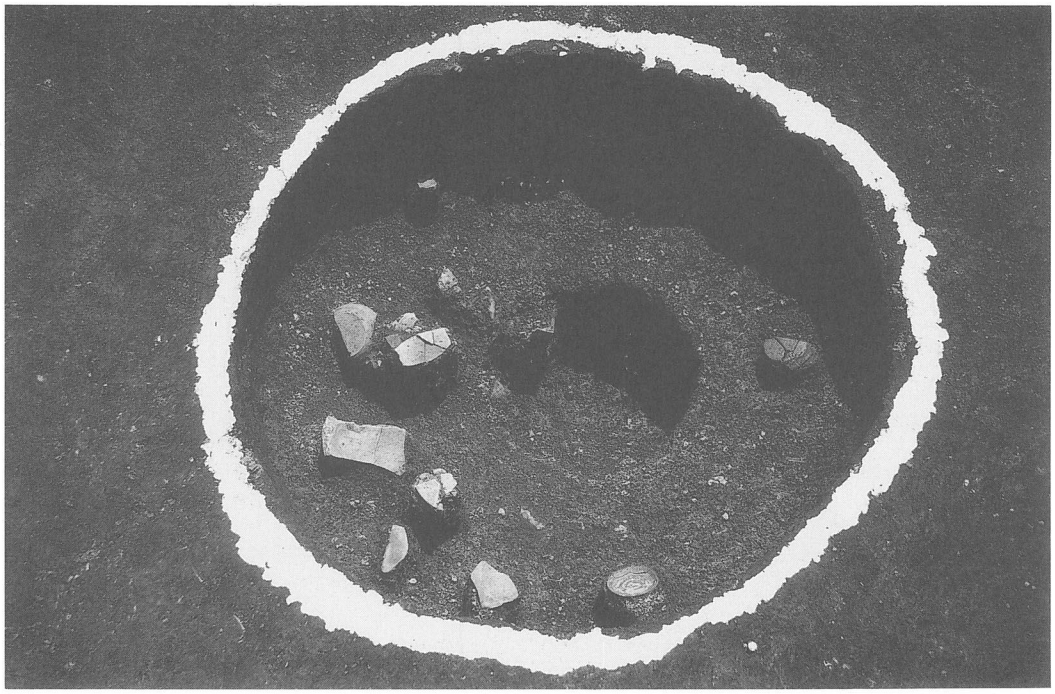
II区P46土師器皿出土状況(127)



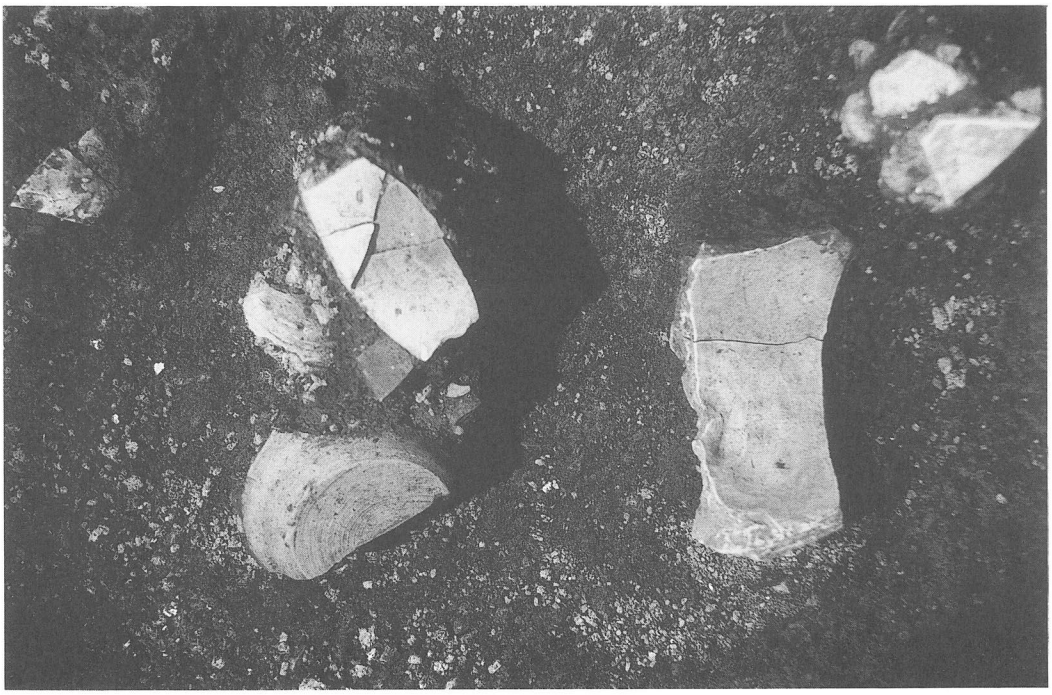
II区H4－2区土師器鍋出土状況(158)



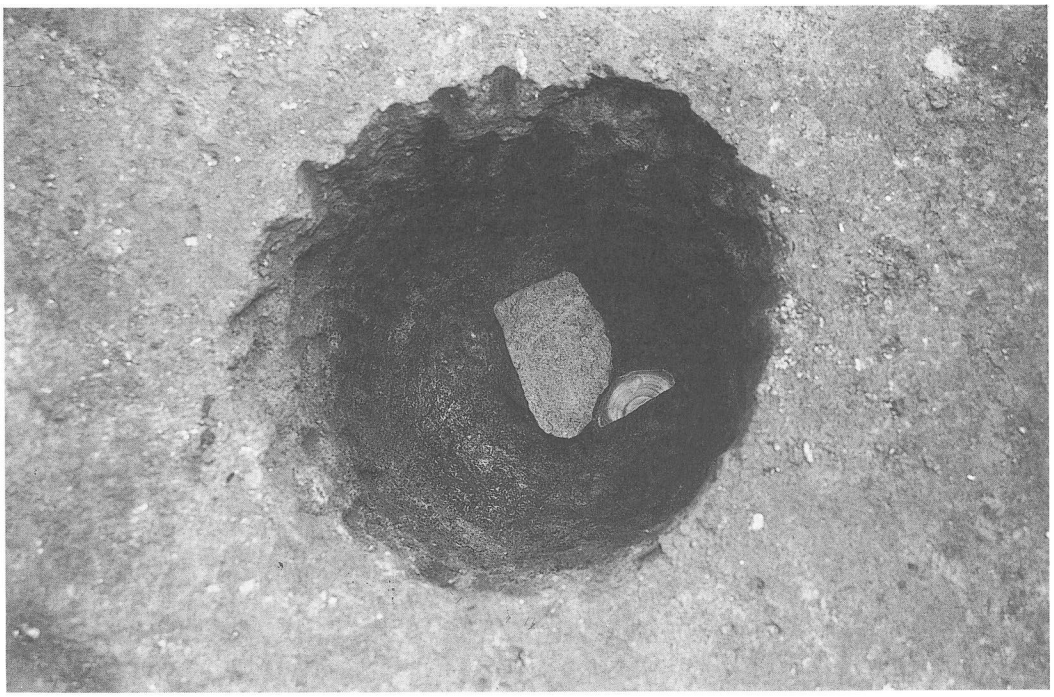
Ⅳ区SK 5 半截状況



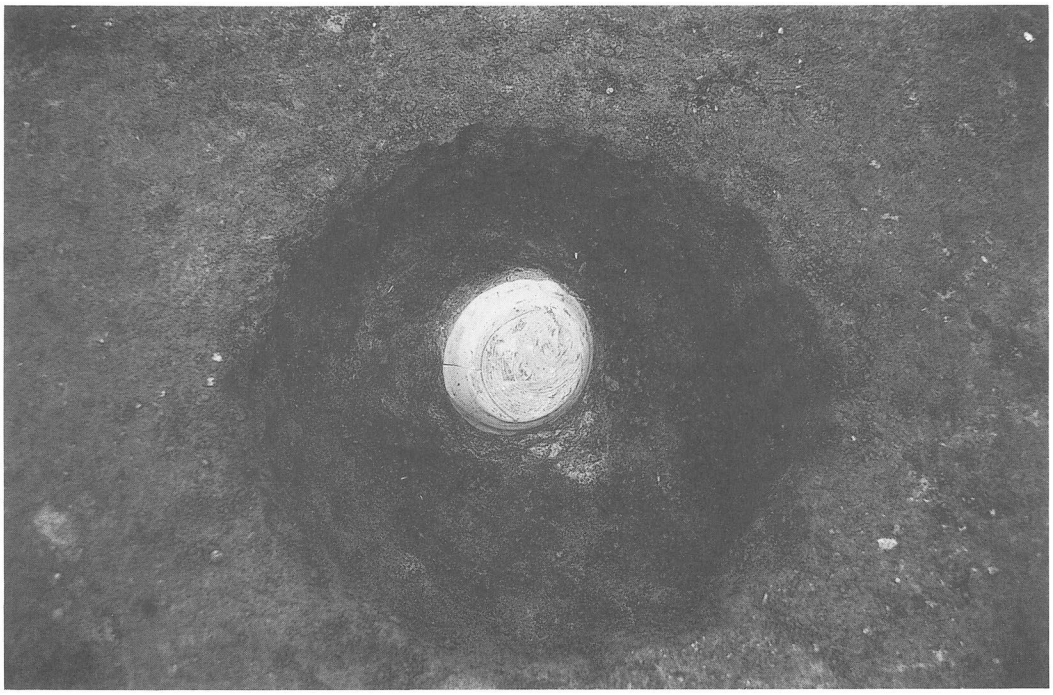
Ⅳ区SK 5 貴物出土状況



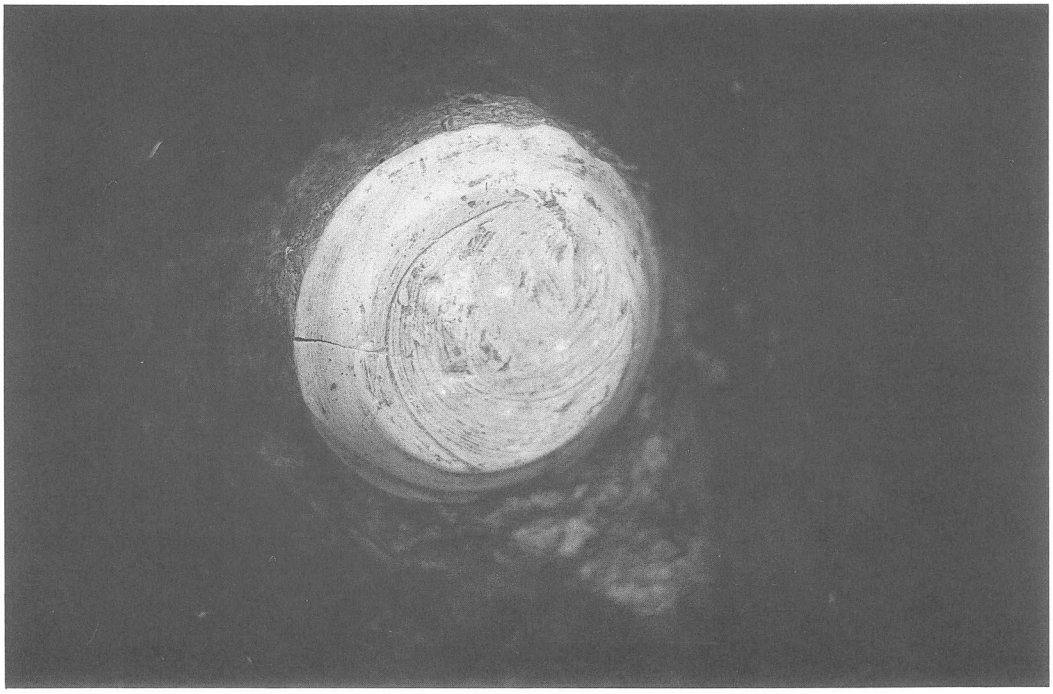
Ⅳ区SK 5 土師器坏出土状況



Ⅳ区P24床面出土の遺物(264)



Ⅳ区Ｐ25土師器小皿(262)出土状況



同上

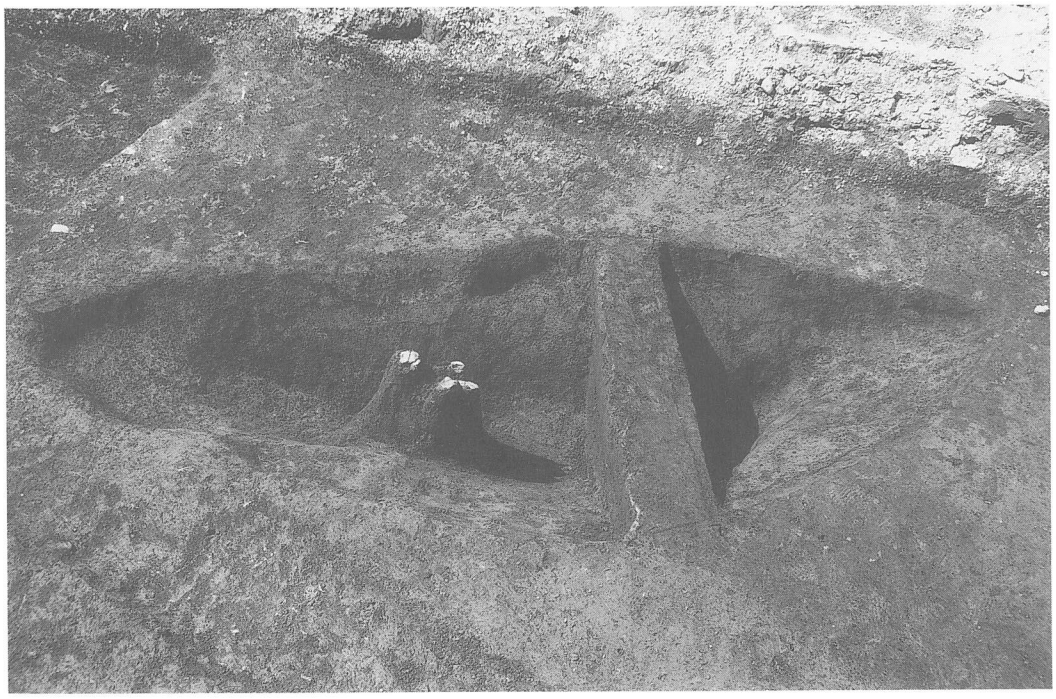
Ⅲ区P 2 土師器坏出土状況(211)

Ⅴ区SK 8 縄文深鉢(283)出土状況

Ⅴ区Ｐ１上層遺物出土状況

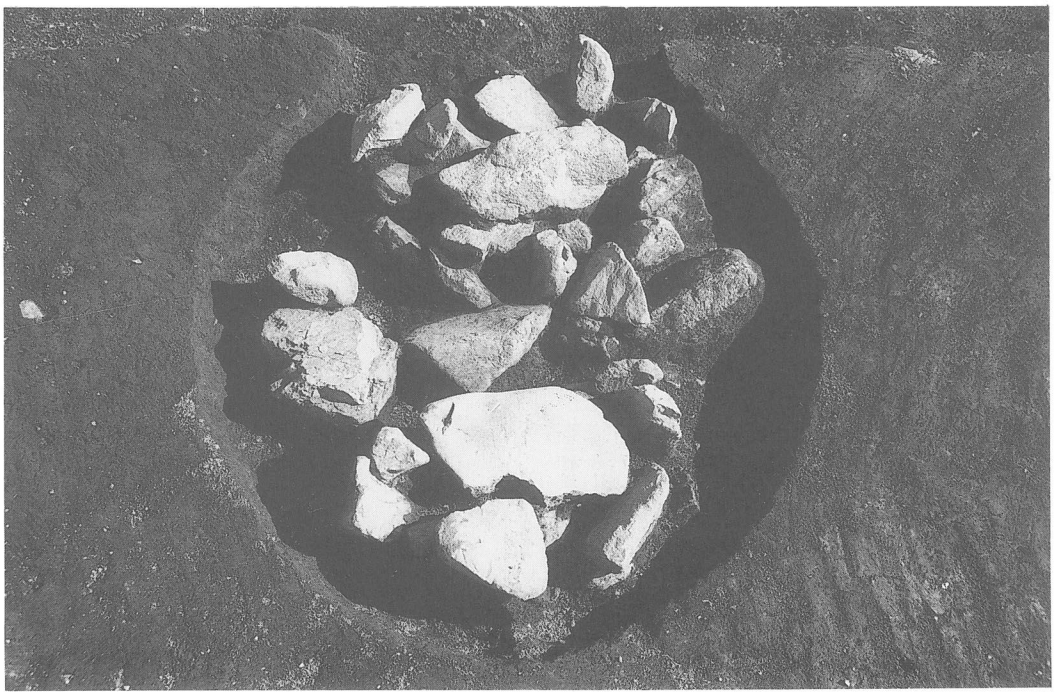
Ⅴ区Ｐ１中層遺物出土状況

Ⅴ区Ｐ１遺物出土状況

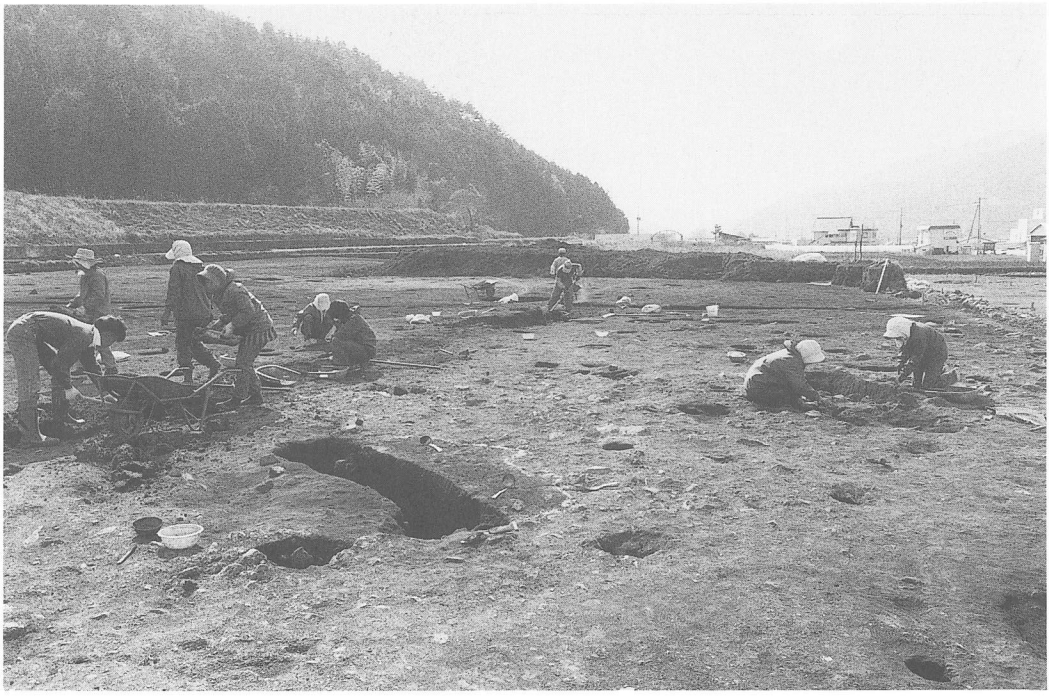


Ⅴ区ＳＫ１

V区包含層出土土師器(287)



V区SK20



発掘調査風景第１区

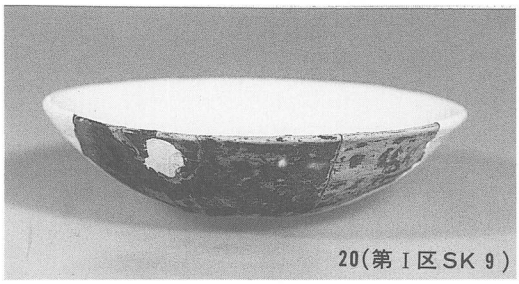
同上　　第II区

278（第Ⅴ区Ｐ１）

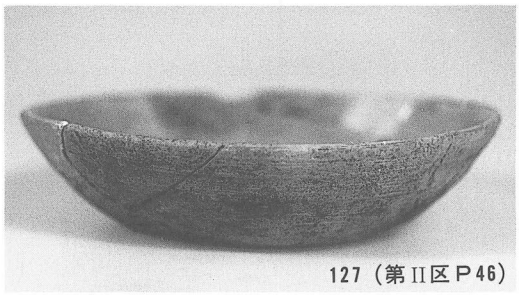
244（第Ⅲ区包含層）

288（第Ⅴ区包含層）

10(第Ⅰ区Ｐ64)

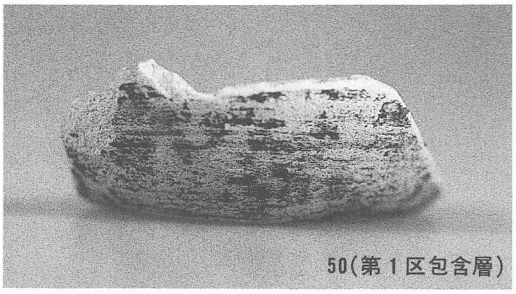

20(第Ⅰ区ＳＫ９)

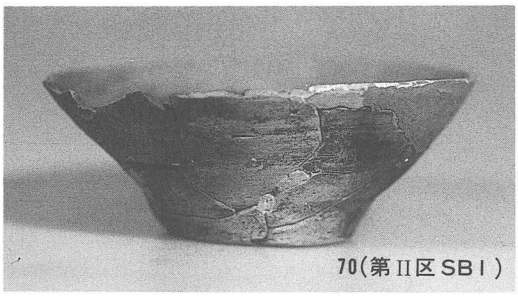
90(第Ⅱ区Ｐ248)

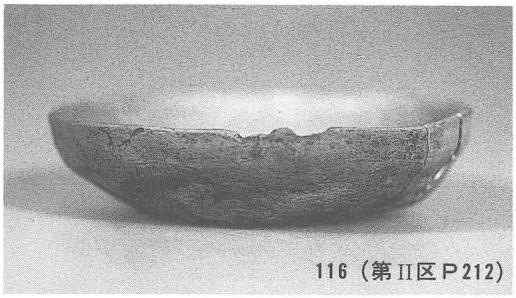

127（第Ⅱ区Ｐ46）

45(第Ⅰ区Ｐ86)

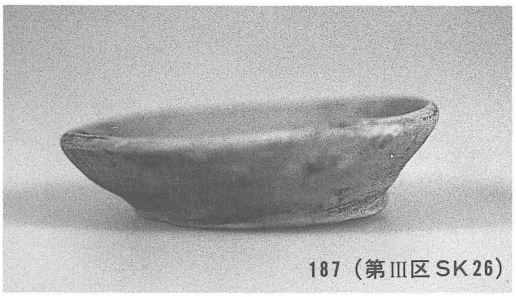
縄文・弥生土器及び土師器・瓦器


50(第１区包含層)


70(第Ⅱ区SBⅠ)

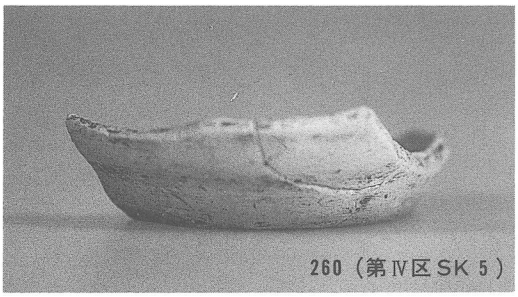

116（第Ⅱ区P212)

130（第Ⅱ区P125)


187（第Ⅲ区SK26)

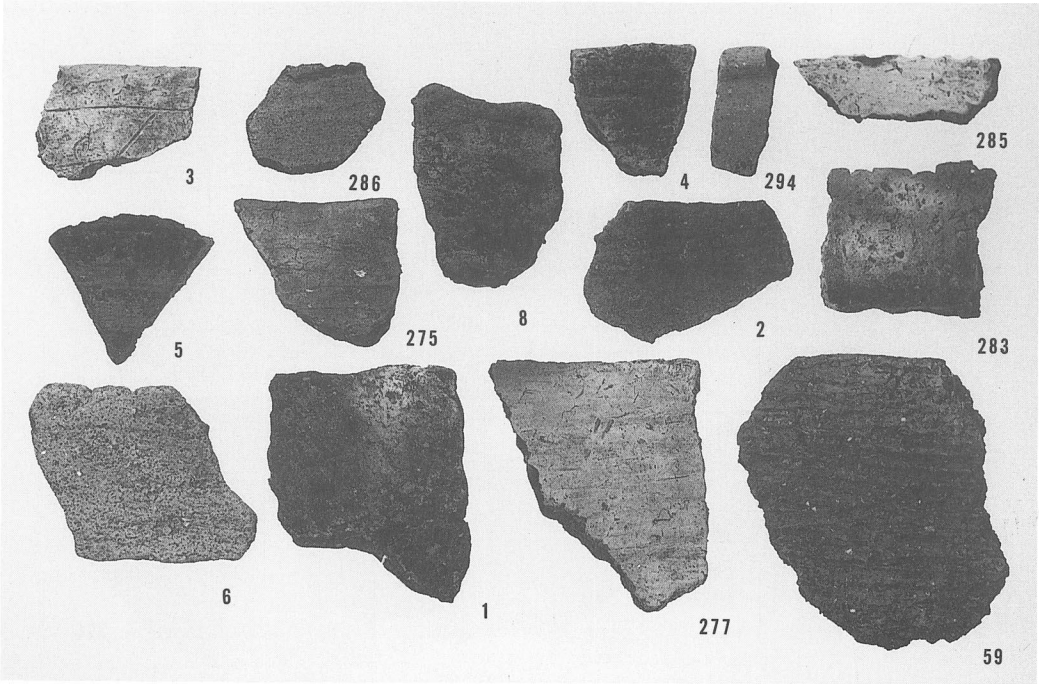
209（第Ⅲ区P 2）

211（第Ⅲ区P 2）

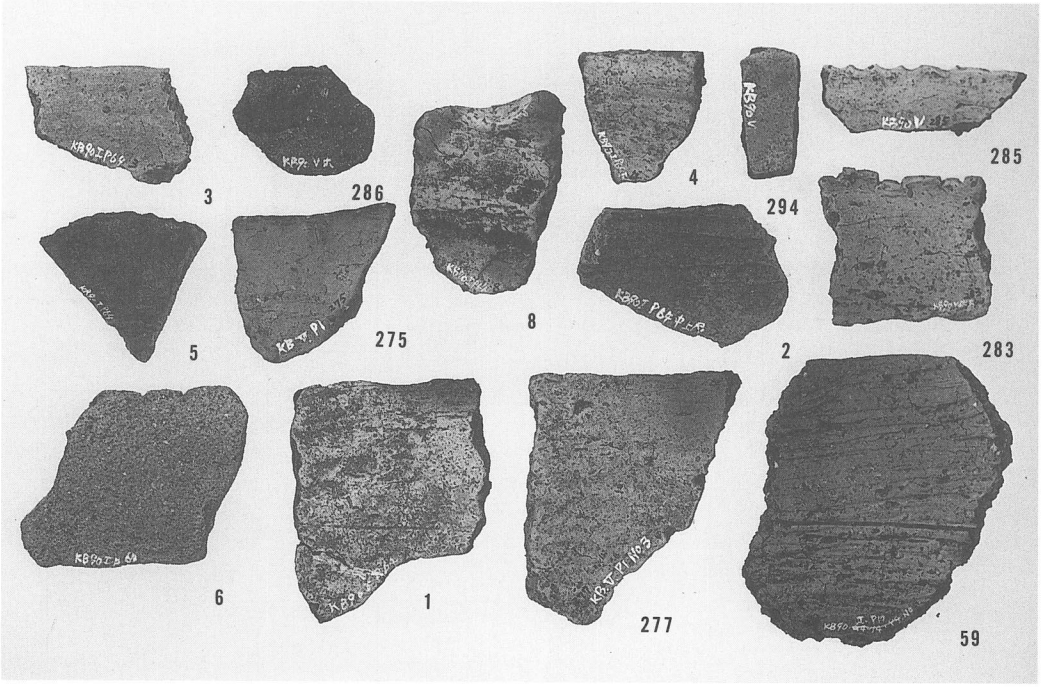

260（第Ⅳ区SK 5）

231（第Ⅲ区包含層)

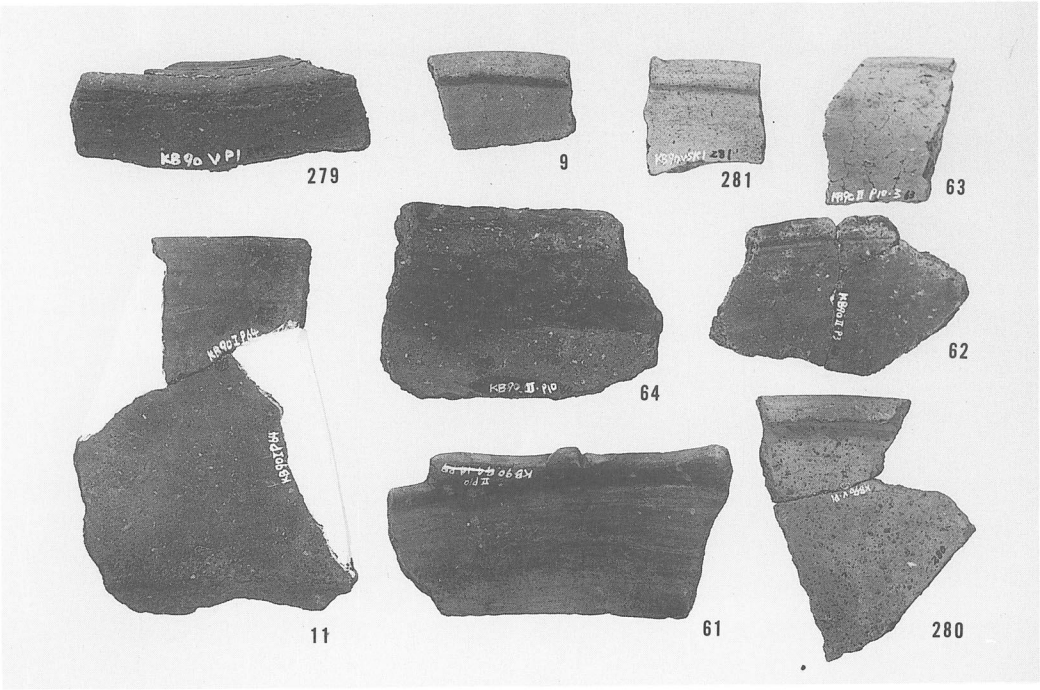
261（第Ⅳ区SK 5）

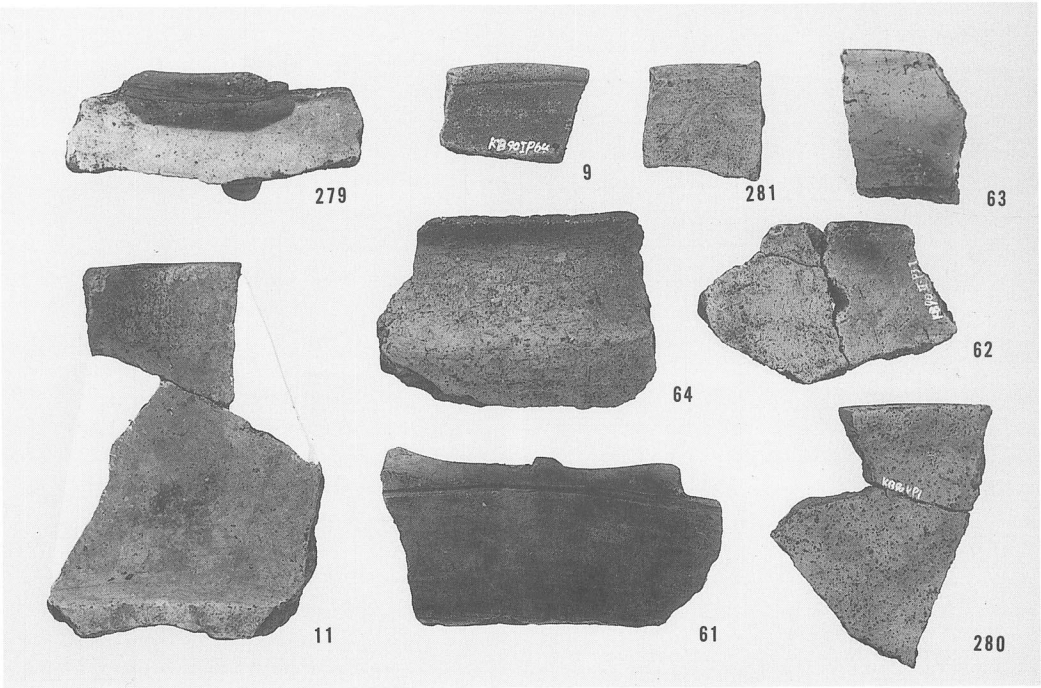



縄文晩期土器深鉢




同上　裏面




同上　裏面